

近菟集品目録

株式会社 古美術 瀬戸

目次

* 目録番号／作家名／作品名／頁数を記載しております。

1	円山応挙	柿に目白図	3	26	狩野伊川院	義経鴨越図	21	51	児玉果亭	後赤壁図	37
2	長沢芦雪	昇鯉図	4	27	狩野貴信	鯉瀧登図	21	52	野口幽谷	観音大士像	37
3	長沢芦雪	藤花雀之図	5	28	狩野休真	桜花二景図 双幅	22	53	長田雲堂	山閑円遊之図 大幅	38
4	曾我蕭白	楼閣山水図	6	29	山本梅逸	嚴桂八哥図	22	54	田中柏陰	偃山紅樹図	39
5	伊藤若冲	親子鶏図	7	30	森蘭齋	牡丹蝶猫図	23	55	木村立嶽	鞍馬僧正牛若丸之図	39
6	曾我蕭白	水墨山水図	8	31	岩井江琳	松下瑞鶴図	23	56	横山大観	暗香浮动	40
7	根本幽峨	雲龍・猛虎図 双幅	9, 10	32	池田孤邨	五節句 五幅対	24	57	下村観山	雨後の月	41
8	片山楊谷	朧月虎嘯図	11	33	酒井抱一	旭日大黒図	25	58	木村武山	観音	42
9	土佐光起	旭日鶏 三幅対	12	34	鈴木其一	槌に鼠図	25	59	木村武山	四季金地小色紙 四幅対	43
10	外山光実	原在中画 四季富士図 大幅	13	35	山本光一	两国橋月見図	26	60	前田青邨	紅白梅 額装	44
11	岸駒画	大徳寺剛堂賛 三茄子画賛	13	36	池大雅	絶壑懸泉	27	61	竹内栖鳳	翠柳宿鴉	45
12	長沢芦雪	高士喫茶図	14	37	浦上玉堂	寒山带雨	28	62	竹内栖鳳	新涼	46
13	森狙仙	雄鹿図	14	38	谷文晁	林和靖 赤壁図 双幅	29	63	須田剋太	田舎児二人	46
14	英一蝶	瀑布之図 小品	15	39	椿椿山	風中牡丹図 極大幅	30	64	山元春拳	雨中的秋	47
15	岡本豊彦	秋景山水之図 大幅	15	40	椿椿山	牡丹図 双幅	31	65	富田溪仙	洛東音羽瀧図	47
16	張月樵	官女図	16	41	高久靄厓	長松供寿図	31	66	谷口香嶠	狗兒戯球図	48
17	長沢芦洲	都美人	16	42	横井金谷	草庵驟雨図	32	67	木島桜谷	寒江	48
18	円満院祐常	竹画賛	17	43	方西園	桐菊錦鶏鳥図	32	68	川村曼舟	初夏海邊 大幅	49
19	松村景文	桃花小禽図	17	44	日根対山	箕面瀑布真景図	33	69	井口華秋	馬入川白雨土山の雨餘	50
20	英一蝶	平家物語油取図	18	45	日根対山	蓬萊飛雪	33	70	小早川秋声	瑞夜	51
21	鈴木其一	愛猫之図	18	46	西山完瑛	雷神図	33	71	小早川秋声	長崎夜景図	51
22	広渡巖斐	雪中松小禽図	19	47	菅井梅閣	紅梅石蘭図	34	72	原在泉	平安神宮真景図 大幅	52
23	小泉檀山	玄宗楊貴妃図	19	48	東東洋	瀑下飛燕図	34	73	酒井三良画	富安風生賛 カップバ欣然	52
24	大久保一丘	雪南天双雀図	20	49	山本梅逸	歳寒三友図	35	74	川端龍子	伏虎城(和歌山城)	52
25	蠣崎波響	唐美人図	20	50	山本梅逸	水墨華鳥	36				

75	倉田松濤	かちかち山図	53
76	丸投三代吉	らかん	53
77	渡辺省亭	桜に燕	54
78	広田百豊	峠の富士	54
79	栗原玉葉	初音	55
80	甲斐庄楠音	もたれたる女	56
81	梶原緋佐子	夏すがた	56
82	中聖武三行		57
83	後醍醐天皇	御宸翰和歌短冊	57
84	室町期弘法大師行状絵巻断簡		58
85	松永耳庵	多々益弁額装	58
86	豊臣秀吉	五月三日付消息	59
87	徳川家康	人はいさ和歌扇面	60
88	隠元隆琦	三行書	61
89	隠元隆琦	聖夫真命脈一行	61
90	即非如一	逸然性融画 維摩像画賛	62
91	即非如一	黄梅 置字大幅	62
92	宣如上人	五月十四日付目筆消息	63
93	貫名松翁	仏涅槃名号大幅	63
94	文化五年達如上人裏書	親鸞上人御絵伝	64
95	月舟宗胡	朶々湖山千古佛一行	65
96	寂庵	草衣不針復不綿一行	65
97	谷文晁	水墨山水図	66
98	仙厓義梵	祇園会画賛	66
99	仙厓義梵	富士画賛	67
100	仙厓義梵	沖の島画賛	67

101	頼山陽	取帙詩五絶三行	68
102	貫名松翁	寿	68
103	小林一茶	さくら句大短冊	69
104	河合曾良	蟬の聲俳句短冊	69
105	柳沢堯山賛	狩野融川画 撫子画賛	69
106	酒井抱一	雪柳句賛	69
107	酒井抱一	まつ一つ俳句色紙	70
108	横井也有	柳蛙句賛	70
109	和田呉山画	大田垣蓮月賛 走馬灯画賛	70
110	佐藤一斎	与真田幸良省軒説	71
111	佐藤一斎	言志叢録一節	71
112	幕末七卿	和歌短冊合装	72
113	土方歳三	六月十一日付森寺常安宛消息	73
114	明治天皇	國家	74
115	鍋島閑叟	萊蕪侯詩七絶三行	75
116	鳥義勇	秋江独釣図画賛	75
117	勝海舟	其寝無夢其覺無憂一行	76
118	勝海舟	戊辰懷旧詩五律	76
119	榎本武揚	莊子語二行	77
120	大隈重信	七言二句二行	77
121	福沢諭吉	学生就実業詩七絶三行	78
122	軍神広瀬武夫	公平守正家益菜一行	78
123	北大路魯山人	孟浩然春曉詩	79
124	山本空外	無有	79
125	犬養木堂	竹画賛扁額	80
126	大田垣蓮月	盃	80

127	(上) 土佐光貞(中) 円山応挙(下) 勝山琢舟図案		
127	盃三枚重鶴亀松竹		80
128	原在中	黄鶴樓図 岳陽樓図 屏風六曲一双	81
129	奥谷秋石	松竹梅鷹図 六曲一双	83
130	赤松麟作	羽衣・狸々 六曲一双 油彩屏風	85
131	鈴木松年	昔話 猿蟹合戦図 屏風六曲半双 中屏風	87
132	岡田華郷	月下獅子図 六曲半双	88
133	榊原紫峰	雪庭双鳩図 二曲半双	89
134	川合玉堂	鮎釣	90
135	高橋草坪画	貫名海屋書 阿房官之図 双幅	91
136	酒井唯一	四季草花図	92
137	谷文晁画	菊池五山賛 梅竹図 双幅	92
138	山本梅逸	紅桃双燕	93
139	田能村直入	松籟夜静図	93
140	頼山陽	吉野懐古詩七絶二行	94
141	梅田雲濱	吉田松陰宛七絶詩	94
142	栗原玉葉	童女図	95
143	鈴木松年	紅梅羣雀図	95
144	司馬遼太郎	竜馬がゆく額装	96
145	杉本健吉	臍問答	96
146	美濃屋製	京名家下絵松ノ木菓子盆 十二客	96
147	円山応挙	後赤壁山水大幅	97
	作家略歴		98 107



1 円山応挙 柿に目白図

紙本着色 箱入 本紙巾53.5×縦36.5
表具少オレ・少傷ミ 本紙少オレ
総丈巾57×縦127.5cm

百二十万
円
(1,200,000JPY)

2 長沢芦雪 昇鯉図

絹本着色 箱入 本紙巾36×縦98 総丈巾48×縦174.5cm 修復痕



(百八十万円)
1,800,000 JPY

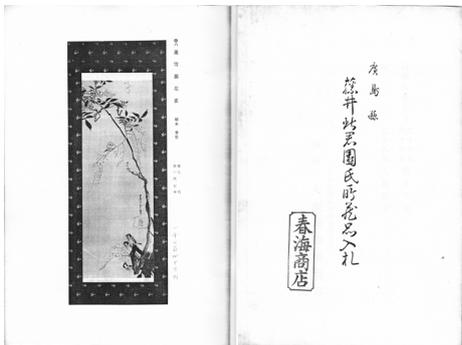
長沢芦雪
一〇四頁参照



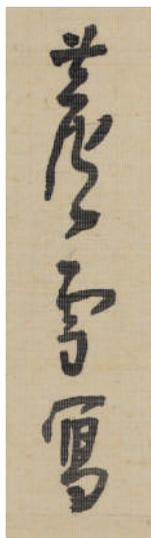
3 長 沢 芦 雪 藤花雀之図

絹本着色 二重箱入 本紙巾32×縦90.5 総丈巾45.5×縦183.5 cm
 『広島県藤井比君園氏所蔵品入札』目録（昭和八年十月）並『東京市・埼玉縣・群馬縣某家御所蔵品展観入札』目録（大正七年三月）並『古画総覧』所載

百八十万円
 (1,800,000 JPY)



『広島県藤井比君園氏所蔵品入札』目録



長沢芦雪
 一〇四頁参照



4 曾我蕭白 樓閣山水図

絹本水墨 箱入 本紙巾 70.5 × 縦 39.5 総丈巾 86.5 × 縦 141 cm

(四百五十万円
4,500,000 JPY)



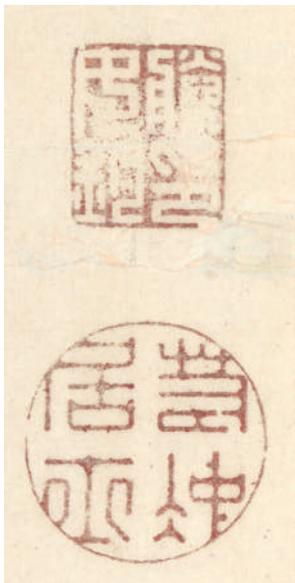
曾我蕭白
一〇二頁参照



伊藤若冲 親子鶏図

紙本水墨 二重箱入 本紙巾52.5×縦124.5 総丈巾67×縦198cm 修復痕

伊藤若冲
九八頁参照



(三百五十万
円)
3,500,000 JPY

6 曾我蕭白 水墨山水図

紙本水墨 箱入 本紙巾51×縦128 総丈巾63×縦178cm
 オレ・少傷ミ・虫穴



蛇足翁直苗曾我輝一画



曾我蕭白
 一〇二頁参照

三百八十万円
 (3,800,000JPY)

7 根本 幽 峨 雲龍・猛虎図 双幅

紙本水墨金泥 箱入 本紙各巾88×豎163 総丈各巾103×豎252cm 少オレ 扶桑相互銀行旧蔵



(二百五十万円)
2,500,000 JPY

根本幽峨
一〇四頁参照

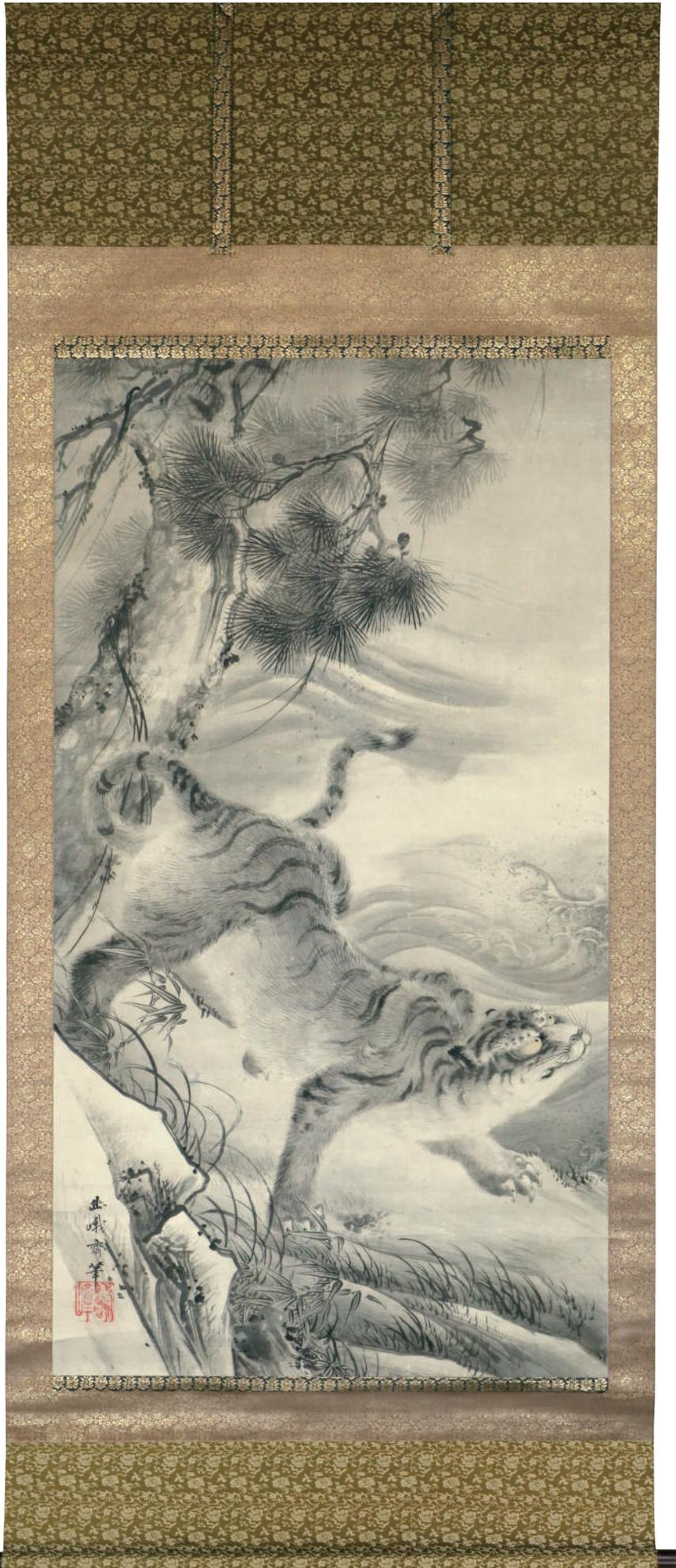


扶桑相互銀行旧蔵



店名	
品名	
番号	1

扶桑相互銀行



8 片山楊谷 隴月虎嘯図

絹本着色 箱入 本紙巾49×豎115 総丈巾66×豎195cm 天明二年（一七八二）二三歳 美品 佳品

（百八十万円）
1,800,000 JPY

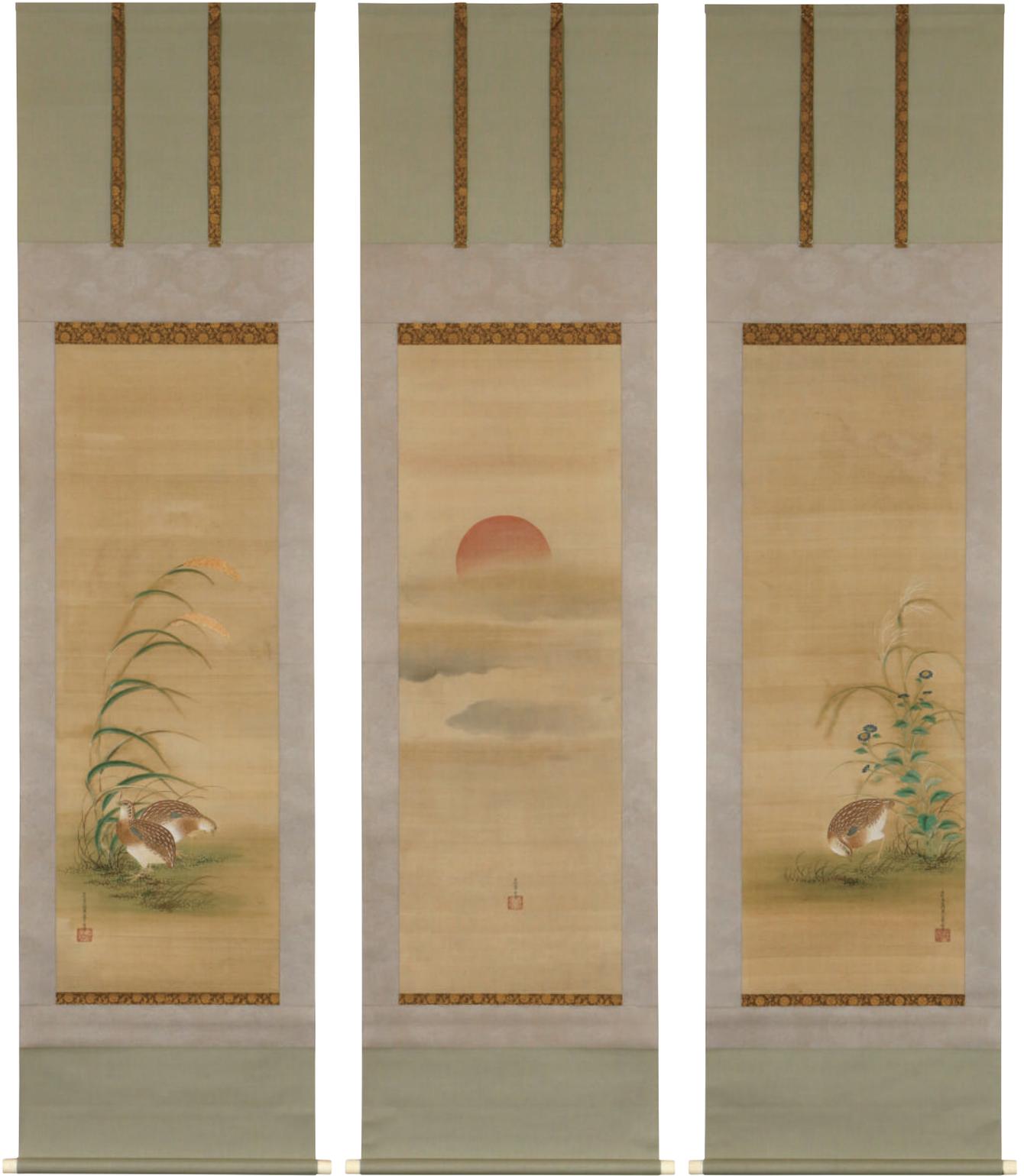


片山楊谷
九九頁参照



子黄李冬獲浦楊谷





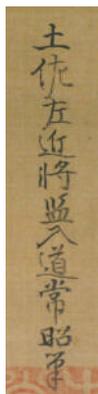
9 土佐光起 旭日鶉 三幅対

絹本着色 箱入

本紙 各 巾34.5× 豎102

三十五万円

総丈 各 巾46.5× 豎183cm 本紙少ヤケ (350,000JPY)



土佐光起
103頁参照



10 外山光実 贊画 原在中 四季富士図 大幅
 絹本着色 箱入 本紙 巾67.5×縦41.5 総丈 巾81.5×縦134cm
 二十五万円
 (250,000JPY)

外山光実
 103頁参照

原在中
 104頁参照



不二のね八いつ
 みるとても白
 妙の
 雪にそしろ
 時もわかれ
 ぬ
 光実



11 岸駒 画賛 大徳寺剛堂 三茄子画賛
 紙本水墨 渡辺秋谿箱書 本紙 巾54×縦32.5
 総丈 巾65.5×縦126.5cm 少シミ・少汚レ・少傷ミ
 十八万円
 (180,000JPY)

三並茄子 自何圃来
 不摧霜處 四時佳哉

岸駒
 100頁参照

大徳寺剛堂
 102頁参照

渡辺秋谿
 107頁参照

12 長 沢 芦 雪 高士喫茶図

紙本水墨淡彩 箱入 本紙巾35×縦92.5 総丈巾46.5×縦181 cm 少オレ



三十八万円
(380,000 JPY)

長沢芦雪
一〇四頁参照



13 森 狙 仙 雄鹿図

絹本着色 箱入 本紙巾40×縦107 総丈巾53×縦198 cm 本紙少オレ



三十五万円
(350,000 JPY)

森狙仙
一〇六頁参照



14 英 一 蝶 瀑布之図 小品

紙本水墨 箱入 本紙巾15×縦93.5 総丈巾25×縦159cm 少シミ・少傷ミ



英一蝶
一〇四頁参照



英一蝶

(150,000 JPY)

15 岡本 豊彦 秋景山水之図 大幅

紙本着色 野村雪江箱書 二重箱入 本紙巾75×縦167.5 総丈巾92.5×縦226cm 微少シミ



(180,000 JPY)

岡本 豊彦



岡本豊彦
九九頁参照

野村雪江
一〇四頁参照

豊彦秋景山水之図

一幀

秋景山水之図 岡本豊彦画 野村雪江書 一〇四頁参照

16 張月樵 官女図

絹本着色金泥 石河有鄰箱書 本紙巾54×縦132 総丈巾66.5×縦199cm 表具オレ・汚レ・少虫穴 本紙少オレ・微少シミ 佳品



三十八万円
(380,000 JPY)

張月樵
一〇三頁参照

石河有鄰
九八頁参照



17 長沢芦洲 都美人

絹本着色金泥 箱入 本紙巾36.5×縦98.5 総丈巾46×縦187cm 本紙少オレ 箱少傷ミ



十八万円
(180,000 JPY)



長沢芦洲
一〇四頁参照

18 円満院祐常 竹画賛

絹本水墨 箱入 本紙巾45.5×縦136 総丈巾56.5×縦193 cm 表具微少虫穴



八万五千元
(85,000 JPY)

わかやとの

千世のかはたけ

ふしとをみ

さも行末の

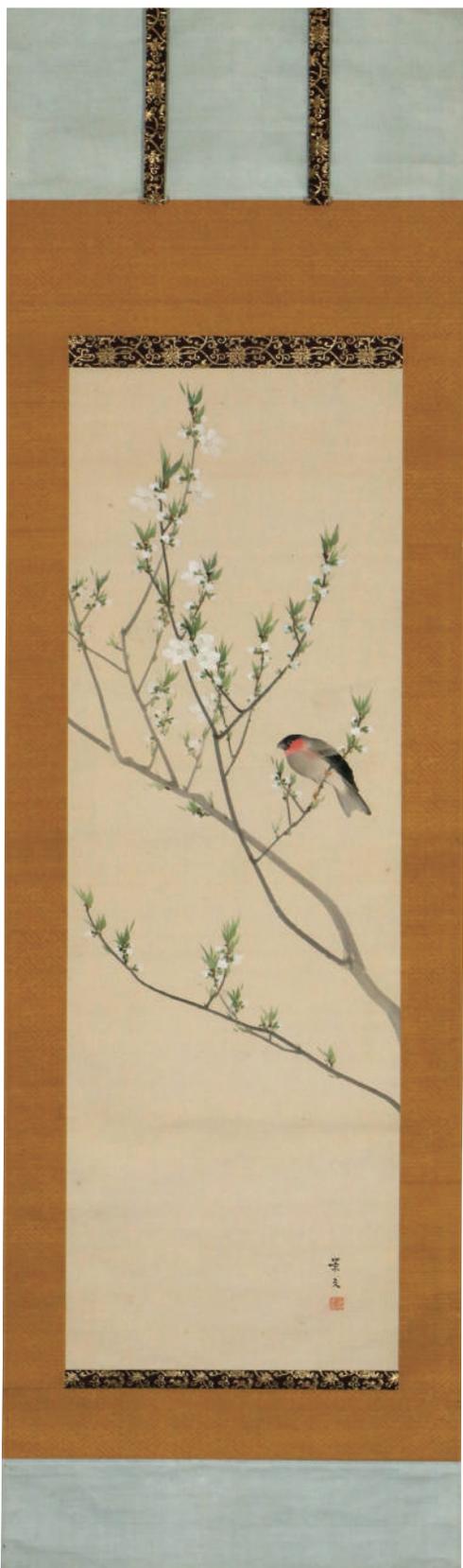
はるかなる哉



19 松村景文 桃花小禽図

絹本着色 箱入 本紙巾35×縦106 総丈巾48.5×縦196 cm 少オレ・微少虫穴

円満院祐常
九八頁参照



十二万
(120,000 JPY)



松村景文
一〇五頁参照



20 英 一 蝶 平家物語油取図

絹本着色 箱入

本紙 巾52.5×縦36.5 総丈 巾67×縦120cm 大倉好斎極

十八万円
(180,000JPY)

英一蝶
104頁参照

大倉好斎
99頁参照



21 鈴 木 其 一 愛猫之図

紙本着色 箱入

本紙 巾27.5×縦22 総丈 巾38.5×縦102cm

表具少傷ミ 本紙微少オレ

二十五万円
(250,000JPY)

鈴木其一
102頁参照



22 広渡巖斐 雪中松小禽図

紙本水墨淡彩 箱入 本紙巾41.5×縦138 総丈巾55×縦201.5cm 表具虫穴 シミ・少傷ミ



(180,000 JPY)

一〇五頁参照

巖斐



23 小泉檀山 玄宗楊貴妃図

絹本着色金泥 箱入 本紙巾46×縦123 総丈巾60.5×縦190cm 文化一〇年(一八一三) 四八歳



(450,000 JPY)

一〇〇頁参照

小泉斐寫





25 蛸崎波響 唐美人図

絹本着色金泥 箱入 本紙巾40×縦110 総丈巾43.5×縦188 cm 本紙少傷ミ・修復痕



蛸崎波響

蛸崎波響
九九頁参照

六十五万円
(650,000 JPY)



24 大久保一丘 雪南天双雀図

絹本着色金泥 箱入 本紙巾32×縦97 総丈巾43×縦184 cm 少シミ・少オレ・軸先少傷ミ



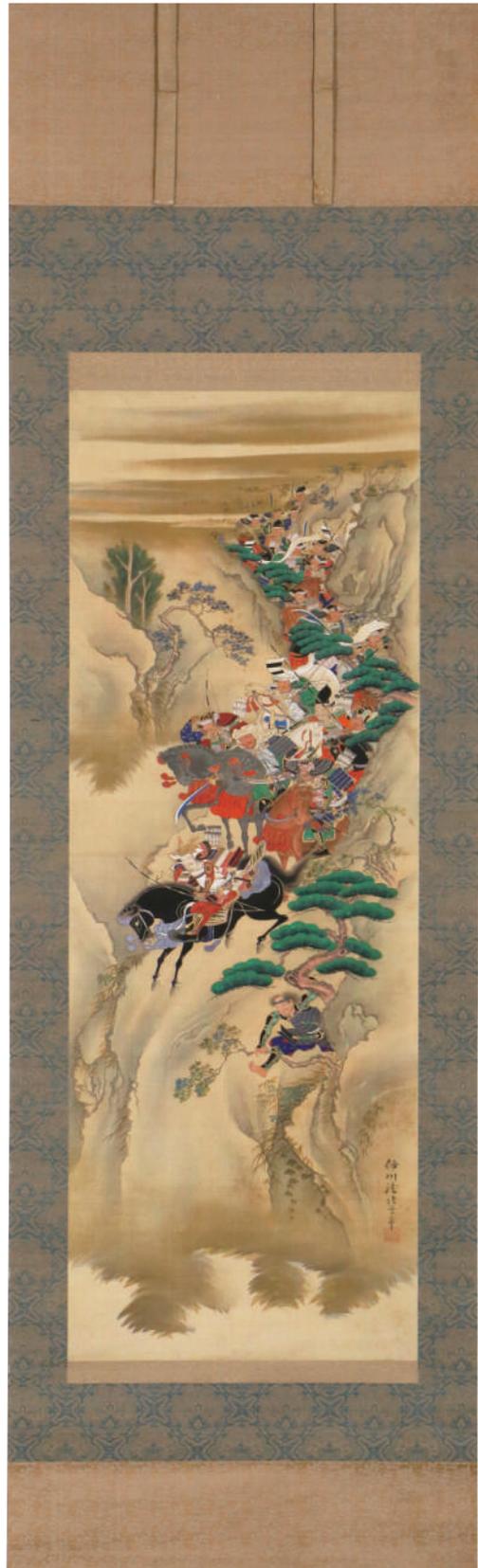
一丘寫

大久保一丘
九九頁参照

八十五万円
(850,000 JPY)

26 狩野伊川院 義経鴨越図

絹本着色金泥 三上参次箱書 本紙巾34×縦95 総丈巾46×縦189cm 表具微少傷ミ 本紙微少シミ



三十八万円
(380,000 JPY)

27 狩野貴信 鯉瀧登図

絹本着色 大澤正軒箱書 本紙巾43.5×縦110 総丈巾58.5×縦200.5cm 少傷ミ・少剥落 天保十五年(一八四四) 遠山友禄公御拝領品



十八万円
(180,000 JPY)



狩野伊川院
九九頁参照
三上参次
一〇六頁参照



(軸裏)

北吉軸従

遠山美濃守友詳公

天保十五年八月十二日

御拝領

狩野貴信
九九頁参照

遠山友禄
一〇三頁参照



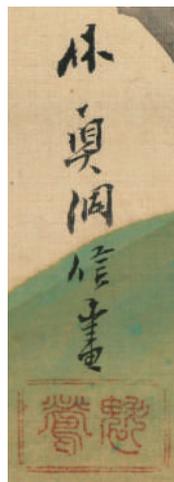
28

狩野休真
桜花二景図 双幅

絹本着色 箱入
本紙各巾35×縦96.5
総丈各巾47×縦179.5cm
表具少汚レ 本紙微少剥落
箱紐切レ 時代極上表具

十八万円
(180,000 JPY)

狩野休真
九九頁参照



29

山本梅逸
嚴桂八哥図

紙本着色 平尾竹霞箱書 二重箱入
本紙巾30.5×縦136
総丈巾43.5×縦204.5cm
嘉永元年(一八四八) 六六歳
本紙微少才レ

二十五万円
(250,000 JPY)

山本梅逸
一〇六頁参照

平尾竹霞
一〇五頁参照



梅逸畫史嚴桂八哥図





31 岩井江琳 松下瑞鶴図
 絹本着色 箱入 本紙巾 38.5×縦 111 総丈巾 49×縦 201.5 cm 少才レ 風帯傷ミ 佳品

(250,000 JPY) 二十五万円



岩井江琳
 九八頁参照



30 森蘭齋 牡丹蝶猫図
 絹本着色金泥 箱入 本紙巾 45×縦 110 総丈巾 55×縦 211 cm 本紙微少傷ミ

(450,000 JPY) 四十五万円



森蘭齋
 一〇六頁参照

32 池田孤邨 五節句 五幅対

絹本着色金泥 共箱

本紙各巾 30.5 × 縦 94 総丈各巾 42 × 縦 181 cm

本紙微少才シ・少虫穴・修復痕・少剥落

百二十万円
(1,200,000円)



33 酒井抱一 旭日大黒図

絹本着色 箱入 本紙巾32×縦75 総丈巾43×縦156.5cm 表具微少傷ミ 箱少傷ミ 前川文嶺極



酒井抱一 前川文嶺
一〇二頁参照 一〇五頁参照

(五十万
0,000
000 JPY)



34 鈴木其一 槌に鼠図

絹本着色金泥 箱入 本紙巾35.5×縦94 総丈巾48×縦181cm 本紙微少オレ



鈴木其一 一〇二頁参照

(二十五万
0,000
000 JPY)



山本光 一 两国橋月見図

紙本着色 箱入 本紙巾63×豎131 総丈巾76.5×豎204.5cm 明治二年 本紙修復痕

八十五万円
(850,000 JPY)



河内橋在一年秋分也
 阿部 貞吉

阿部 貞吉

聞金指氏曾藏華山道人所膏話図有放
 失意写予偶当過白田邨氏令予負摹
 馳言之責予之不当雖以不壳雲壤固辞之
 奈何懇情切需之難默止乎依不省不肖
 請隨誰次輒写之以補慰氏之遺憾之万一云尔
 時明治廿一年秋分戌子申也

山本光一
 一〇六頁参照



池大雅 絶壑懸泉

続本水墨 箱入 本紙巾49×縦126.5 総丈巾61.5×縦210cm 微少オレ 表具微少虫穴



池大雅
九八頁参照



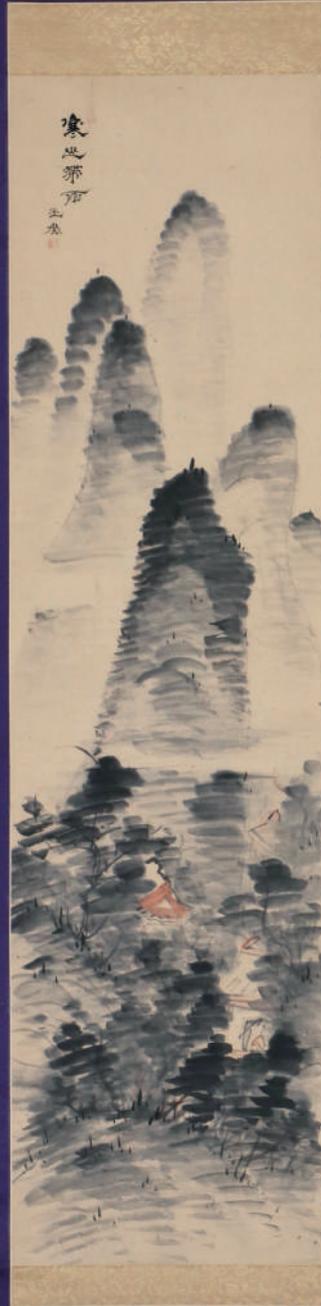
平安池森名寫
音



(八十五万円
850,000 JPY)

37 浦上玉堂 寒山带雨

紙本水墨淡彩 箱入 本紙巾30×豎116 総丈巾47×豎192 cm



寒山带雨



玉堂



(百八十万円
1,800,000 JPY)

浦上玉堂
九八頁参照

38 谷文晁 林和靖赤壁图 双幅

絹本着色 下条桂谷箱書 本紙各巾37.5×縦113.5 総丈各巾54×縦215.5cm 文政一〇年(一八二七) 六六歳 本紙少オレ 佳品

(七十五万円
750,000 JPY)



谷文晁
一〇三頁参照
下条桂谷
一〇〇頁参照

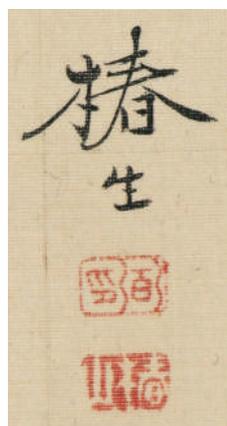




39 椿 椿 山 風中牡丹図 極大幅

絹本着色 丸山華岳箱書 本紙巾129×縦69.5 総丈巾133×縦173.5cm
 嘉永五年(一八五二)五二歳 本紙修復痕 箱少傷ミ
 『三州田原 廣中素介氏所藏品入札』目録(昭和四年十月)所載 「椿山会」展覧会出陳要有

百二十万 円
 (1,200,000 JPY)



「椿山会」展覧会出陳票

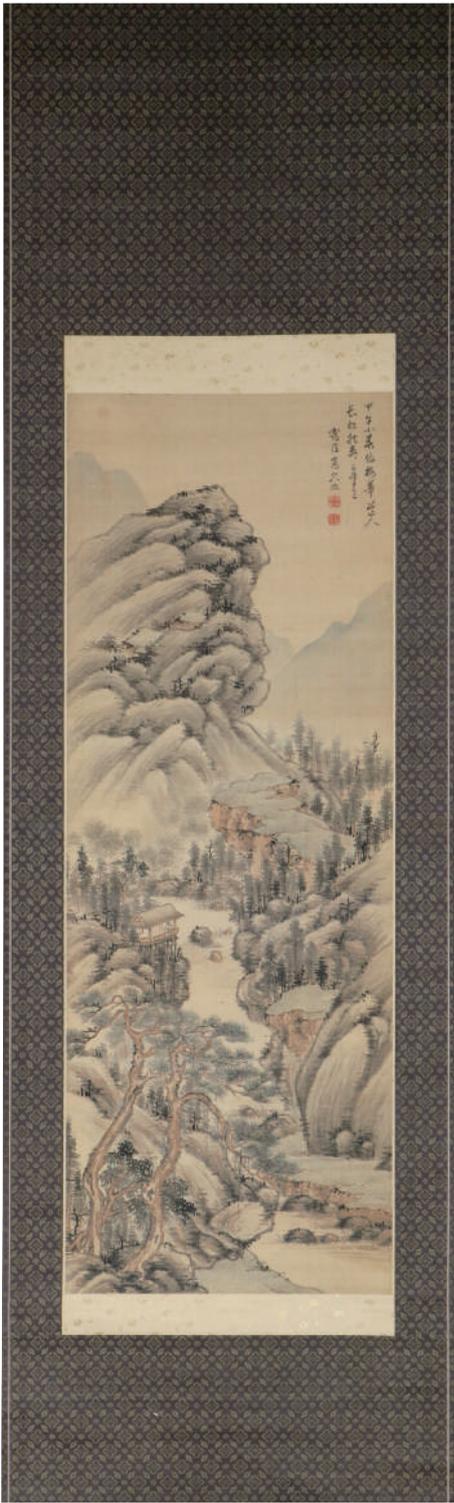


『三州田原 廣中素介氏所藏品入札』
 目録



椿椿山
 一〇三頁参照





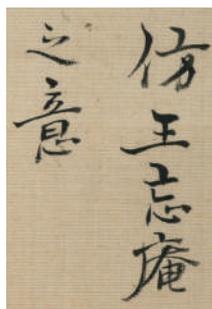
高久霽厓
一〇二頁参照

高森碎巖
一〇二頁参照



41 高久霽厓 長松供寿図
絹本着色 高森碎巖箱書
本紙巾39.5×縦111 総丈巾56×縦210cm
天保五年(一八三四)三九歳
微少シミ・少傷ミ 佳品
二十五万円
(250,000JPY)

椿椿山
一〇三頁参照



40 椿椿山 牡丹図 双幅
絹本着色 箱入
本紙各巾34×縦96
総丈各巾45.5×縦176.5cm
微少シミ・微少傷ミ・微少虫穴
八十五万円
(850,000JPY)

42 横井金谷 草庵驟雨図

絹本着色 敬堂箱書 本紙巾 33.5 × 縦 113.5 総丈巾 49 × 縦 190.5 cm 佳品



横井金谷
一〇六頁参照

(380,000 JPY) 三十八万円

横井金谷



43 方西園 桐菊錦鶏鳥図

紙本水墨 箱入 本紙巾 31 × 縦 106 総丈巾 45.5 × 縦 170.5 cm



方西園
一〇五頁参照

(150,000 JPY) 十五万円

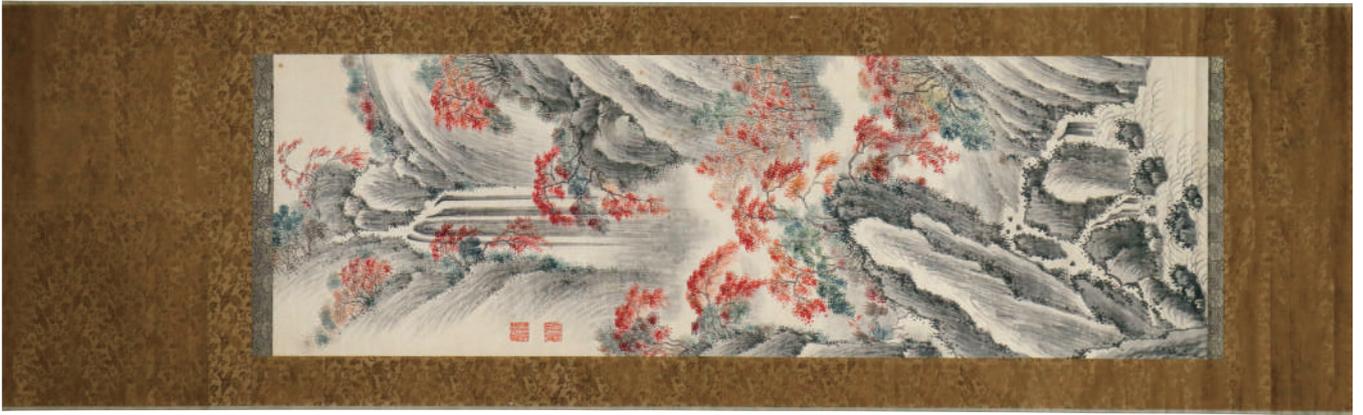
方西園



44 日根対山 箕面瀑布真景図

紙本着色 箱入 本紙巾43×縦132 総丈巾58×縦202cm
 表具少オシ・少虫穴 本紙少シミ・少オシ

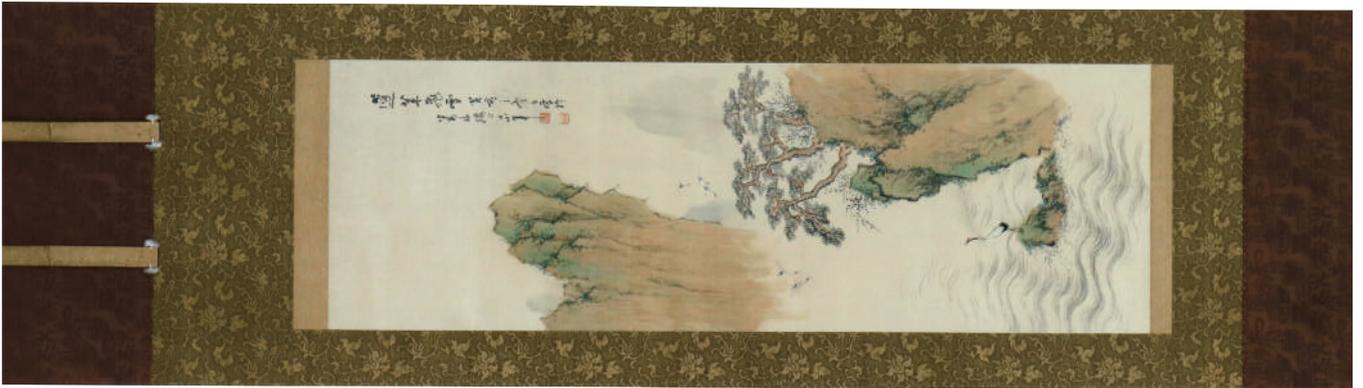
二十万
 (200,000円)



45 日根対山 蓬萊飛雪

紙本着色 箱入
 本紙巾26.5×縦80 総丈巾37.5×縦166.5cm
 文久三年(一八六三) 五二歳 美品

十二万
 (120,000円)



46 西山完瑛 雷神図

絹本着色舎泥 箱入
 本紙巾28×縦46
 総丈巾42.5×縦141.5cm

十五万
 (150,000円)



日根対山
 一〇五頁参照

西山完瑛
 一〇四頁参照

47 菅井梅閑 紅梅石蘭図

絹本着色 木下翠雨箱書 本紙巾46.5×縦120 総丈巾60.5×縦208.5cm 本紙オレ

佳品



四十五万円
(450,000 JPY)

菅井梅閑 木下翠雨
一〇二頁参照 一〇〇頁参照



48 東東洋 瀑下飛燕図

紙本水墨淡彩 箱入 本紙巾28.5×縦88 総丈巾38.5×縦172cm 少シミ・少オレ 本紙微少傷ミ



十二万円
(120,000 JPY)

東東洋 九八頁参照



49 山本梅逸 歲寒三友圖

絹本水墨 共箱 本紙巾74×豎146 総丈巾91.5×豎215cm 嘉永五年（一八五二）七〇歳 本紙微少シミ



歳寒三友圖
梅逸畫

梅逸
[Red Seal]
[Red Seal]

(百二十万
200,000
JPY)

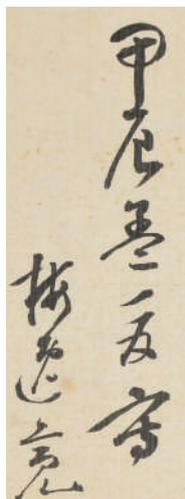
50 山本梅逸 水墨華鳥

絹本水墨 共箱 二重箱入 本紙巾57.5×豎143.5 総丈巾67×豎209.5cm 弘化元年（一八四四）六二歳 本紙微少シミ 松寿館並野呂静旧蔵 佳品

（百1,000,000円）

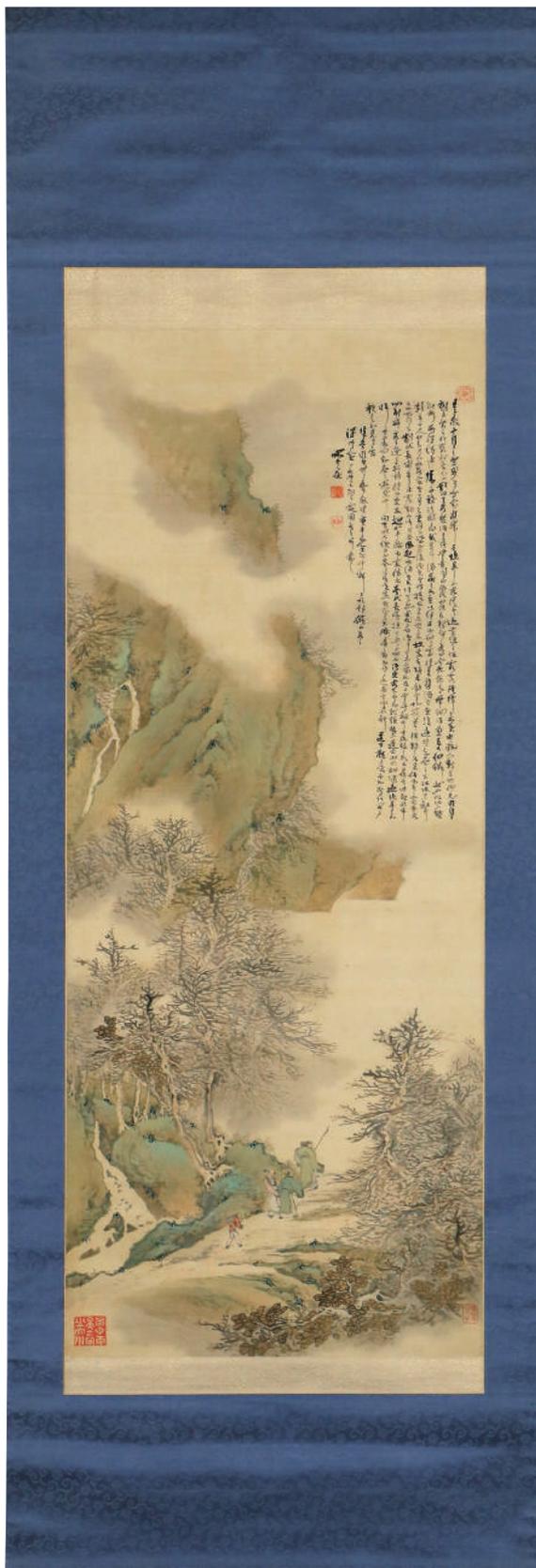


山本梅逸 一〇六頁参照
野呂静 一〇四頁参照



51 児玉果亭 後赤壁図

絹本着色 共箱 二重箱入 本紙巾51×縦126 総丈巾65.5×縦207cm 明治三十三年 五八歳
 児玉果亭・児玉美介・速水鋭一書翰有 野呂静旧蔵 佳品



児玉果亭
 一〇一頁参照
 野呂静
 一〇四頁参照

52 野口幽谷 観音大士像

絹本着色金泥 益頭峻南箱書
 本紙巾53.5×縦135 総丈巾69×縦230cm 明治二六年 六九歳 幽谷翁追善展覽会出陳作 出陳票有



二十八万円
 (280,000JPY)

三十八万円
 (380,000JPY)

和樂堂観音大士像
 幽谷翁追善展覽会出陳票

観音大士翁
 三上菊次郎君

幽谷野口續拝寫



野口幽谷
 一〇四頁参照

益頭峻南
 一〇五頁参照

53 長田雲堂 山閑凹遊之図 大幅

紙本着色 箱入 本紙巾95×豎175 総丈巾113.5×豎211.5cm
 明治四三年 六三歳 少シミ

蔚鬱高松風颯然涼陰日午
 露花鮮清茶試水呼壺煮好
 是山尉第二泉

明治庚戌清和月仲濬作於觀青山房

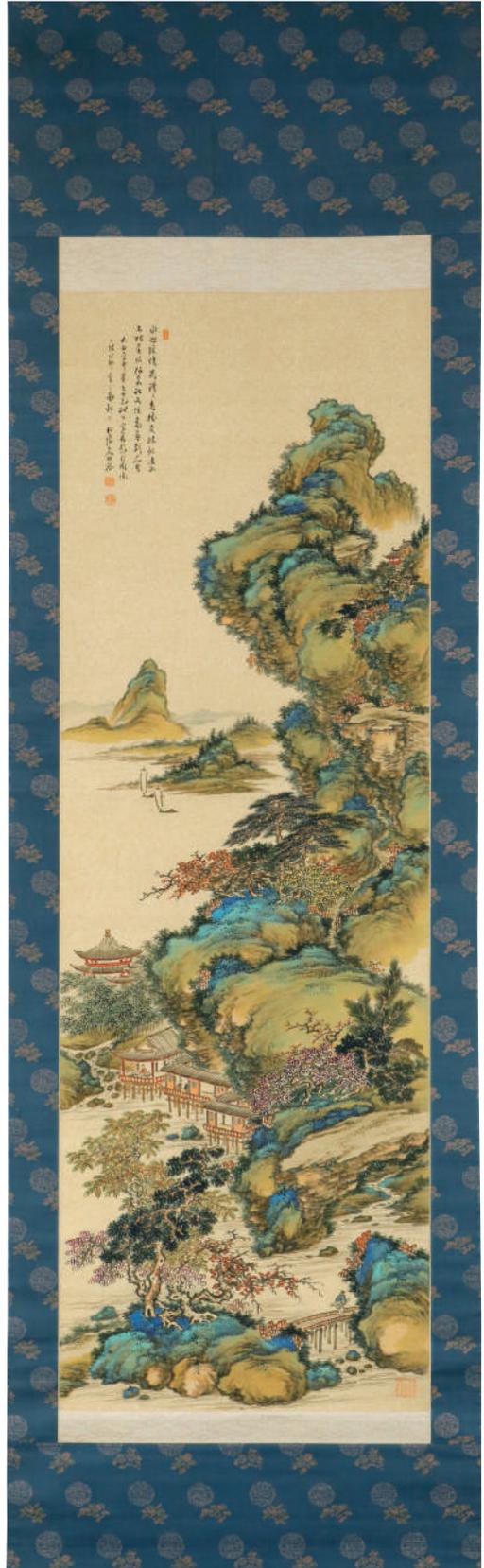
雲堂彝

(35,500,000 JPY)



54 田中柏陰 儂山紅樹図

絹本着色金砂子 共箱 二重箱入 本紙巾52×縦158 総丈巾67×縦232 cm 大正六年 五二歳 少オレ



55 木村立嶽 鞍馬僧正牛若丸之図

絹本着色 箱入 本紙巾54.5×縦138 総丈巾68.5×縦194.5 cm 少傷ミ



三十八万円
(380,000 JPY)

田中柏陰
一〇三頁参照



五十五万円
(550,000 JPY)

木村立嶽
一〇〇頁参照



56 横山大観 暗香浮動

絹本着色金泥 共箱 二重箱入 本紙巾40.5×縦124 総丈巾55×縦215cm 本紙微少シミ 横山大玄極 横山大観記念館鑑定登録有

三百八十万円
(3,800,000 JPY)



横山大観
一〇七頁参照

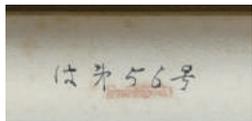
横山大玄
一〇七頁参照



「横山大玄極」



『横山大観記念館鑑定登録』



57 下村 観山 雨後の月

絹本着色金泥 共箱 二重箱入 本紙巾51×縦144.5 総丈巾67×縦229cm 美品 東美鑑定評価機構鑑定委員会鑑定証 根岸製表具

(三百五十万円
3,500,000 JPY)



下村 観山
一〇一頁参照



58 木村武山 観音

絹本着色金泥 共箱 二重箱入 本紙巾41×縦129 総丈巾55.5×縦222cm

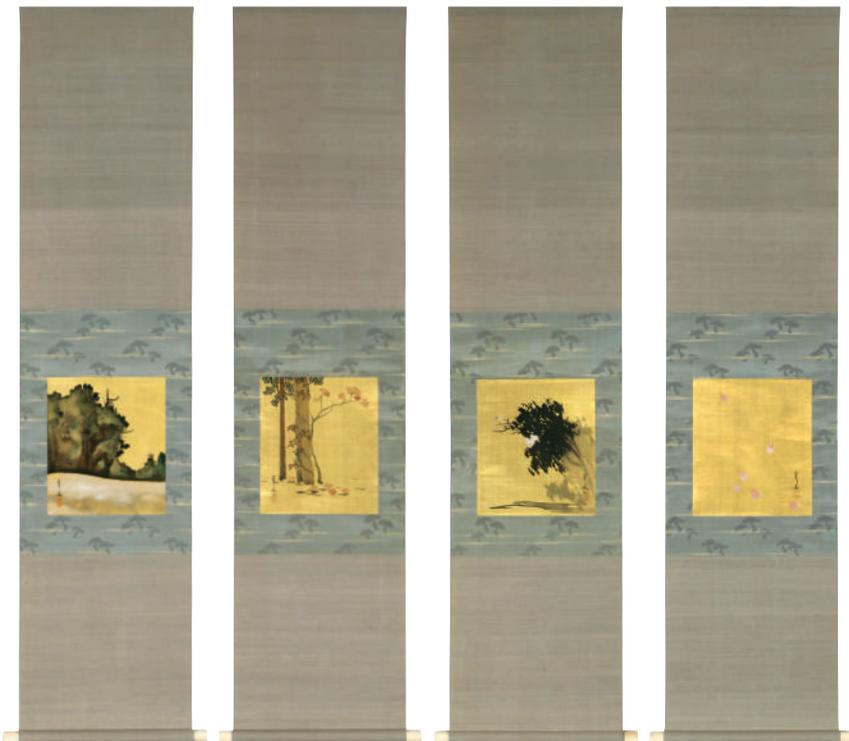
八十五万円
(850,000 JPY)



木村武山
一〇〇頁参照



木村武山
一〇〇頁参照



59 木村武山 四季金地小色紙 四幅封

金地絹本着色 二重箱入
本紙各巾18×豎21 総丈各巾26.5×豎113 cm

三十八万円
(380,000 JPY)



60 前田青邨 紅白梅額装

紙本着色金泥 共箱蓋有
 本紙巾76×縦44 総丈巾103×縦71.5cm
 東美鑑定評価機構鑑定委員会鑑定証 美品

(二百五十万円
 2,500,000 JPY)



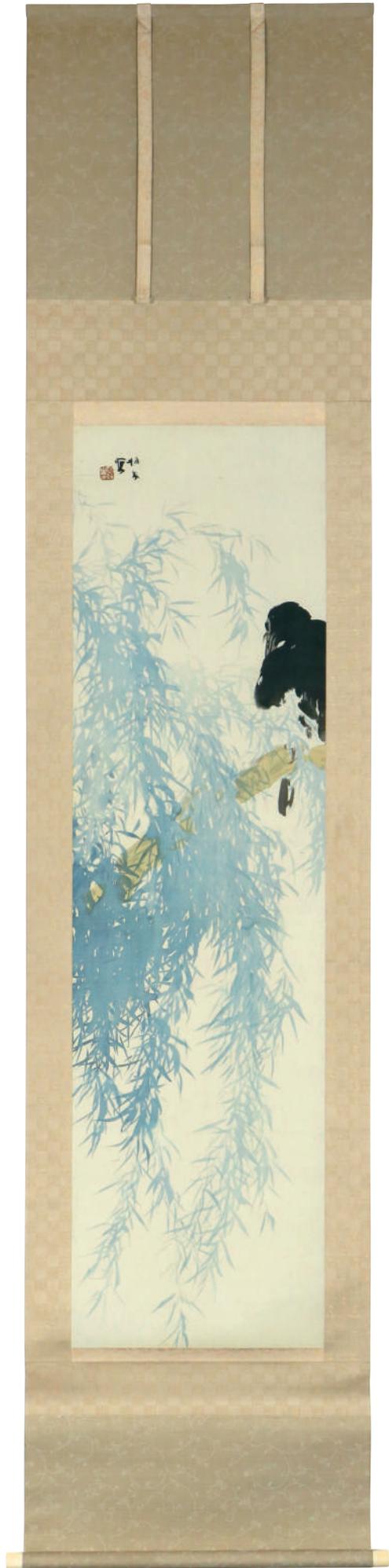
前田青邨
 一〇五頁参照



61 竹内 栖鳳 翠柳宿鴉

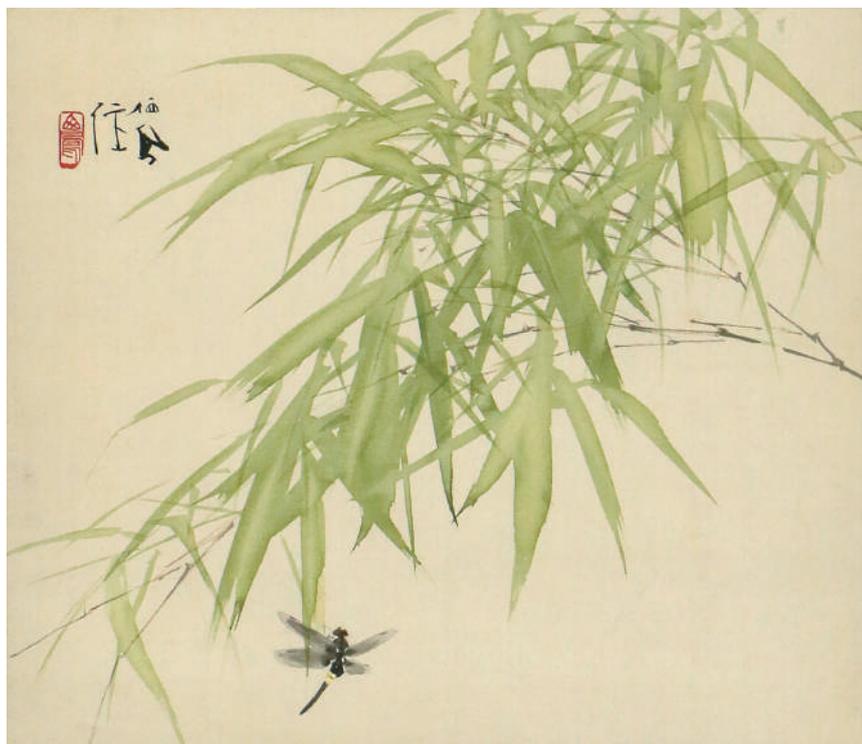
絹本着色 共箱 二重箱入 本紙巾 36 × 縦 132 総丈巾 49.5 × 縦 222 cm 表具微少シミ 高島屋美術部口貼有 東美鑑定評価機構鑑定委員会鑑定証

(百八十万円
1,800,000 JPY)



〔高島屋美術部口貼〕





新涼

竹内栖鳳



竹内栖鳳
102頁参照

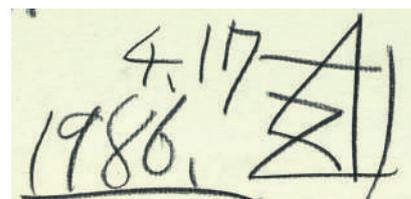
七十五万円
(750,000JPY)

62 竹内栖鳳 新涼

絹本着色 共箱 二重箱入
本紙 巾41.5×縦35.5 総丈 巾56×縦129cm
美品 臯月表玄製表具



須田剋太
102頁参照



須田剋太一九八六年四月十七日
田舎児二人



63 須田剋太 田舎児二人

紙本着色・パステル・コラージュ 共箱
本紙 巾43×縦27.5 総丈 巾57×縦97.5cm
昭和61年4月17日 80歳 本紙微少オレ

四十五万円
(450,000JPY)

64 山元春挙 雨中の萩

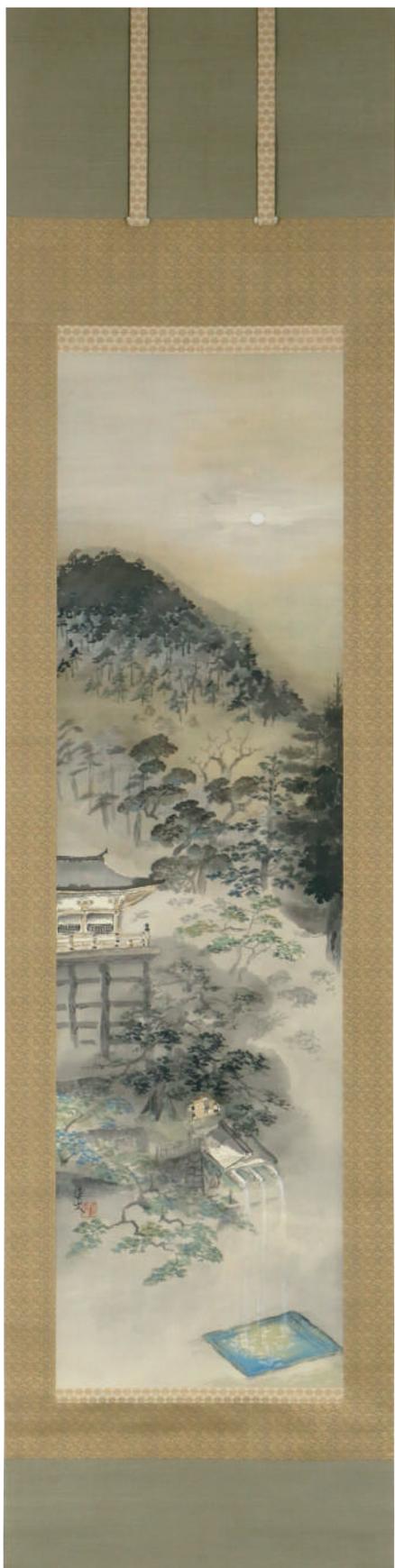
絹本着色 共箱 本紙巾43.5×縦125 総丈巾57×縦217cm 昭和七年 六二歳



山元春挙
一〇六頁参照

65 富田溪仙 洛東音羽瀧図

絹本着色 共箱 二重箱入 本紙巾35×縦129.5 総丈巾48.5×縦213cm



富田溪仙
一〇二頁参照

三十八万円
(380,000 JPY)



山元春挙
一〇六頁参照

三十八万円
(380,000 JPY)



洛東音羽瀧図

富田溪仙
一〇二頁参照

66 谷口香嶠 狗兒戲球図

紙本着色 共箱 本紙巾 24.5 × 縦 122 総丈巾 36.5 × 縦 207 cm



谷口香嶠
一〇三頁参照

狗兒戲球圖

香嶠畫



香嶠畫

(180,000 JPY) 十八万八千円

67 木島桜谷 寒江

絹本着色 共箱 二重箱入 本紙巾 26 × 縦 128 総丈巾 38.5 × 縦 211 cm 美品



木島桜谷
一〇一頁参照

寒江

木島

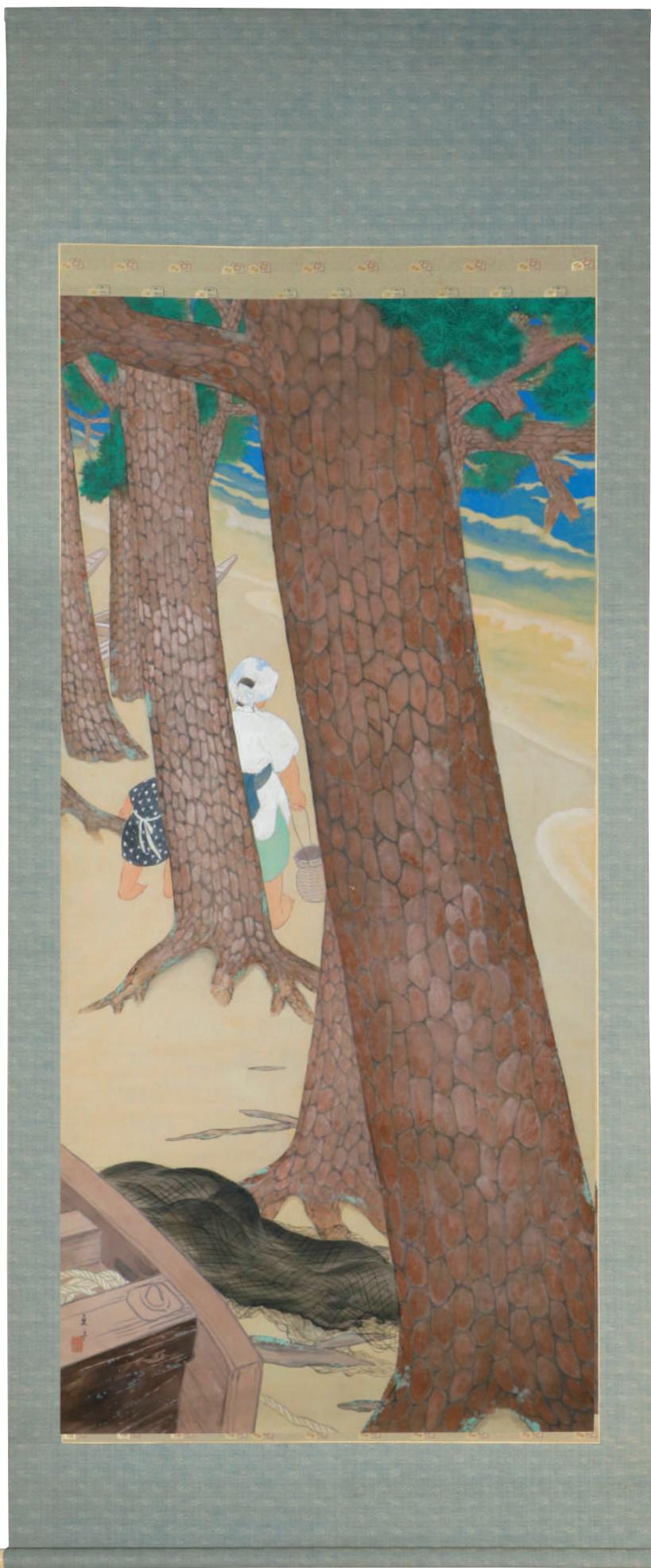
木島

(180,000 JPY) 十八万八千円

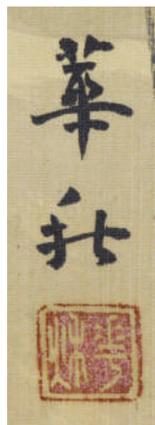
川村曼舟 初夏海邊 大幅

絹本着色 共箱 二重箱入 本紙巾 85×豎 182 総丈巾 102.5×豎 252.5 cm

(850,000 JPY) 八十五万円



川村曼舟
一〇〇頁参照



69 井口華秋
馬入川白雨 土山の雨餘 甘酒茶屋
蒲原の麦秋 四幅対

絹本着色 共箱 二重箱入 本紙 各 巾27×豎132.5
総丈 各 巾39.5×豎203cm 本紙微少シミ 佳品

二十五万円
(250,000JPY)

井口華秋
98頁参照

70 小早川秋声 瑞夜

絹本着色 共箱 本紙巾 27.5 × 縦 126 総丈巾 31.5 × 縦 187 cm



(950,000 JPY) 九十五万円

71 小早川秋声 長崎夜景図

絹本着色 箱入 本紙巾 18.5 × 縦 58 総丈巾 31.5 × 縦 148.5 cm



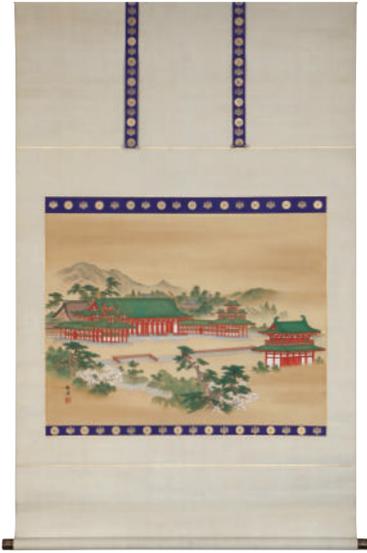
(180,000 JPY) 十八万円

小早川秋声
一〇一頁参照

72 原 在 泉 平安神宮真景図 大幅

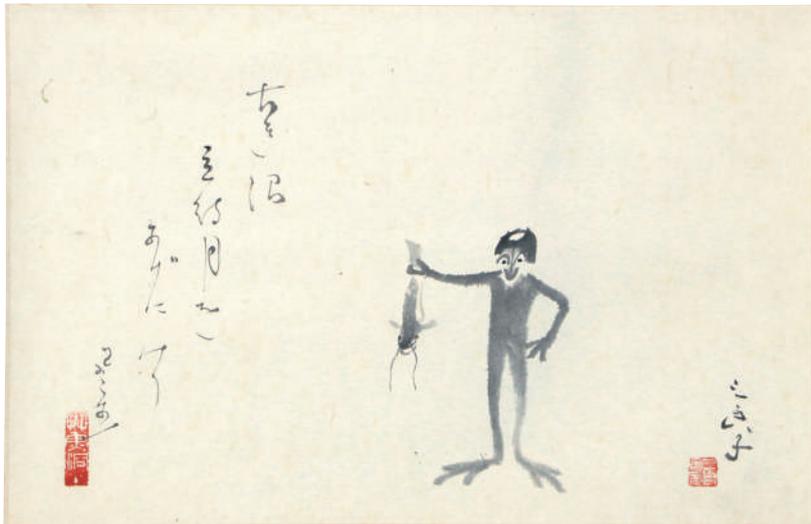
絹本着色金泥 原田西晴箱書
 本紙 巾88×縦67 総丈 巾106.5×縦174cm
 少オレ・少汚レ

二十五万円
 (250,000JPY)



原田西晴 原在泉
 105頁参照 104頁参照

酒井三良 富安風生
 一〇一頁参照 一〇三頁参照



73 酒井三良 富安風生 画 賛 カッパ欣然
 紙本水墨 共箱 本紙 巾40×縦25.5 総丈 巾42×縦103cm
 表具少オレ・微少傷ミ 本紙微少シミ

古き沼
 立待月を
 あげにけり

十二万円
 (120,000JPY)

74 川 端 龍 子 伏虎城(和歌山城)

絹本着色 共箱 二重箱入
 本紙 巾26×縦27.5
 総丈 巾65.5×縦143cm

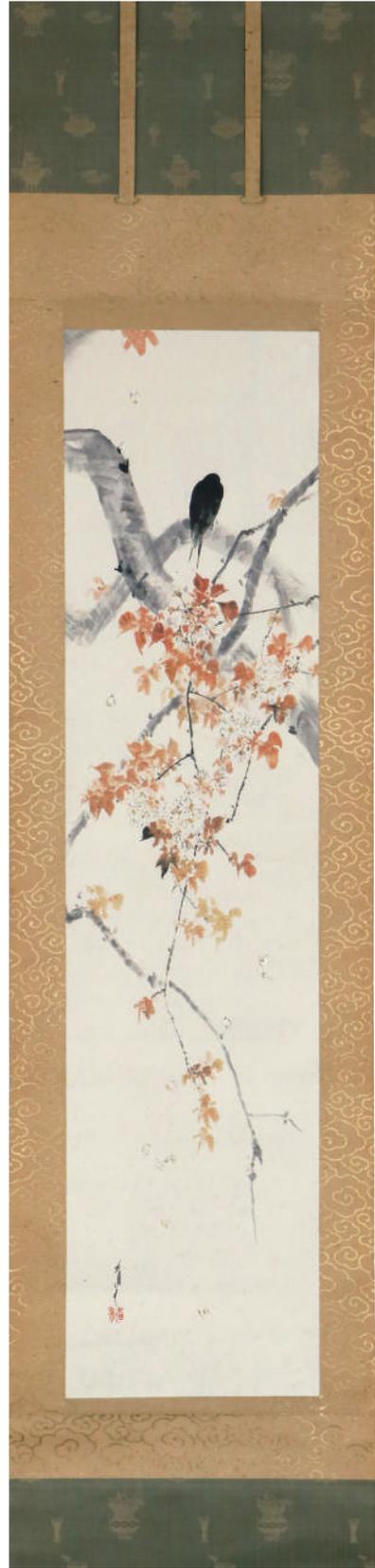
二十五万円
 (250,000JPY)



川端龍子
 一〇〇頁参照

77 渡辺省亭 桜に燕

紙本着色 共箱 本紙巾29.5×縦125.5 総丈巾43×縦211.5cm



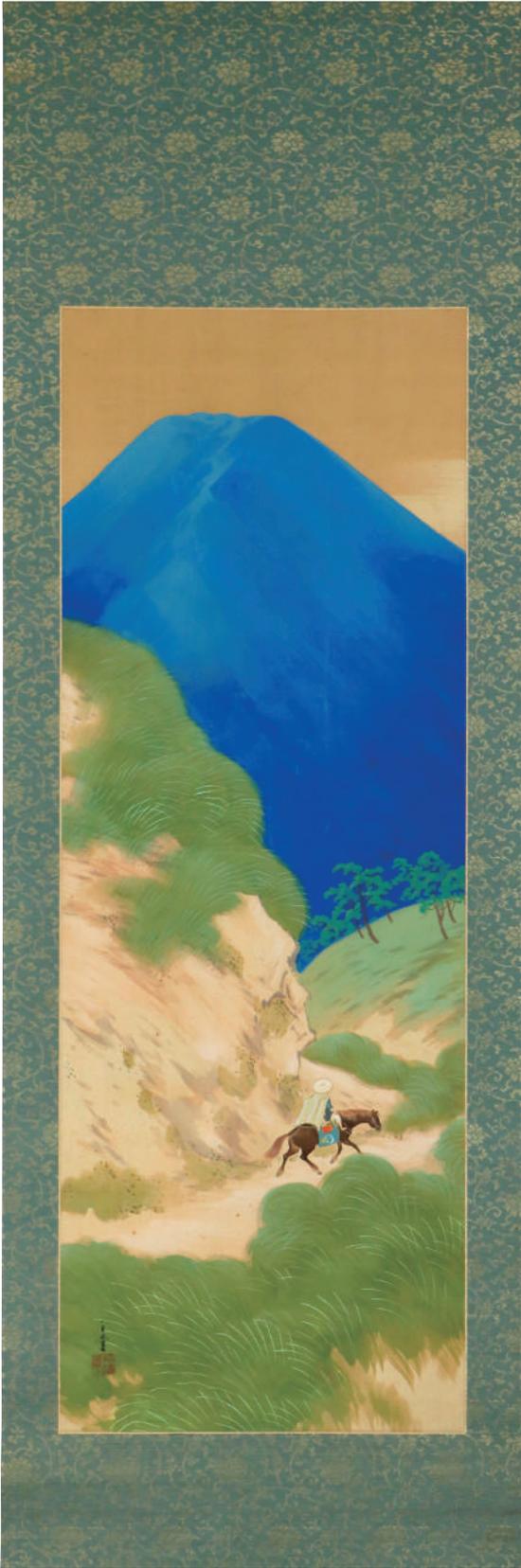
(550,000 JPY)

渡辺省亭
一〇七頁参照



78 広田百豊 峠の富士

絹本着色 共箱 本紙巾51×縦143 総丈巾66.5×縦207cm 本紙微少シミ 佳品



(150,000 JPY)

広田百豊
一〇五頁参照



79 栗原玉葉 初音

絹本着色金泥 共箱 本紙巾41.5×縦115.5 総丈巾54.5×縦199cm 微少オレ 本紙微少シミ

(八十五万円
850,000 JPY)



栗原玉葉
一〇〇頁参照



甲斐庄楠音
九九頁参照
梶原緋佐子
九九頁参照

大正八年作
五月楠音画



80 甲斐庄楠音 もたれたる女

絹本着色金泥 本紙 巾27×縦23.5 総丈 巾46.5×縦40cm 大正8年5月 24歳

百二十万円
(1,200,000JPY)

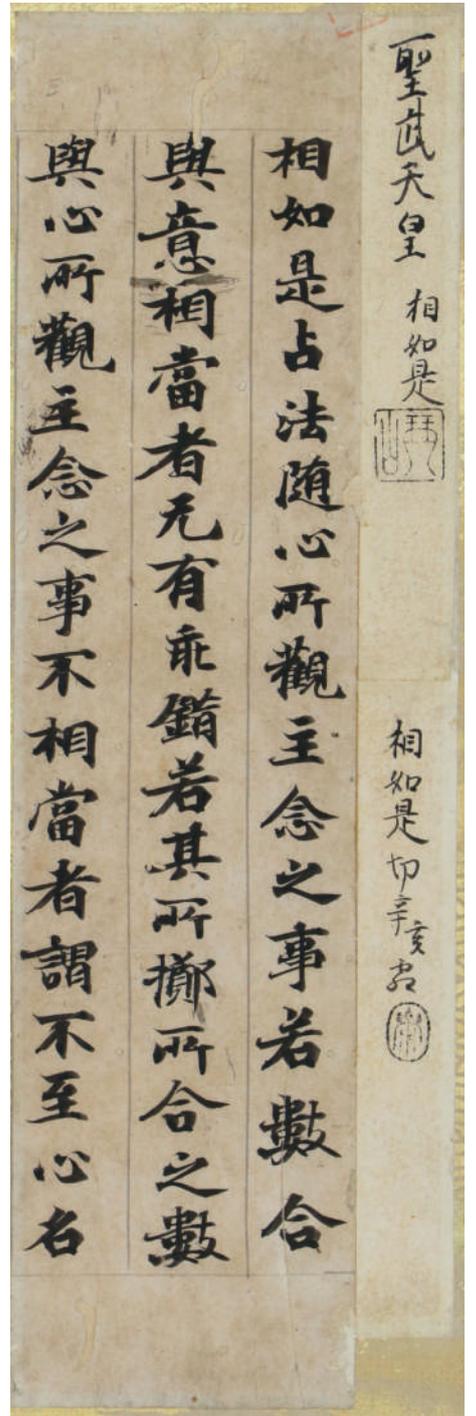


81 梶原緋佐子 夏すがた

絹本着色金泥 共箱 本紙 巾50×縦44 総丈 巾64×縦146cm 少汚レ 微少剥落

五十五万円
(550,000JPY)





聖武天皇 相如是



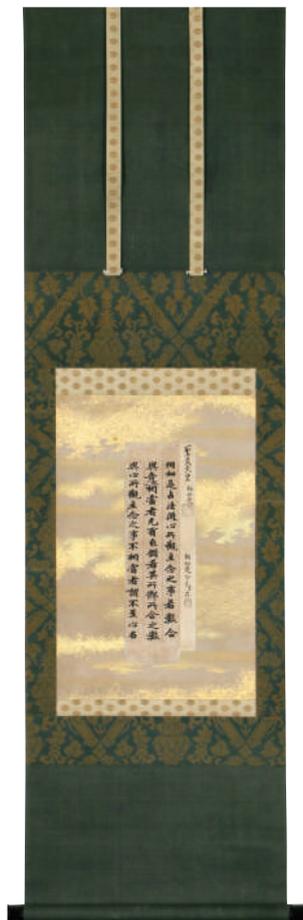
相如是 切手 亥 卯

相如是占法随心所觀主念之事若數合
與意相當者无有乖錯若其所擲所合之數
與心所觀主念之事不相當者謂不至心名

相如是占法随心所觀主念之事若數合
與意相當者无有乖錯若其所擲所合之數
與心所觀主念之事不相當者謂不至心名

82 中聖武三行

紙本 箱入 本紙巾7×豎27.5
総丈巾33×豎117cm 古筆了榮極
表具少傷ミ 本紙少虫穴・修復痕
八十五万円
(850,000JPY)



83

後醍醐天皇
御宸翰和歌短冊

紙本 吉澤義則箱書 太巻 本紙巾5×豎35
総丈巾30.5×豎156cm 本紙ヤケ
「陽明文庫」伝来 風早公雄極
三十八万円
(380,000JPY)



君か代をのへの小松にくらふれは
いく木の千世かあ八んとすらむ



後醍醐天皇 風早公雄
一〇〇頁参照 九九頁参照

吉澤義則
一〇七頁参照

大師講經一座の間に威験万方に及いまた結願に
及ざるに蘇生の族道にみたり夜闇忽に變し
て日光赫々たり速疾の靈応嚴重の巨益三
国にも其例すくなし千古にも其ためし
希なる事とぞ覺侍る



84 室町期 弘法大師行状絵巻断簡

紙本着色 箱入 本紙 巾47×縦31

総丈 巾59.5×縦114cm 表具少汚レ 本紙少オレ

五十五万円
(550,000JPY)



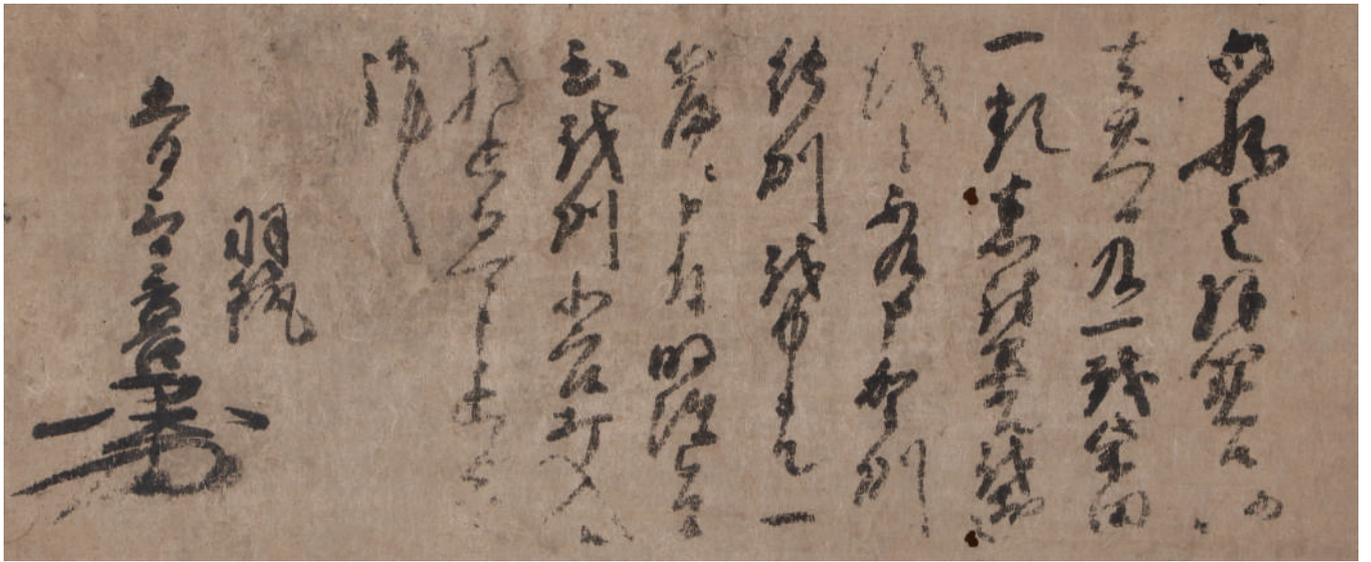
松永耳庵
105頁参照



85 松永耳庵 多々益弁額装

紙本 本紙 巾65.5×縦32 総丈 巾87.5×縦54.5cm

二十五万円
(250,000JPY)



御状令拝閱候 仍
去廿一日及一戦柴田

一類悉討果候 越前之

儀者不及申賀州能州越中まで一

篇二申付明隙候間

至越州北庄打入候

猶近日可申述候 恐々

謹言

羽筑

五月三日秀吉(花押)

86 豊臣秀吉 五月三日付消息

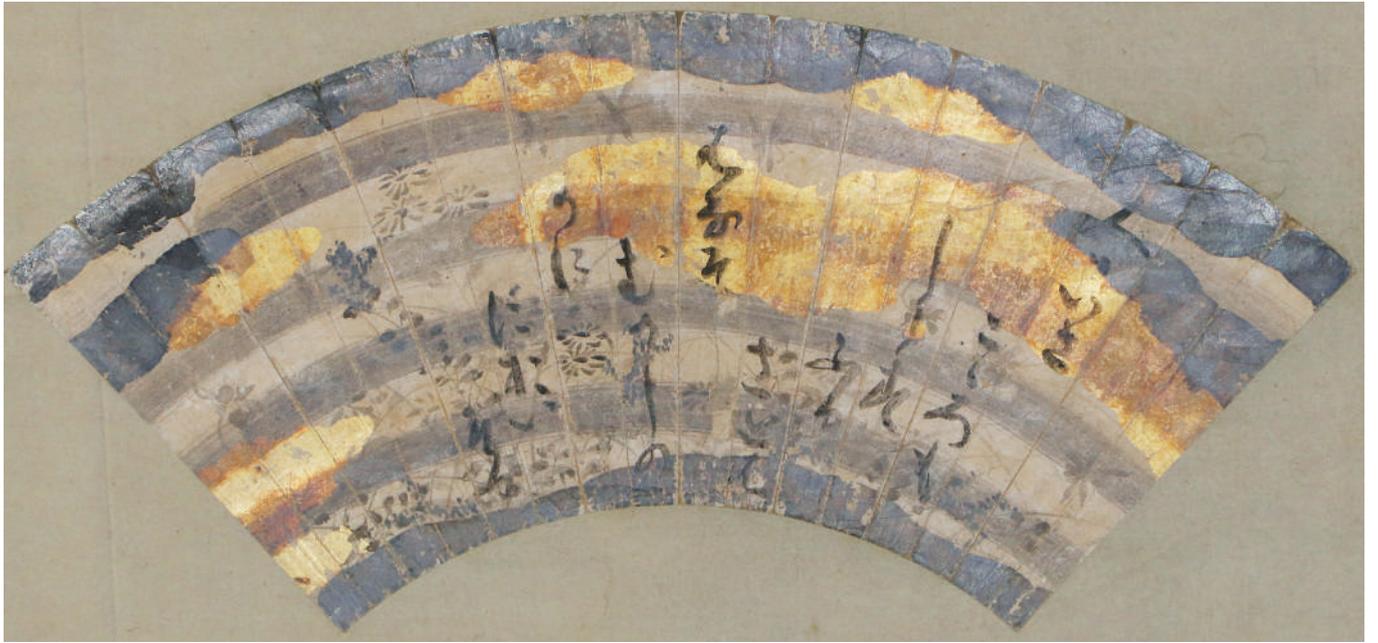
紙本 箱入 本紙巾 35×縦14.5 総丈巾 47.5×縦98 cm

虫穴

(百八十万円
1,800,000 JPY)



豊臣秀吉
一〇三頁参照



87 徳川家康 人はいさ 和歌扇面

金銀地紙本 箱入 本紙巾43.5×縦16.5 総丈巾57.5×縦109cm 少オレ 表具少虫穴

(百二十万
1,200,000 JPY)

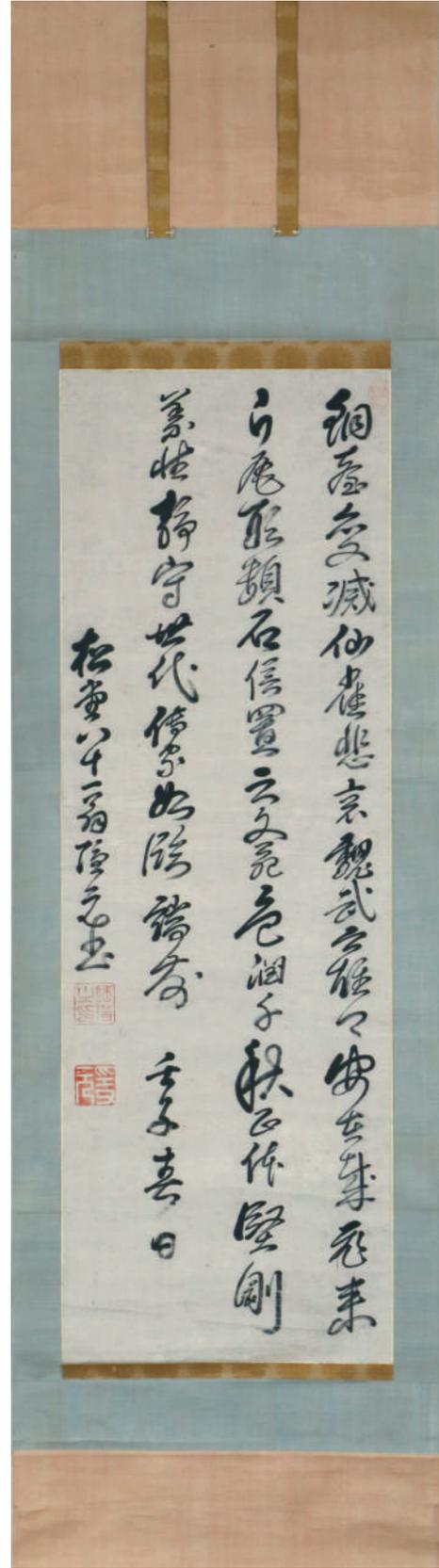
人はいさ
 こころも
 しらす
 ふる
 さとは
 はるそ
 むかしの
 かに
 におい
 ける



徳川家康
 一〇三頁参照

88 隱元隆琦 三行書

紙本 川村驥山箱書 本紙巾38×豎116.5 総丈巾50.5×豎196cm 寛文一二年（一六七二）八一歳 表具少傷ミ・修復痕 本紙少オレ 箱傷ミ



朝臺變滅仙雀悲哀魏武之雄鄉安在歲飛來
 斤尾形類石■置之文苑色潤千秋正体堅剛
 義性靜守世代傳家如臨端前 壬子春日
 松堂八十一翁隱元書

朝臺變滅仙雀悲哀魏武之雄鄉安在歲飛來
 斤尾形類石■置之文苑色潤千秋正体堅剛
 義性靜守世代傳家如臨端前 壬子春日
 松堂八十一翁隱元書

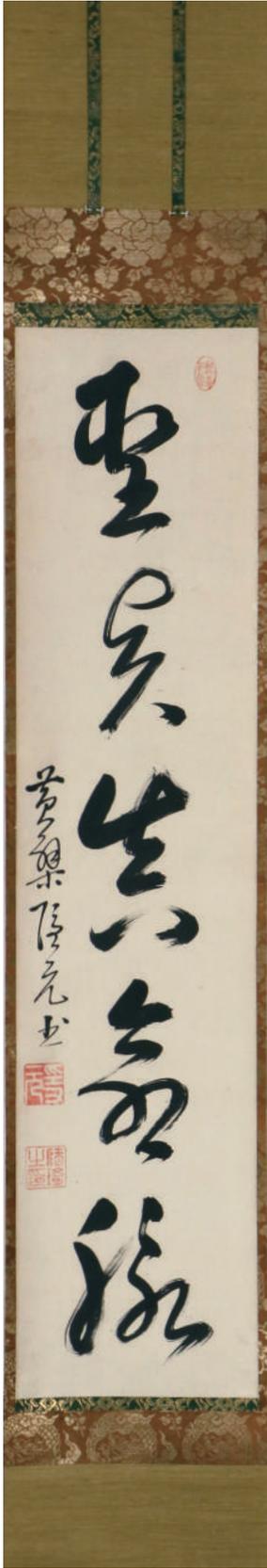
隱元隆琦 川村驥山
 九八頁參照 一〇〇頁參照



五十五万円
 (550,000JPY)

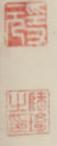
89 隱元隆琦 聖夫真命脈一行

紙本 箱入 本紙巾29×豎127.5 総丈巾32×豎204cm 本紙修復痕



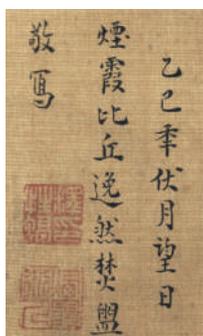
聖夫真命脈
 聖夫真命脈
 聖夫真命脈

聖夫真命脈
 聖夫真命脈



五十五万円
 (550,000JPY)





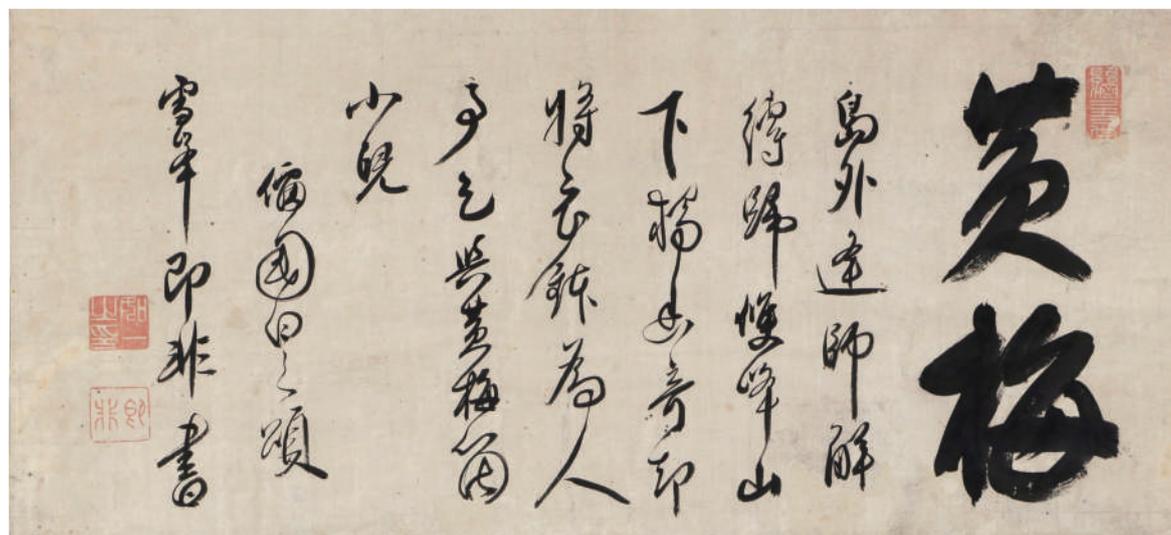
90 即非如一 贊維摩像面
逸然性融 維摩像面贊

絹本着色 黄檗柏樹子箱書 本紙 巾50.5×豎35
総丈 巾63×豎125.5cm 寛文5年(1665) 逸然65歳
少傷ミ 箱少傷ミ

即非如一 逸然性融 黄檗柏樹子
102頁参照 98頁参照 98頁参照

百二十万円
(1,200,000JPY)

毘耶城裏逢師利
一塵清風洗白雲



黄梅
島外逢師解
縛歸隻峰山
下獨幽寄却
將衣鉢為人
事乞與黄梅箇
小兒
價国白之頌
雪峯即非書

91 即非如一 黄梅 置字大幅

紙本 箱入 本紙 巾75.5×豎35.5 総丈 巾78×豎119.5cm 微少シミ・微少オレ

百二十万円
(1,200,000JPY)



92 宣如上人
五月十四日付自筆消息

紙本 箱入

本紙巾44.5×縦28

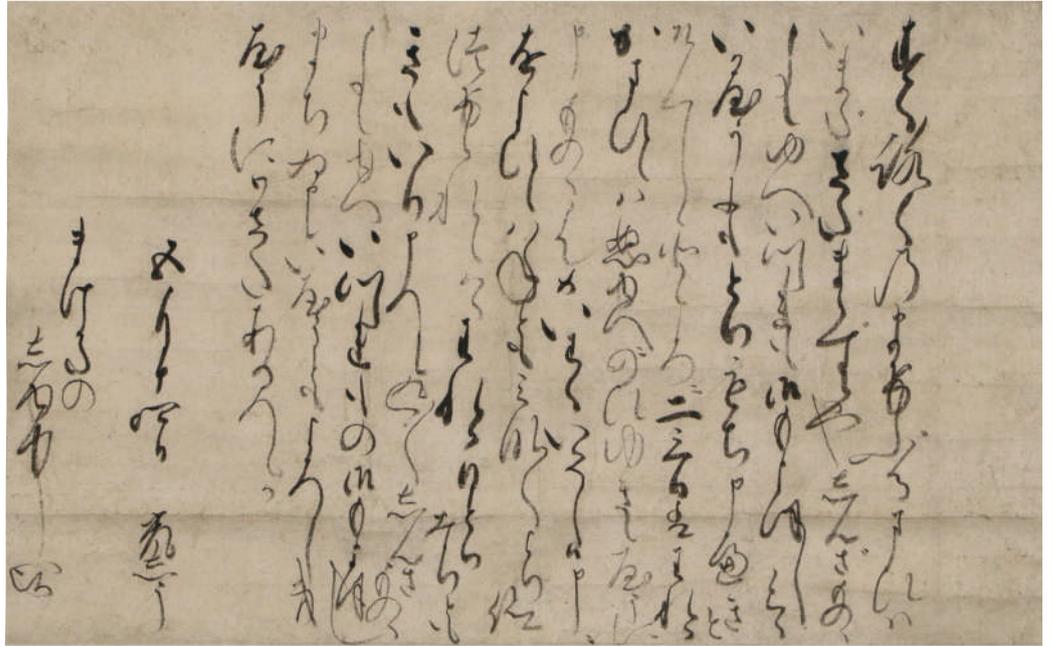
総丈巾56.5×縦111cm

本紙オレ

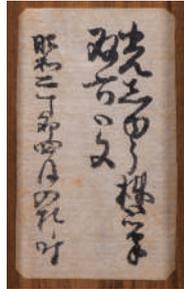
東本願寺旧蔵

奈良県立美術館読有

四十五万円
(450,000JPY)

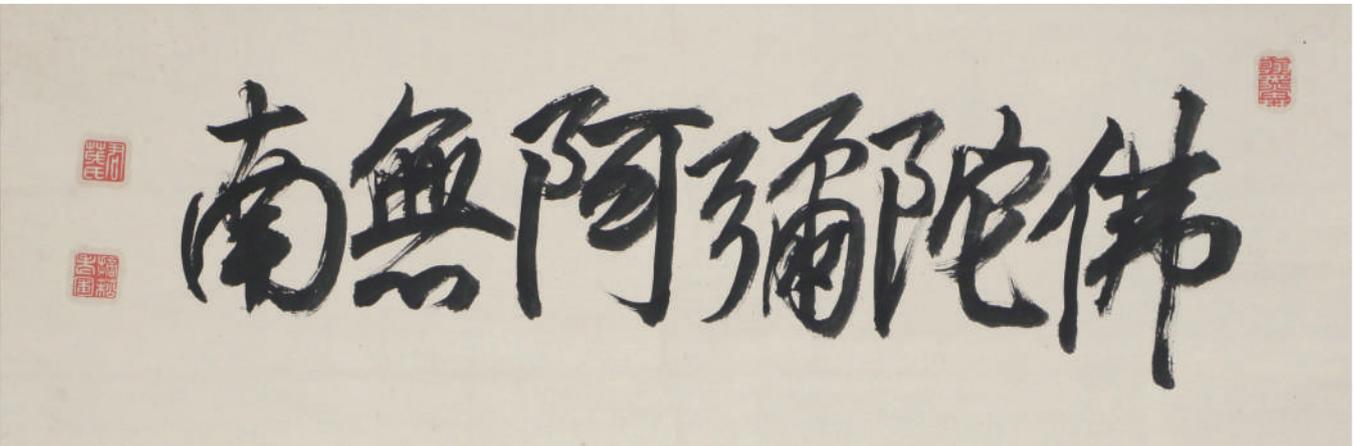


宣如上人
102頁参照



『東本願寺旧蔵印』

すぐろくのまけぶるまひハ
いまださだまらず候や しんざもの、
事候ゆへいづれも御もよほし候ハッ
いかやうにもとりもち申べきと
ぞんじ候ところニ一二日はわれら
かまひ候ハぬゆへニのびゆき候やうに
申もの、候てめいわくいたし候 申二
をよび候ハねどもミなくより仰
つけられ候ハッわれら日どりなりとも
さもいり申べく候 返くしんざもの、
事候ゆへいづれもの御もよほし
まらみ申候 い「か」やうともよろしき
やうに御さたあるべく候か
五月十四日 光じう
まけかたのしゆ中へ まいる
*すぐろく 双六。



93 貫名菘翁 仏涅槃名号 大幅

紙本 二重箱入 本紙巾91×縦30.5
総丈巾109×縦134cm 本紙少オレ

十八万円
(180,000JPY)

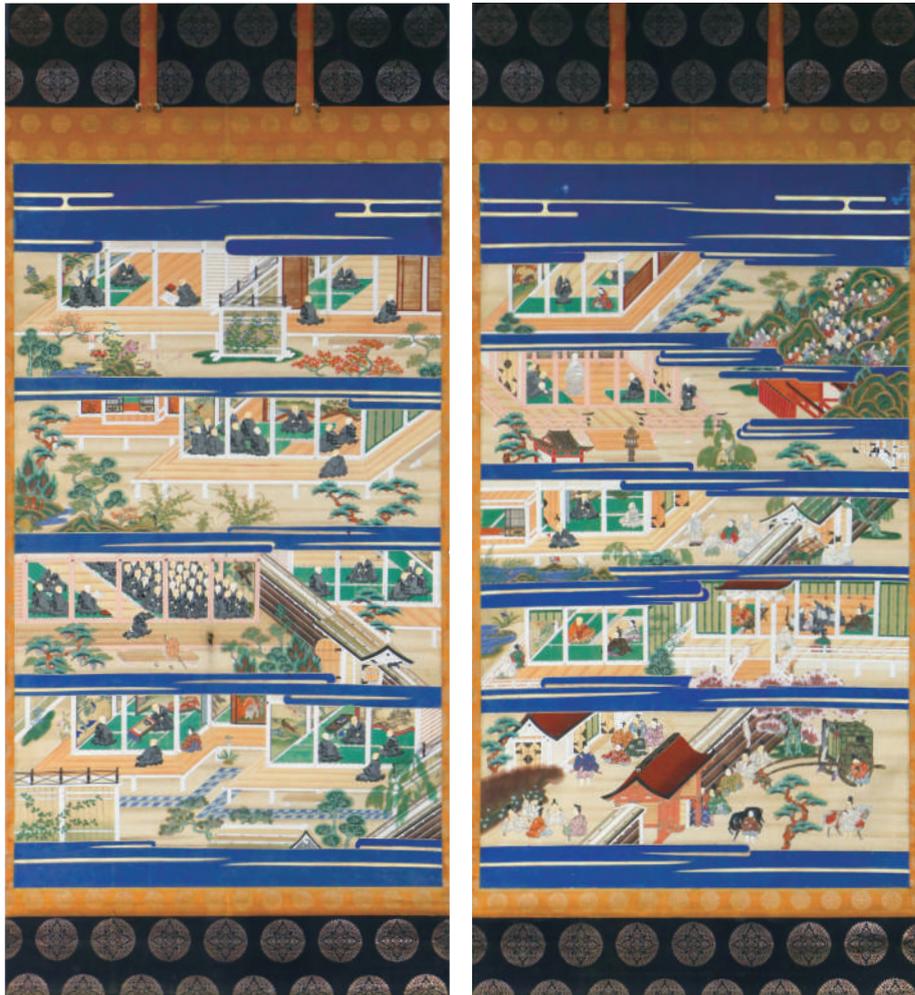


貫名菘翁
104頁参照

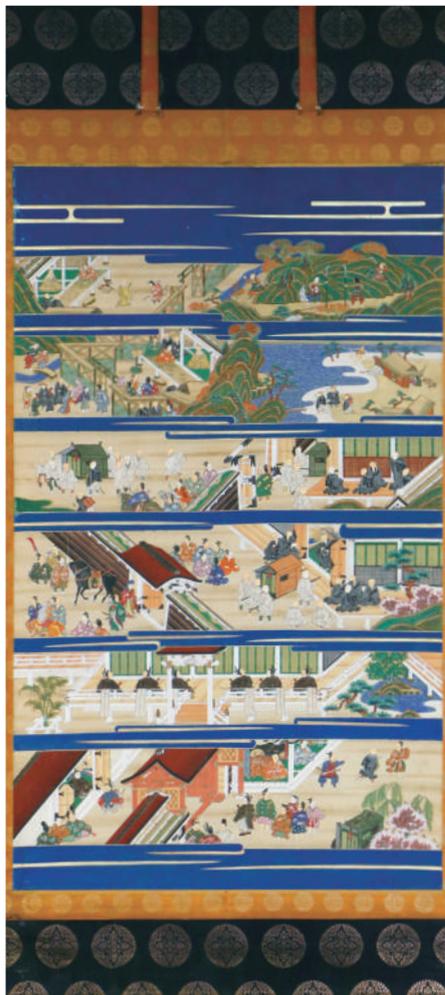
94 文化五年達如上人裏書親鸞上人御絵伝

絹本着色金泥 箱入 本紙各巾80×縦136 総丈各巾83.5×縦198.5cm 傷ミ・修復痕

二百五十万円
(2,500,000 JPY)



達如上人
一〇三頁参照



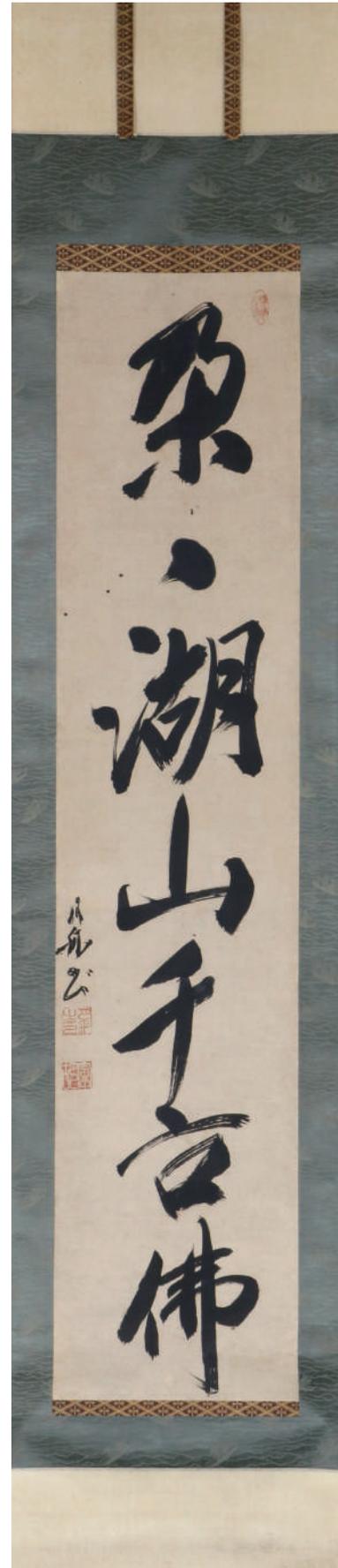
「達如上人裏書」



大谷本願寺親鸞聖人縁起
 文化五年戊辰正月二日
 龍歸寺十越前國
 招升郡高柳村
 西岸寺當住物也
 親・塔願
 奇道人 爰傳

95 月舟宗胡 朶々湖山千古佛 一行

紙本 箱入 本紙巾28×豎131 総丈巾39×豎206 cm 本紙修復痕



月舟宗胡
一〇〇頁参照



(二十五万円
250,000 JPY)

96 寂庵 草衣不針復不綿 一行

紙本 箱入 本紙巾28×豎130.5 総丈巾40×豎199.5 cm 少オレ・少傷ミ



寂庵
一〇二頁参照



(十八万円
180,000 JPY)



97 谷 文 晁 水墨山水図

絹本水墨 伊藤平山堂箱書 本紙 巾59×縦45.5
 総丈 巾73×縦140.5cm 天保10年(1839) 78歳 本紙修復痕

谷文晁
 103頁参照

二十五万円
 (250,000JPY)



祇園会々
 頭の数は
 うり茄子ひ

98 仙 厓 義 梵 祇園会画賛

紙本水墨 箱入 本紙 巾51.5×縦34 総丈 巾56×縦130.5cm
 本紙微少傷ミ・修復痕 川崎製表具

七十五万円
 (750,000JPY)

仙厓義梵
 102頁参照

99 仙 厓 義 梵 富 士 画 賛

紙本水墨 箱入 本紙巾31×豎98 総丈巾34×豎188.5cm 本紙修復痕



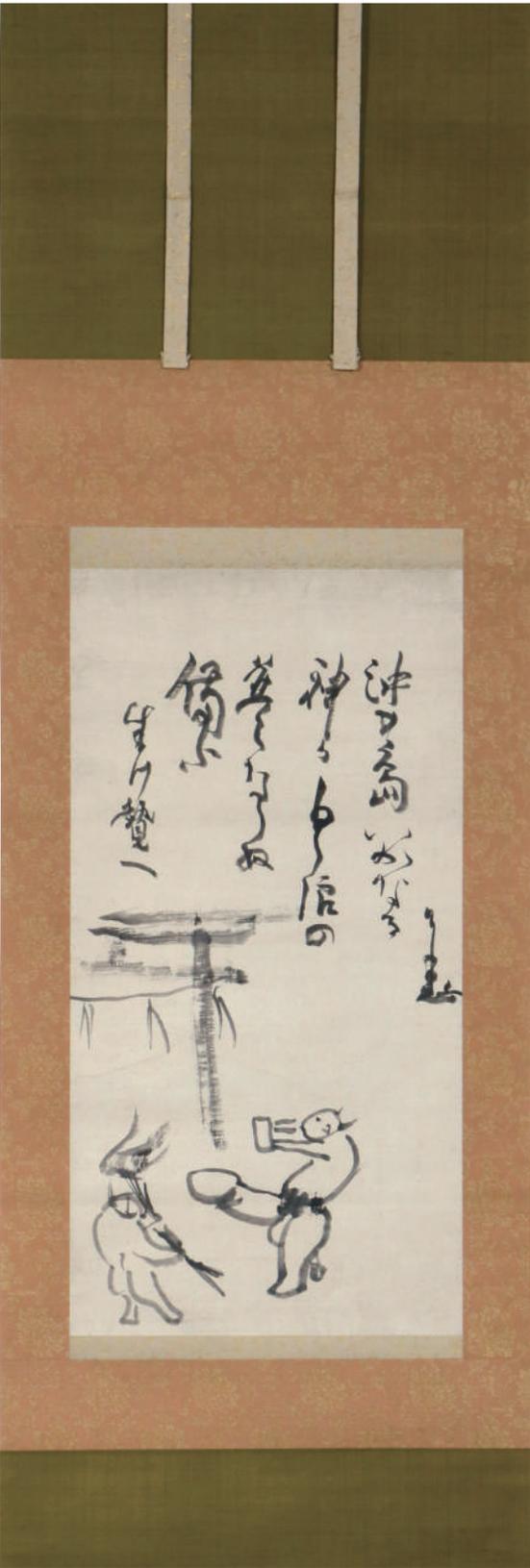
天地の
間に一つ
雪の山

(550,000 JPY) 五十五万円



100 仙 厓 義 梵 沖 の 島 画 賛

紙本水墨 箱入 本紙巾30.5×豎60 総丈巾41.5×豎147.5cm 本紙少オレ



沖の島 いかなる
神か 白ら浪の
並々ならぬ
備ふ 生け贄へ

(550,000 JPY) 五十五万円

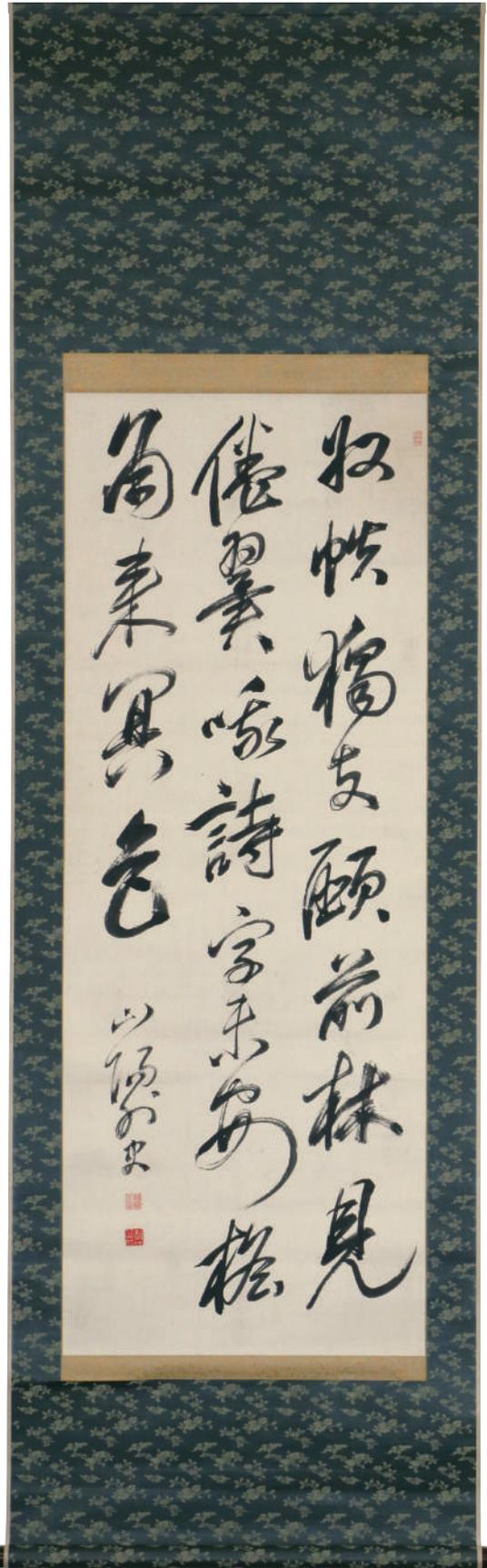


101 頼山陽 収帙詩五絶三行

紙本 頼潔箱書 二重箱入 本紙巾47×豎126 総丈巾61.5×豎205cm 表具少ウキ 本紙微少オレ

収帙獨支頤前林見
倦翼哦詩字未安檐
角来冥色

頼山陽 一〇七頁参照
頼潔 一〇七頁参照



十
八
万
円
(180,000 JPY)

102 貫名菘翁 寿

紙本 田中塊堂箱書 二重箱入 本紙巾51.5×豎128.5 総丈巾65.5×豎218cm 安政二年(一八五五)七六歳 外箱傷ミ



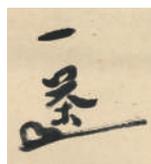
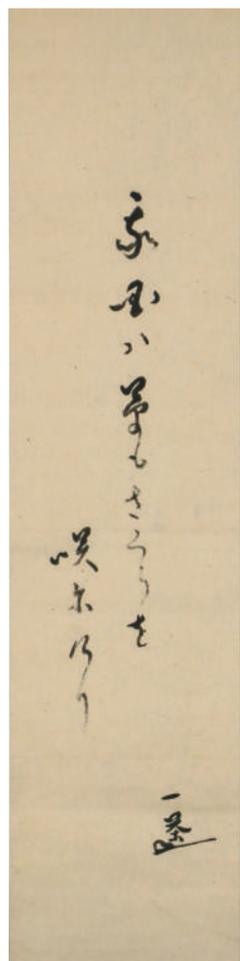
十
二
万
円
(120,000 JPY)

貫名菘翁 一〇四頁参照
田中塊堂 一〇三頁参照

103 小林 一茶 さくら句大短冊

紙本 猪坂直一箱書並題簽
本紙巾26.5×豎110 総丈巾38×豎179.5cm
本紙微少シミ

二十五万円
(250,000JPY)



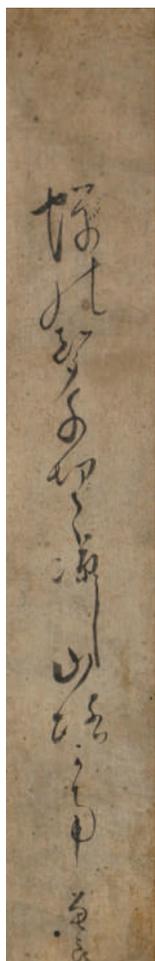
我国八草もさくらを
咲にけり
小林一茶 猪坂直一
一〇二頁参照 九八頁参照



104 河合 曾良 蟬の聲俳句短冊

紙本 箱入 本紙巾5.5×豎36
総丈巾26.5×豎141.5cm 本紙修復痕

十八万円
(180,000JPY)



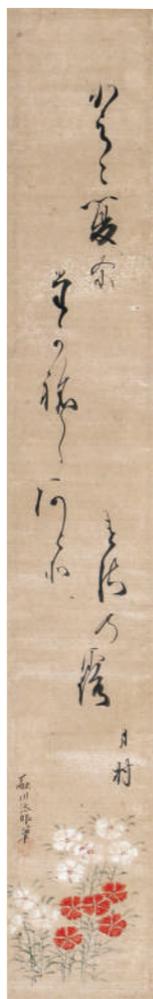
蟬の聲千切て涼し山路かな

河合曾良
一〇〇頁参照

105 柳沢 堯山 撫子画賛

柳沢堯山 狩野融川画
紙本着色 箱入 本紙巾5.5×豎36 総丈巾28×豎162.5cm
美品

十五万円
(150,000JPY)



とこ夏に けさの露
たかねしあとそ



柳沢堯山 狩野融川
一〇六頁参照 九九頁参照



106 酒井 抱一 雪柳句賛

紙本水墨淡彩 箱入 本紙巾6×豎35.5
総丈巾24.5×豎170cm 微少オレ・微少虫穴

十二万円
(120,000JPY)

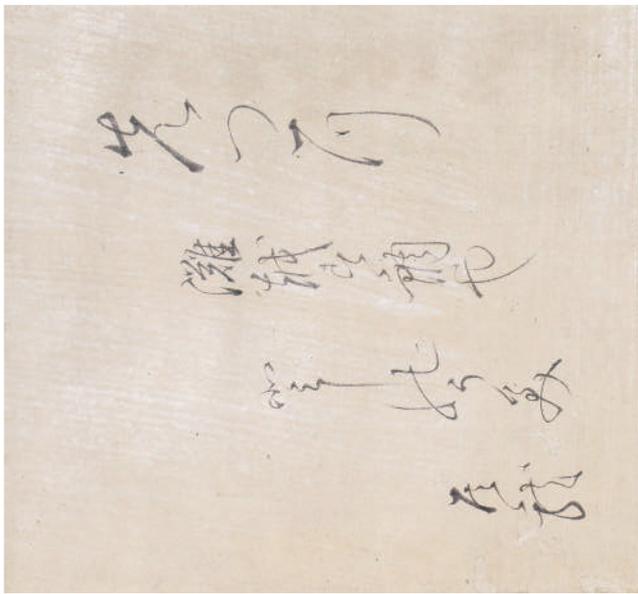


ふむもおし
踏ねはならず
今朝のゆき



酒井抱一
一〇二頁参照





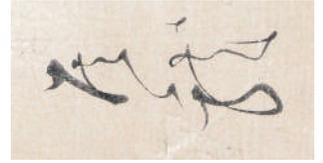
107 酒井抱一 まついつ 俳句色紙

紙本 箱入 本紙巾 23.5 × 縦 18
 総丈巾 32 × 縦 122.5 cm 美品

まついつ

灘越す鯛や
 としのうみ

十二万
 (120,000円)



108 横井也有 柳蛙句賛

紙本 水墨 箱入 本紙巾 23.5 × 縦 77 総丈巾 27 × 縦 168 cm
 表具 微少シミ 本紙 微少オシ

見付たそ なき事を
 かつに 臍の

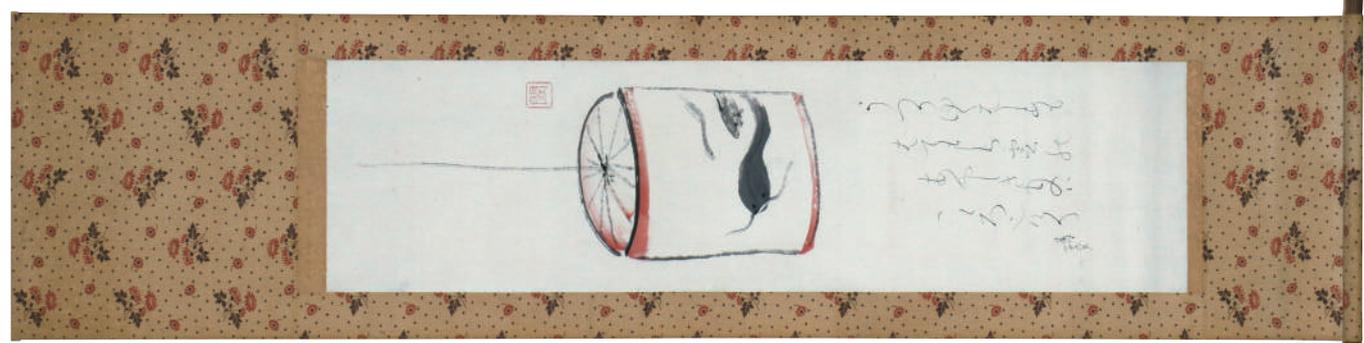
十二万
 (120,000円)



109 和田呉山 大田垣蓮月 走馬灯画賛

紙本 水墨 淡彩 箱入 本紙巾 30 × 縦 110.5 総丈巾 42 × 縦 173 cm
 慶応三年 (二八六七) 蓮月七六歳 本紙修復痕

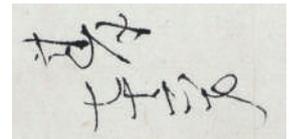
二十五万
 (250,000円)



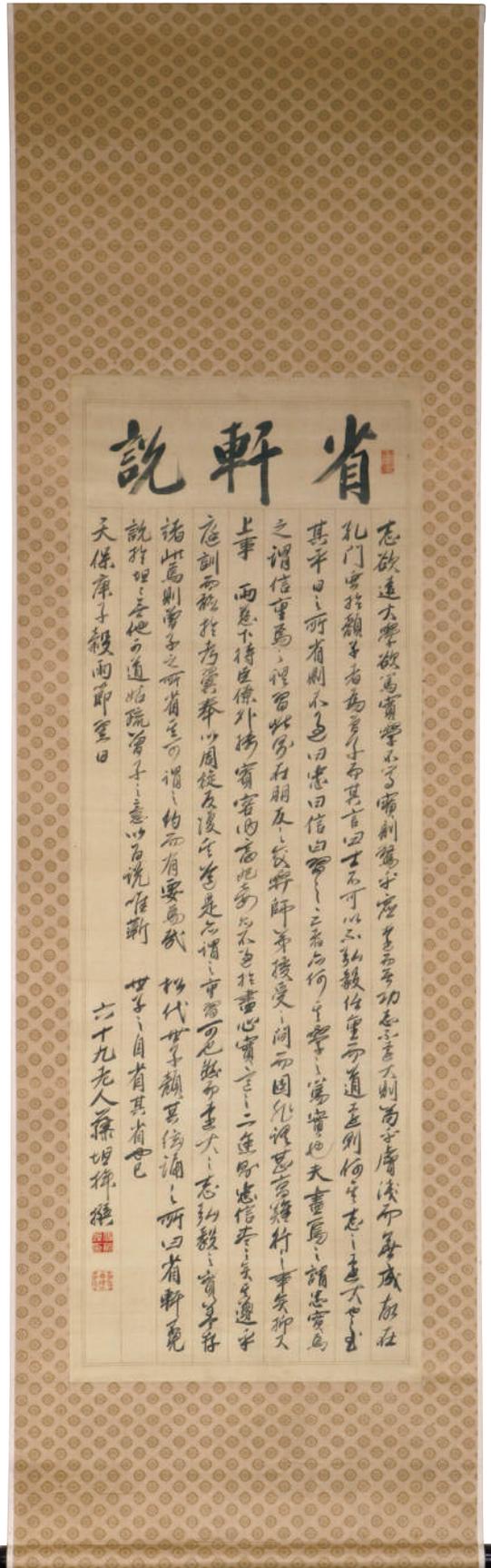
横井也有 一〇七頁参照
 和田呉山 一〇七頁参照

大田垣蓮月
 九九頁参照

うつりゆくはじめも
 はてもしら雲の
 あやしきものハ
 こころ也けり



絹本 箱入 本紙巾44×豎126 総丈巾59.5×豎196.5cm 天保十一年(一八四〇) 六九歳 本紙微少ウキ・修復痕

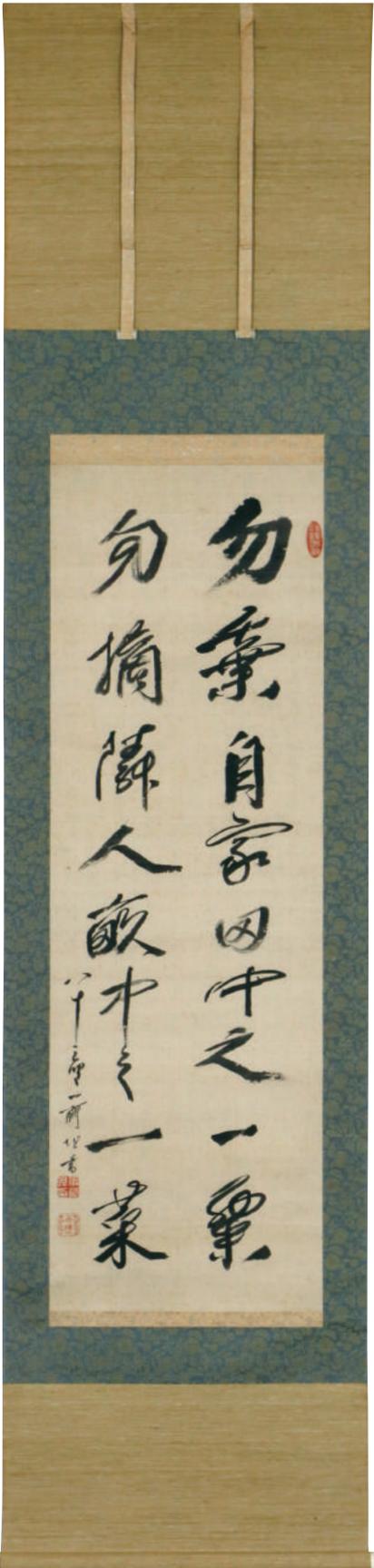


絹本 箱入 本紙巾31.5×豎99 総丈巾42.5×豎182cm 安政元年(一八五四) 八三歳 少シミ・少オレ

佐藤一斎 真田幸良
一〇一頁参照 一〇一頁参照

省軒說

志欲遠大學欲篤實學不篤實則驚乎虛遠而無功志不遠大則苟乎庸淺而無成故在孔門而於顏子者為曾子而其言曰士不可以不弘毅任重而道遠則何無志之遠大也主其平日之所省則不過曰忠曰信曰習、之者亦何其學之篤實也夫盡篤之謂忠實又之謂信重為之釋習此界在朋友之交與師弟授受之間而固飛語甚高難行之事矣抑又上事 而慈下待臣僚外接賓客內畜妃妾亦不過於盡心實道之一途則忠信尽之矣其遊乎庭訓而於於考選奉以周旋及後生者是也惜乎中當可也然而志大之志弘毅之實篤存諸此焉則曾子之所省之可謂之約而有要為哉 松代世子顏其談論之所謂省軒說說於此、他可道姑疏曾子之意以為說唯斷 世子之自省其省也已 天保庚子穀雨節翌日 六十九老人藤垣梓撰



勿棄自家田中之一粟
勿摘隣人畝中之一粟



九万五千元
(95,000 JPY)

二十五万円
(2,500,000 JPY)

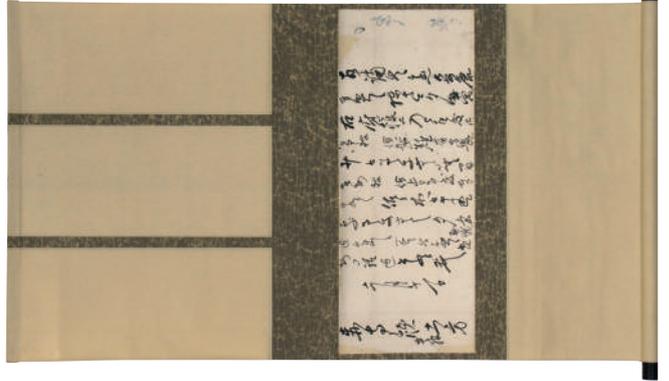
右大臣様御入被遊度御
 旨被仰越難有奉良候
 少も差支無御座候間
 此段被仰上被下度奉
 頼候 佐々木へも申通候
 処差支無之夕方弊寓へ
 迄參候筈三仕置候 此
 段御講迄草々頓首
 六月十一日
 森寺様貴報 土方

歳三

拝誦仕候 愈御安康
 奉賀候 陳若今夕弊寓へ
 右府様御入被遊度御
 旨被仰越難有奉良候
 少も差支無御座候間
 此段被仰上被下度奉
 頼候 佐々木へも申通候
 処差支無之夕方弊寓へ
 迄參候筈三仕置候 此
 段御講迄草々頓首
 六月十一日
 森寺様貴報 土方

(端裏)
 急々 歳三

(現代語訳)
 お手紙拝見しました。いよいよお元
 気の由、めでたいことです。さて、
 今晚、私の寓居へ右大臣様がお越し
 になりたいとのこと、ありがたいこ
 とでかしこまりました。少しも差し
 支えはありませんので、そのことを
 右大臣様へお伝えください。佐々木
 へもそのことを伝えたと、差し
 支えなく、夕方に私の寓居まで参る
 筈になっております。以上、御返事
 まで。



113 土方 歳三 六月十一日付森寺常安宛宛消息

紙本 箱入 本紙 巾51.5× 竪20.5 総丈 巾54× 竪97cm

土方歳三 森寺常安
105頁参照 106頁参照

三百八十万円
(3,800,000JPY)



114 明治天皇 國家

絹本 二重箱入 本紙巾 51×豎 34 総丈巾 66×豎 157 cm
 美品 極上表具仕立

(二百五十万円
 2,500,000 JPY)

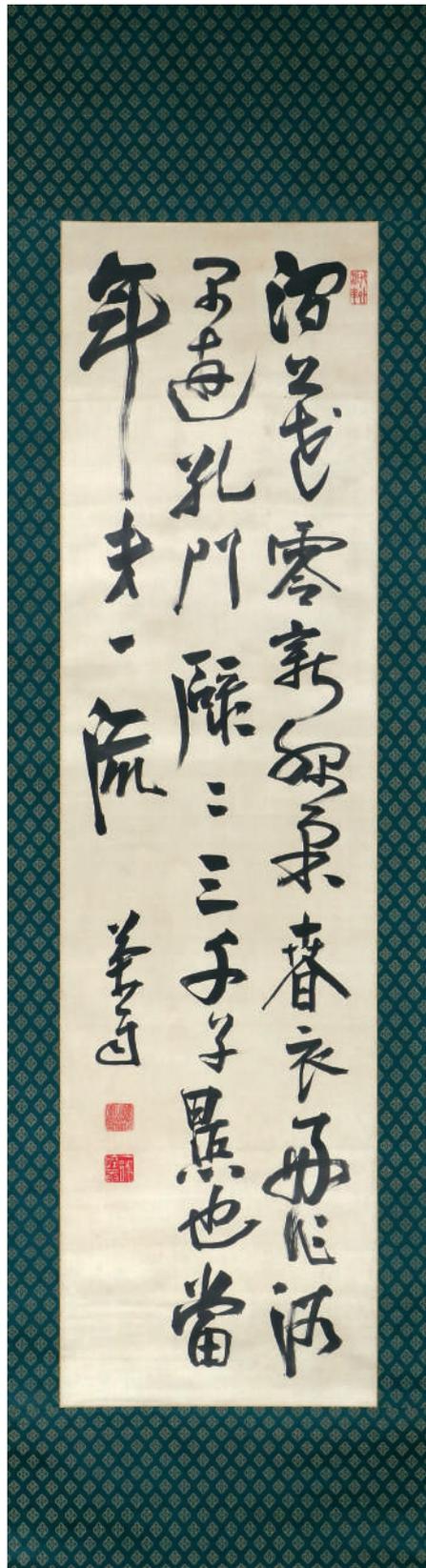


明治天皇
 一〇六頁参照

115 鍋島 閑叟 葉蕪侯詩七絶三行

縦本 頼潔箱書 二重箱入 本紙巾40.5×豎154 総丈巾55.5×豎223cm

潤上花零新緑柔春衣好作浴
早遊孔門磔二三子點也當
年第一流 茶雨



八十五万円
(850,000 JPY)

116 島 義 勇 秋江独釣図画賛

紙本水墨 細川十州箱書 本紙巾48×豎127 総丈巾64×豎203.5cm 稀品 維新資料



八十五万円
(850,000 JPY)

鍋島閑叟 一〇四頁参照
頼潔 一〇七頁参照
島義勇 一〇二頁参照
細川十州(潤次郎) 一〇五頁参照

碧山紅葉暮山秋嘯月吟風得自由
釣舟醒復醉十年深悔一封侯
節日見七道士有此本運筆豪健行墨
淋漓固非已須當畫家可擬今仿其意
作此發觀者之一笑
桜陰島義勇醉中之作



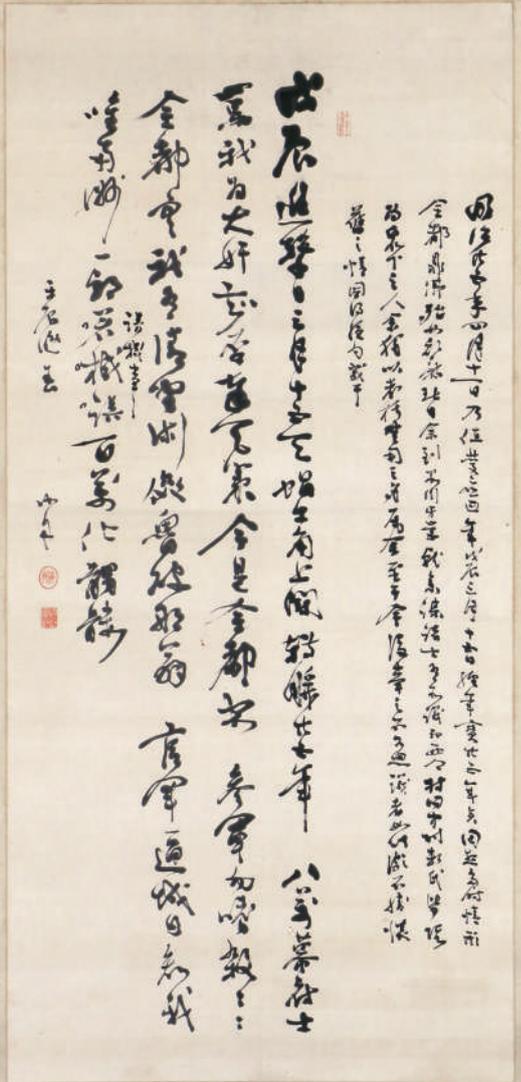
117 勝海舟 其寢無夢其覺無憂 一行

紙本 箱入 本紙巾29.5×豎106 総丈巾45×豎181.5cm 少オレ 箱少傷ミ 槐園旧蔵



118 勝海舟 戊辰懷旧詩五律

紙本 山田古香箱書 本紙巾64.5×豎138 総丈巾80.5×豎210cm 少シミ・少汚レ 高橋泥舟旧蔵 泥舟息 高橋豊吉題簽



十二万円
(120,000JPY)



勝海舟
九九頁参照
槐園(鮎貝房之進)
九九頁参照

四十五万円
(450,000JPY)

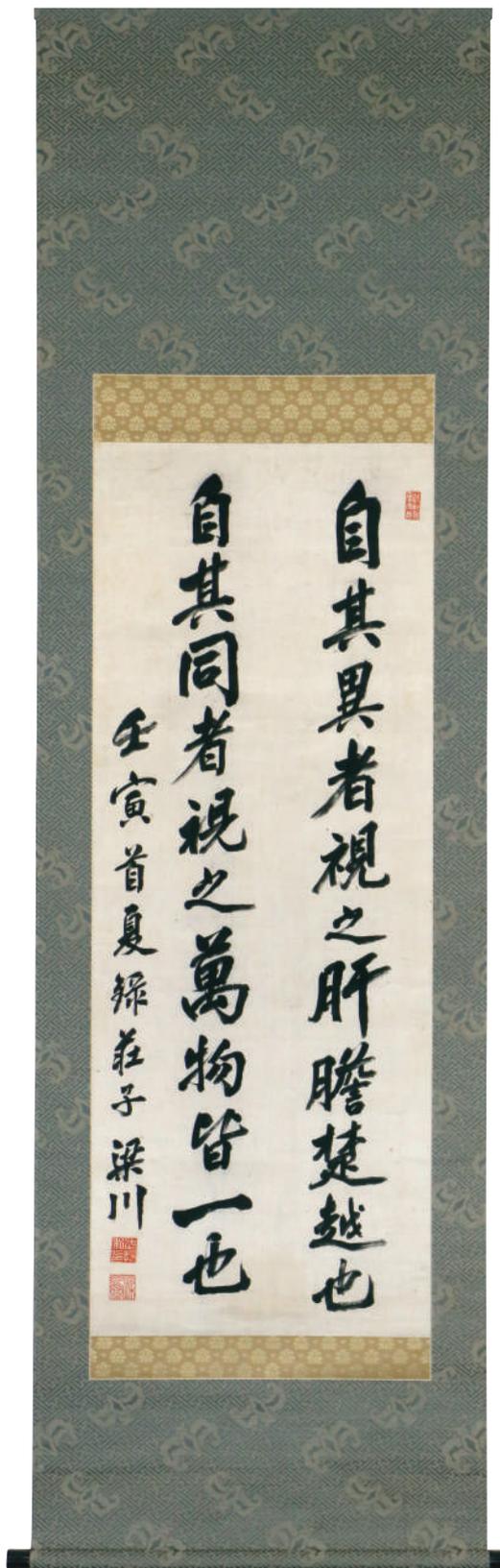
明治廿五年四月十一日乃領慶應四年戊辰三月十五日經年實廿五年矣回想當時情形
全都鼎沸殆如亂麻此日余到品川牙醫院參謀諸士各所議而西郷村田中村數氏皆座
為泉下之人余獨以志朽無用之身尾至主命後事之所不思議者如此頗不勝懷
舊之情因得句成乎
戊辰進擊日三月十五天鵝牛角上開轉瞬廿五年 八萬幕府士
罵我為大奸知否奉天策今是全都空 參軍勿略殺々々
全都空我各清 雪術密魯破那翁 官軍逼城身知我
誤機事
唯南洲一朝若機誤百萬化饑饉
壬辰晚春
海舟



山田古香
一〇六頁参照
高橋泥舟
一〇二頁参照

119 榎本武揚 莊子語二行

続本 箱入 本紙巾41.5×縦109.5 総丈巾55.5×縦191.5cm 明治三五年 六七歳 本紙少シミ・少オレ



自其異者視之肝膽楚越也
自其同者視之萬物皆一也

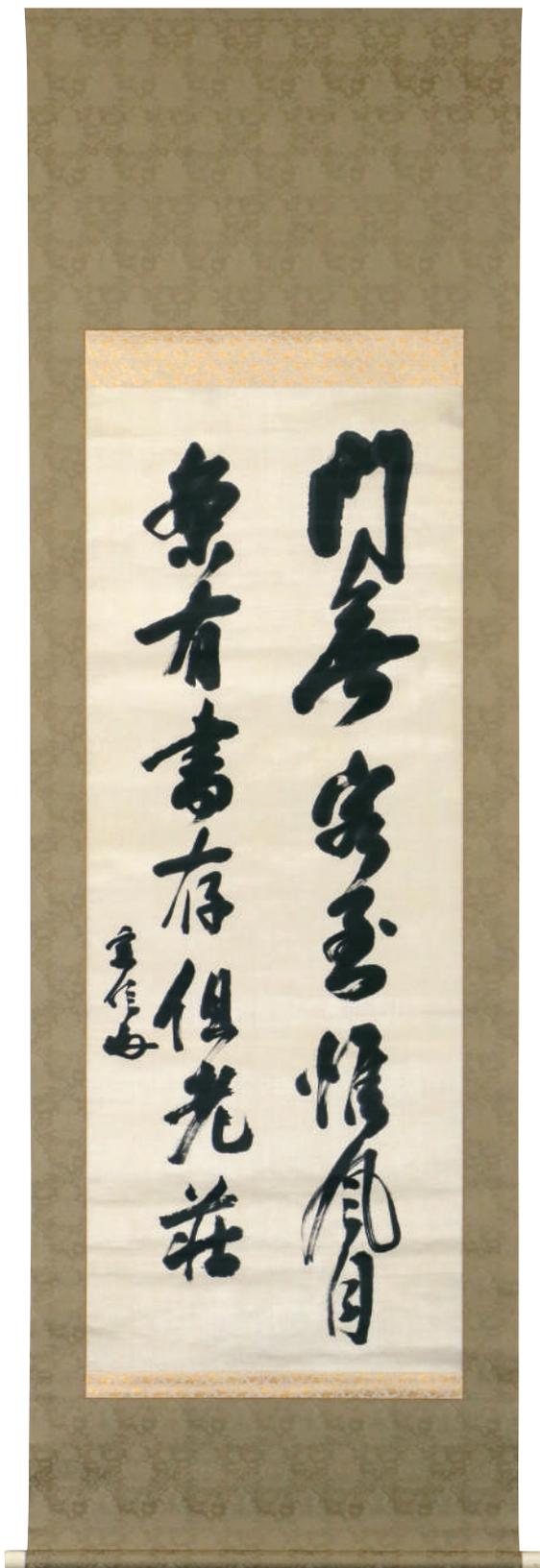
(十八万
180,000 JPY)

榎本武揚
九八頁参照



120 大隈重信 七言二句二行

続本 二重箱入 本紙巾49.5×縦131 総丈巾65×縦207cm 美品 稀品



門無客到惟風月
案有書存但老莊

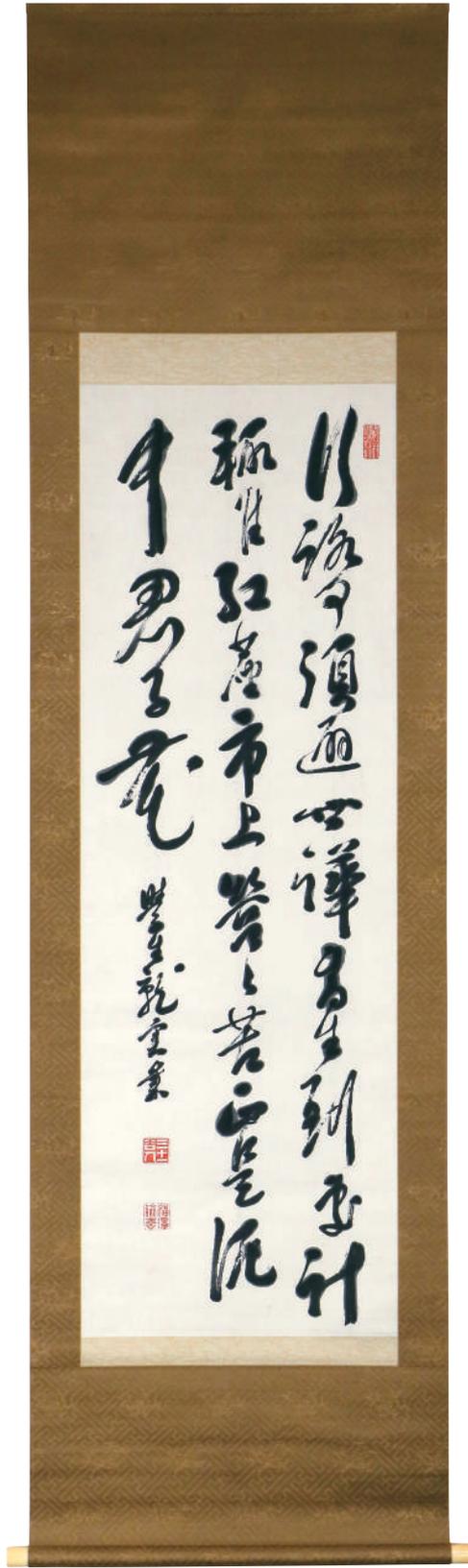
(五十五万
550,000 JPY)

大隈重信
九九頁参照



121 福沢諭吉 学生就実業詩 七絶三行

紙本 二重箱入 本紙巾43.5×縦131.5 総丈巾58×縦215.5cm 本紙微少オレ・修復痕



三十八万円
(380,000JPY)

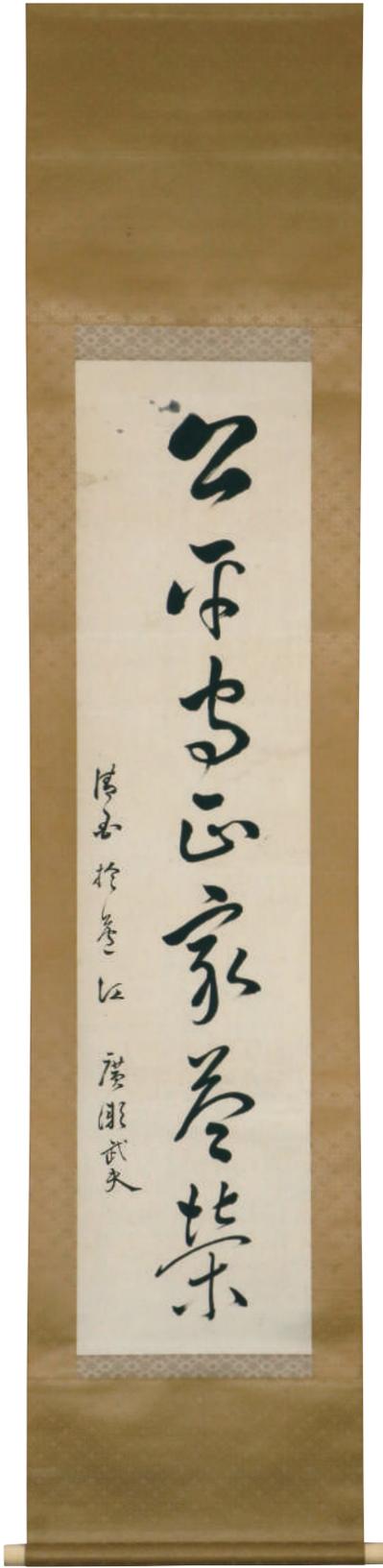
行路何須避世譁書生到處計
輒佳紅塵市上營々苦正是泥
中君子花 学生就実業

福沢諭吉
一〇五頁参照

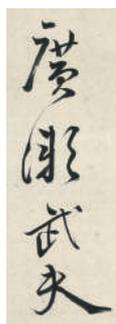


122 軍神 広瀬武夫 公平守正家益榮 一行

紙本 富田豊彦箱書 本紙巾29.5×縦125.5 総丈巾42.5×縦197.5cm 少汚レ



三十八万円
(380,000JPY)



軍神廣瀬海軍中佐一行書
於江 壹幅

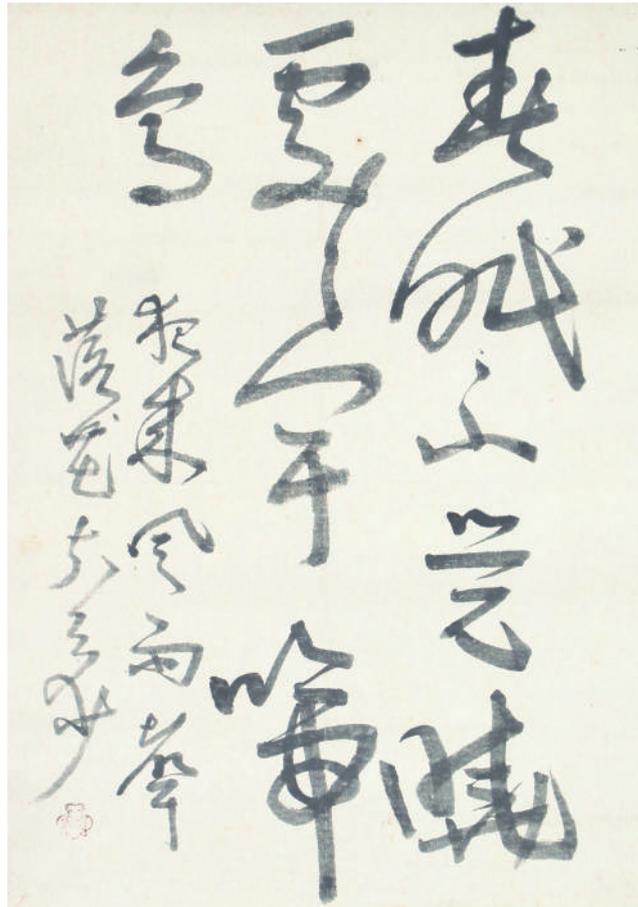
鏡點親以交之初其廣瀬武夫君之遺石
其後世遂不之得也 富田豊彦箱書

広瀬武夫 一〇五頁参照
富田豊彦 一〇三頁参照

123 北大路魯山人 孟浩然 春曉詩

紙本 黒田陶々庵箱書
本紙巾43×豎61 総丈巾56.5×豎152.5cm

七十五万円
(750,000JPY)



春眠不覺曉
處處聞啼鳥

夜來風雨聲
落花知多少

北大路魯山人
一〇〇頁参照
黒田陶々庵
一〇〇頁参照



124 山本空外 無有

紙本 共箱 本紙巾62.5×豎37.5
総丈巾65.5×豎136.5cm 昭和32年 56歳
三十万円
(300,000JPY)



山本空外
106頁参照



偶成
天下本無事
庸人自擾之
是言真可
憐太平
古人不我欺
可憐無食
世庶民皆困
敝無待斃
又無衣老則
生待斃
當途何其迂
拘、只
守株何日蓋
代手
一拌轉天樞

125 犬養木堂 竹画賛扁額

紙本水墨 本紙 巾58×豎30 総丈 巾78×豎39cm 稀品

二十五万円
(250,000JPY)

犬養木堂
98頁参照



の二山に
うかれく
てかえる
さを
ねやま
ておく
る秋の
よの月

126 大田垣蓮月 盃

共箱 口径5.5×高2.5cm

八万五千元
(85,000JPY)

大田垣蓮月
99頁参照



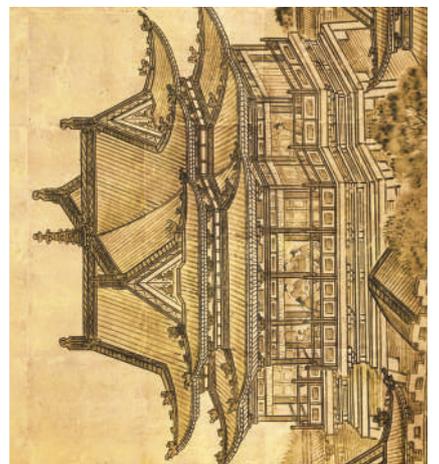
127 (上) 土佐光貞 (中) 円山応挙
(下) 勝山琢舟 图案
盃三枚重鶴亀松竹

朱塗杯 箱入 (上) 口径11.5×高2.5cm
(中) 口径12.5×高3cm (下) 口径14×高3cm

八万五千元
(85,000JPY)

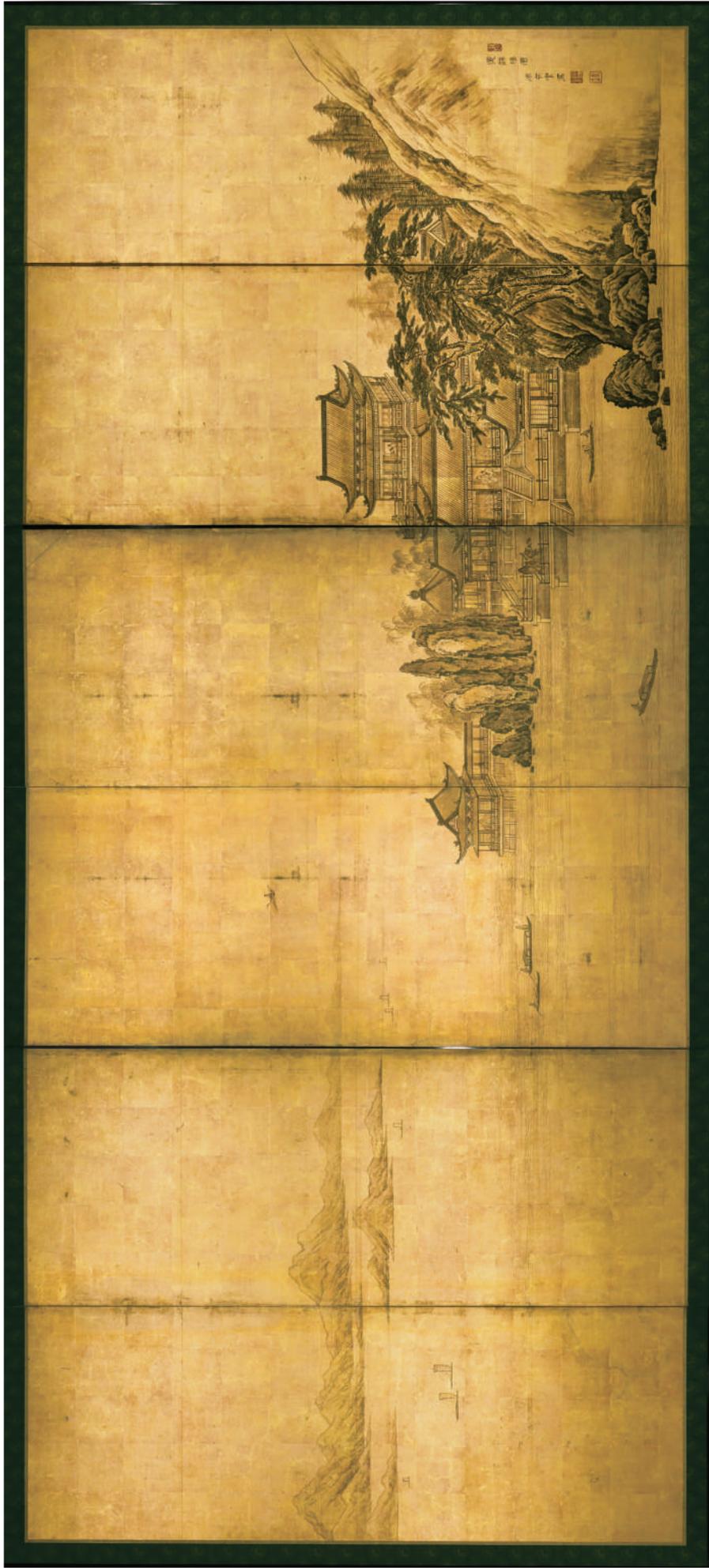
土佐光貞 103頁参照 円山応挙 106頁参照 勝山琢舟 99頁参照





長陽樓圖
原在中寔





128 原在中 岳陽樓圖屏風六曲一双

金地紙本水墨 本紙各巾360×豎156
 総丈各巾376×豎171cm

百五十万円
 (1,500,000JPY)



黃鶴樓圖

原在中寫





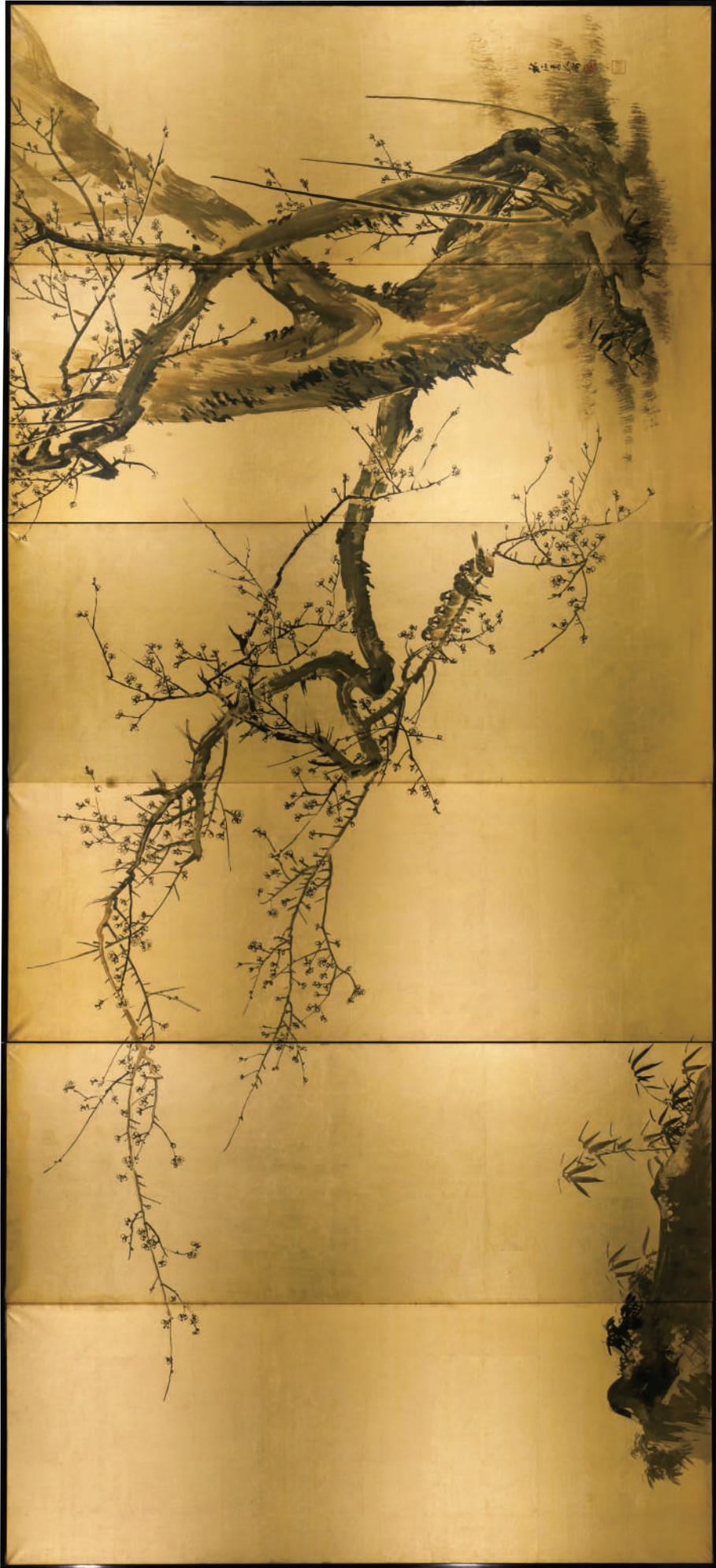
129 奥谷秋石 松竹梅鷹図 六曲一双

金地紙本水墨金泥 本紙 各巾165.5×縦372 総丈 各巾169.5×縦376cm
 本紙少ヨゴレ 裏少傷ミ

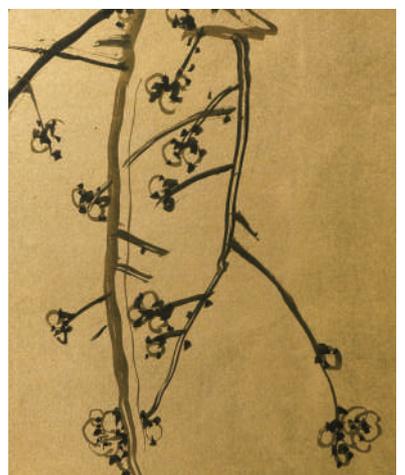
八十五万円
 (850,000JPY)

奥谷秋石
 99頁参照





高士通心林





130 赤松麟作 羽衣・狸々六曲一双油彩屏風

金地絹本油彩 本紙 各 巾167.5× 豎375 総丈 各 巾171.5× 豎379cm
 『近代金銀屏風名作選』(富山県水墨美術館 平成15年) 出陳並所載図録添付

八十五万円
 (850,000JPY)

赤松麟作
 98頁参照

『近代金銀屏風名作選』





福



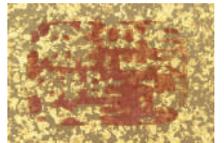


131 鈴木松年 昔話 猿蟹合戦図屏風 六曲半双中屏風

紙本着色金泥金砂子 本紙 巾270×縦134 総丈 巾274×縦138cm 本紙少傷ミ 本紙少傷ミ オゼ少傷ミ

百二十万 円
(1,200,000JPY)

鈴木松年
102頁参照





132 岡田華郷 月下獅子図 六曲半双

紙本着色金泥 本紙 巾375×豎168 総丈 巾379×豎171cm 少傷ミ

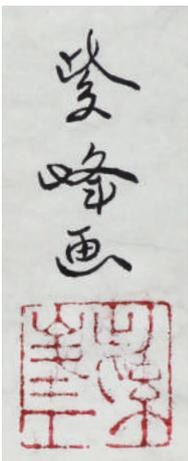
四十五万円
(450,000JPY)



岡田華郷
99頁参照



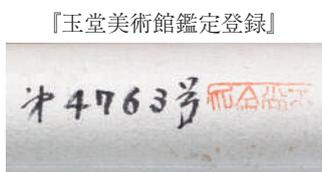
神原紫峰
一〇一頁参照



133 神原紫峰 雪庭双鳩図二曲半双
 紙本着色金泥 本紙巾185×縦166.5 総丈巾189×縦171.5cm
 明治末〜大正初期
 百八十万円
 (1,800,000 JPY)



川合玉堂
一〇〇頁参照



134 川合玉堂 鮎釣

紙本着色 共箱 二重箱入 本紙巾61×縦47
昭和二五年 七六歳 本紙微少シミ
玉堂美術館鑑定登録有 中村鶴心堂製表具
総丈巾77×縦153.5cm
百五十万
(1,500,000 JPY)



136 酒井唯一 四季草花園

絹本着色金泥 箱入
本紙巾50×縦128 総丈巾63.5×縦194.5cm
少シミ・少オレ・少ウキ

二十八万円
(280,000JPY)



酒井唯一
一〇一頁参照



137 谷文晁画 梅竹図 双幅

絹本水墨 箱入 本紙各巾35×縦111.5
総丈各巾44×縦183.5cm
文政元年(一八一八) 文晁五七歳 五山五〇歳
二十五万円
(250,000JPY)

僊人曾種玉籬落榮成誰
坐有溼香底春風萬斛回
五山桐孫題祝
萬玉森、翠歲定高節加也知
読為矣不敢画桃花
五山桐孫題祝



谷文晁 菊池五山

一〇三頁参照 一〇〇頁参照



138 山本梅逸 紅桃双燕

絹本着色 中村梅庭箱書 二重箱入 本紙巾40.5×豎123 総丈巾55×豎203 cm
 『静岡県 尾崎樂山堂 此君室 蔵品入札』 目録 (昭和十六年六月) 所載

(550,000 JPY)



山本梅逸 中村梅庭
 一〇六頁参照 一〇四頁参照

山本梅逸 紅桃双燕
 絹本着色

此は、尾崎樂山堂蔵品入札目録に掲載された山本梅逸の『紅桃双燕』の複製品である。原画は、絹本着色で、中村梅庭の箱書による二重箱入である。本紙巾40.5×豎123、総丈巾55×豎203cmである。昭和十六年六月の『静岡県 尾崎樂山堂 此君室 蔵品入札』目録に掲載されている。



『静岡県 尾崎樂山堂 此君室 蔵品入札』 目録

139 田能村直入 松籟夜静凶

紙本水墨淡彩 田近竹邨並田能村直外箱書 本紙巾38.5×豎135 総丈巾54×豎208 cm 明治一八年 七二歳

(180,000 JPY)



田能村直入 田近竹邨 田能村直外
 一〇三頁参照 一〇三頁参照 一〇三頁参照

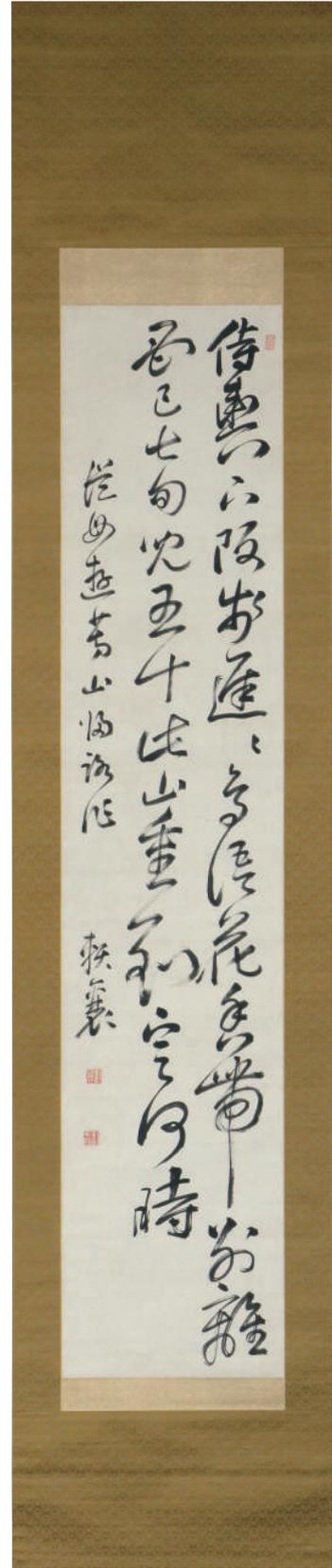
先師直入山松夜静松籟夜静凶

此は、尾崎樂山堂蔵品入札目録に掲載された田能村直入の『松籟夜静凶』の複製品である。原画は、紙本水墨淡彩で、田近竹邨並田能村直外の箱書による二重箱入である。本紙巾38.5×豎135、総丈巾54×豎208cmである。明治一八年、七二歳に作られた。



140 頼山陽 吉野懷古詩七絶二行

紙本 山本竹雲並白川芝山並頼潔箱書 三重箱入 本紙巾27.5×豎134 総丈巾40×豎212.5cm 本紙少オレ



侍輿下阪歩遅々鶯語花香帯別離
 母已七旬兒五十此山重到定何時
 從母遊芳山歸路作

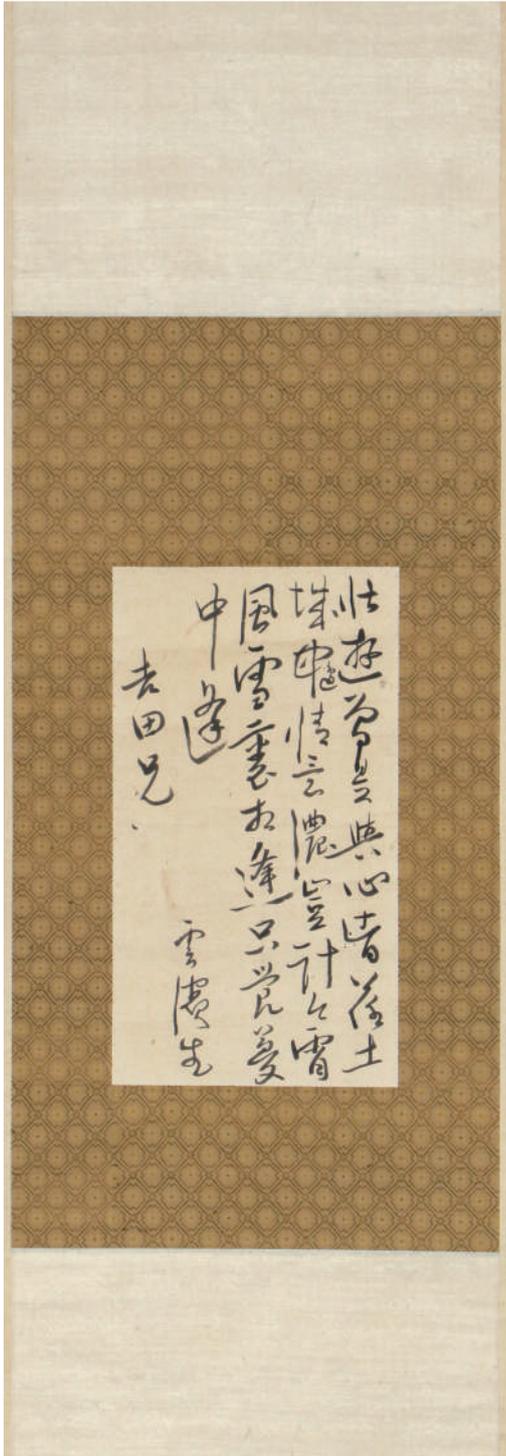
頼山陽



十八万
 円
 (180,000 JPY)

141 梅田雲濱 吉田松陰宛七絶詩

紙本 杉聴雨箱書 本紙巾16.5×豎30 総丈巾29×豎117cm 本紙少オレ



仕在為言與心皆落土
 城中情意濃豈計々霄
 風雪裏相逢只覺夢
 中逢
 去田兄
 雲濱

特遊曾是與心春落土
 城中邊情意濃豈計々霄
 風雪裏相逢只覺夢
 中逢



二十万
 円
 (200,000 JPY)

梅田雲濱 九八頁参照
 杉聴雨 一〇二頁参照



143 鈴木松年 紅梅羣雀図

絹本着色 共箱 二重箱入 本紙巾56.5×縦129 総丈巾72×縦205cm 明治三二年 五〇歳 本紙少シミ



142 栗原玉葉 童女図

絹本着色金泥 箱入 本紙巾40×縦112.5 総丈巾52.5×縦207cm 表具少傷ミ

鈴木松年



鈴木松年
一〇二頁参照

(120,000 JPY) 十二万 円

栗原玉葉
一〇〇頁参照



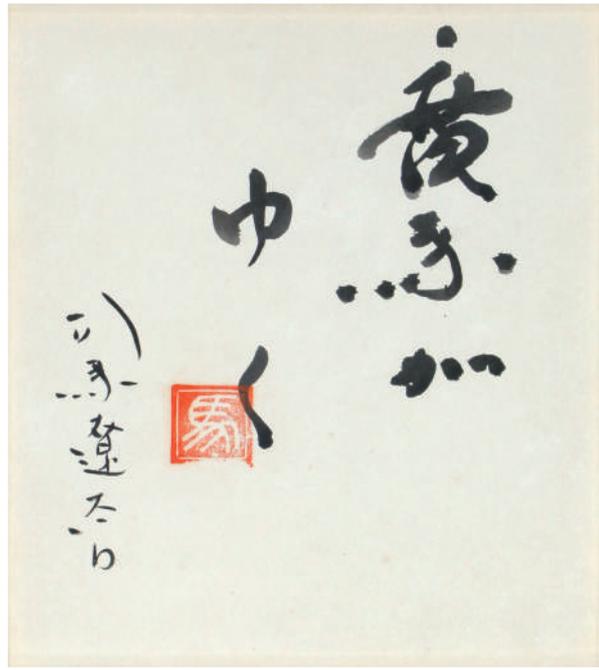
玉葉

(450,000 JPY) 四十五万 円

144 司馬遼太郎 竜馬がゆく額装

紙本 本紙巾23×縦26 総丈巾41.5×縦44.5cm

五十五万円
(550,000 JPY)



司馬遼太郎
一〇二頁参照

145 杉本健吉 豚問答

紙本着色 共箱
本紙巾34×縦21.5

総丈巾48.5×縦114cm 表具少オレ

十八万円
(180,000 JPY)



山元春拳

山元春拳

西山翠嶂

菊池契月

菊池契月

菊池契月

都路華香

竹内栖鳳

神坂雪佳

福田平八郎

木島桜谷

石崎光瑠

146

美濃屋製
京名家下絵松ノ木菓子盆
十二客

箱入

総丈各巾15×縦15×高1.5cm

都路華香 山元春拳
神坂雪佳 福田平八郎
木島桜谷 石崎光瑠 竹内栖鳳
西山翠嶂 菊池契月
明治四拾年十二月五日
清水半兵衛様 共盛會祝品と有

八万五千元
(85,000 JPY)



- | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|-----------------|----------------|
| 都路華香
103頁参照 | 山元春拳
106頁参照 | 神坂雪佳
100頁参照 | 福田平八郎
105頁参照 | 木島桜谷
101頁参照 |
| 石崎光瑠
98頁参照 | 竹内栖鳳
102頁参照 | 西山翠嶂
104頁参照 | 菊池契月
100頁参照 | 美濃屋
106頁参照 |

円山応挙 後赤壁山水 大幅

絹本着色 二重箱入 本紙巾89×豎162 総丈巾108×豎235.5cm 安永八年（二七七九）四七歳 山種美術館 佐々木直比古極並名刺有

（3,800,000 JPY）
三百八十万円



円山応挙
一〇六頁参照
佐々木直比古
一〇一頁参照

已亥晚秋寫
應舉


作家略歴

*五十音順で掲載しております。
*作家名の下の番号は本目録の作品番号です。

赤松麟作 あかまつりんさく

洋画家。岡山県生。東京美術学校卒業。山内愚僊に油絵を学ぶ。明治三四年の第六回白馬会展で『夜汽車』を出品し、白馬会賞を受賞。大阪に赤松洋画研究所を開設し、関西女子美学校校長を務めるなど、後進の育成にあたった。門下に佐伯祐三など。昭和二十八年（一九五三）歿、七十六歳。

東東洋 あずまとうよう

江戸後期の絵師。陸奥生。名は洋、字は大洋、別号に玉峨・白鹿洞など。京都で狩野梅笑に学びその養子となるも、のち円山応挙・池大雅等に師事し狩野家を去る。京都での活躍後帰郷。仙台藩御用絵師として仙台城二の丸の障壁画を手かけ、養賢堂の障壁画の制作にも当たった。小池曲江・菅井梅閑・菊田伊洲らと共に仙台四大画家の一人と称される。法眼に叙せられた。天保一〇年（一八三九）歿、八五歳。

足達崎郎 あだちちゅうそん

幕末・昭和の篆刻家。甲斐生。本名は彦作。字は文甫。他号に小十硯軒・重心軒・石雲山房など。幼少より篆刻に志し、模刻により独学。のち四世浜村蔵六に学んだ。明治二八年（一八九五）、日清戦争勝利に際して書いた凱旋門の題額が小松宮彰仁親王の目にとまり、祐筆として採用される。第三回内国勸業博覧会において金賞を受賞して以降、入選・入賞を重ねた。昭和二十二年（一九四七）歿、七九歳。

井口華秋 いぐちかしゅう

日本画家。京都（大阪とも）生。名は陣三郎。別号に鸞懷莊主人。竹内栖鳳に師事し、西山翠峰・西村五雲とともに栖鳳塾の三羽鳥と称された。内国勸業博覧会・文展等で活躍。池田桂仙・林文塘らと日本自由画壇を結成した。昭和五年（一九三〇）歿、五〇歳。

池田孤邨 いけだこそん

江戸後期の江戸琳派の絵師。越後国水原生。名は三信、三辰。字は周一。別号に旧松軒・画戦軒・久松軒など。若くして江戸へ出て酒井抱一に師事した。琳派にとどまらず中国の明画様式を取り入れるなど、その作風には新鮮な表現もみられる。兄弟子の鈴木其一と並び双璧と称された。書画の鑑定や茶道、和歌にも通じたという。門下に野沢堤雨など。慶応四年（一八六八）歿、六六歳。

池大雅 いけのたいが

江戸中期の文人画家。京都生。姓は池野。幼名を又次郎、通称は秋平。名を勤・無名、字は公敏・子職・賞成・載成。号は大雅、露樵など多数。一五歳で扇屋を構え、扇子に絵を描いて生計を立てた。柳沢淇園・祇園南海らから教えを受ける。一方で、船載の木版画譜類を通して中国南宗画を独学。日本画の伝統と西洋絵画の表現法を取り入れて独特の画風を確立し、与謝無村とともに日本南画の大成者といわれている。安永五年（一七七六）歿、五四歳。妻の玉潤も画家として知られる。

猪坂直一 いさかなおかず

蚕糸業者、郷土史家。長野県上田市生。号は絹堂。蚕糸工業に従事するかたわら、信濃自由大学（のち上田自由大学に改称）を創立して当時の第一線で活躍していた学者・研究者を信州に招いた。のち猪坂織維工業社を興し、上田紬の再興に尽力した。また、郷里上田を根拠地とした戦国大名・真田氏の研究でも知られる。昭和六一年（一九八六）歿、八九歳。

石河有鄰 いしこう（いしこ）ゆうりん

日本画家。名古屋生。名は正徳。別号に両鶴軒・千石斎・園田忠監・織田杏齋に、のち山元春峯に師事した。内国勸業博覧会や絵画共進会などで受賞を重ねた。昭和二十七年（一九五二）歿、八二歳。

石崎光瑠 いしざきこうすけ

大正・昭和前期の日本画家。富山県福光生。名は猪四一。はじめ金沢で琳派の絵師山本光一に学び、のち京都に出て竹内栖鳳に師事した。写実に基づく鮮やかで装飾的な花鳥画を得意とし、大正元年第六回文展で初入選以降、文展・帝展を中心に活躍。インド・ヒマラヤで大連峰や古蹟を巡り、またヨーロッパにも外遊した。師栖鳳の没後には石崎画塾を開いて後進の育成にあたる。帝展審査員・京都絵専教授を務めた。昭和二年（一九四七）歿、六四歳。

逸然性融 いつねんしょうゆう

江戸前期の渡来禅僧。黄檗宗。浙江省生。俗姓は李氏。字は逸然。法諱は性融。号に浪雲庵王、煙霞比丘、煙霞道人。正保元年長崎に渡来して長崎興福寺の住持となり、隠元隆琦を日本に招聘して黄檗宗の発展に尽くした。画を能くし、北宗画系統の新画風を伝えて長崎漢画の祖となった。寛文八年（一六六八）歿、六八歳。

伊藤若冲 いとうじやくちゅう

江戸中期の画家。京都錦小路の青物問屋に生まれる。字は景和、斗米庵とも号す。幼少より画を好み、初め狩野派に学びのち宋元画の模写に励む。花鳥画、殊に鶏画を得意とし、飼育する鶏を熟視し描いたという。絵を求めめる人があれば米一斗をもってこれにかえたため、斗米庵と号したと伝わる。現在宮内庁で保存されている『動植綵絵』三十幅は代表作。寛政二年（一八〇〇）歿、八五歳。

犬養木堂 いぬかいぼくどう

政治家。岡山県生。名は毅。立憲改進党の結成に参加。憲政擁護を掲げ、『憲政の神様』と呼ばれる。立憲国民党政権、革新倶楽部総裁、立憲政友会総裁、文部大臣、通信大臣等を歴任し、昭和六年に内閣総理大臣となるが、翌昭和七年（一九三二）五・一五事件にて命を落とした。七八歳。

岩井江琳 いわいこうりん

江戸後期頃の画家。号は雪山、南溟。長崎派の画家岩井江雲の息子といわれる。天保初年の刊行の「江戸現存名家一覽」の画家の項に名が見られる。生歿年未詳。

隠元隆琦 いんげんりゅうき

江戸前期の渡来禅僧。福建省生。隠元は道号、法諱は隆琦。福州黄檗山万福寺で出家。密雲円悟に師事する。のち費隠通容の法を嗣ぎ、万福寺住持となる。長崎興福寺の逸然性融らに招かれて来日。摂津普門寺を経て宇治黄檗山万福寺開山となる。明の法式に則る黄檗禅を広め、後水尾天皇ら公武の厚い帰依を集めた。書・画・漢詩に優れ、黄檗三筆の一人。延宝元年（一六七三）歿、八二歳。

梅田雲濱 うめだうんびん

幕末の志士。若狭生。小浜藩士矢部義比の次男。名は義質・定明。別号に湖南・東鳩。崎門学を修め、望補軒講師として京都に上る。幕府批判により藩を追放され、浪人となる。尊王攘夷を唱え、その指導者的立場となり、將軍継嗣問題では一橋派に与し、安政の大獄で捕らえられた。安政六年（一八五九）歿、四五歳。

浦上玉堂 うらかみぎょくどう

江戸後期の文人画家。備前生。名は孝弼、字は君輔、玉堂は号、通称兵右衛門。春琴は子。岡山藩に仕える。若年より詩文に親しみ、のち脱藩、琴を携えて子とともに遊歴。田能村竹田・木村兼葎堂・谷文晁・岡田米山人ら当代の文人たちと交わる。晩年は京都に定住。氣韻あふれる自由奔放な山水を描く。文政三年（一八一〇）歿、七六歳。

榎本武揚 えのもとたけあき

幕末・明治の幕臣・政治家・子爵。江戸生。通称は釜次郎、号は梁川。オランダに留学後、幕府の海軍副総裁となる。明治維新では五稜郭にたてこもり、官軍に抵抗し降伏。のちに許され、特命全權公使としてロシアと樺太千島交換条約を締結。海軍卿・農商務相・通信相・文部相・外相を歴任。徳川育英会育英農科設立（のちの東京農業大学）明治四一年（一九〇八）歿、七三歳。

円満院祐常 えんまんいんゆうじょう

江戸中期の僧。三井寺円満院三十七世。法諱は祐常、号は月渚・素円・由清。父は関白一条吉忠、母は栄子内親王。大僧正。若年期の円山応挙を支援して大いに影響を与え、また自身も応挙から絵を学んだ。安永二年（一七七三）歿、五一歳。

黄檗柏樹子 おうばくはくじゅし

黄檗宗の僧。幼名は琢磨。法諱は暁森。号は銘鉞室。万福寺四十四代管長。出家後して臨濟宗の蘇山玄高、懶翁文常らに学ぶ傍らで国字、和歌を学ぶ。豊前の養徳院住職、東京盲啞学校教諭を務めた。大正一四年（一九二五）歿、九〇歳。

大久保一丘 おおくほいつきゅう 24

江戸後期の絵師。諱は好古、好徳。字は敏夫。通称は惣次郎。別号に伯隣、王江瀟。生年は天明年間頃。文化から安政年間遠江国横須賀藩の御用絵師として活躍した。司馬江漢に学び、洋風画の影響を受けた。真人図と称される人物画で名を残した。一時蘭学者・高森親好の養子になっていた。安政六年（一八五九）歿、享年不詳。

大隈重信 おおくましのぶ 120

明治～大正の政治家。肥前生。初名は八太郎。幕末、長崎でフルベッキに英学を学び、京都や長崎に往来して尊王派として活動した。維新後は明治政府の徴士参事兼、外国官知事、大蔵卿、参議などを歴任した。のち、立憲改進黨を創立し総裁となる。伊藤内閣・松方内閣の外相を経て板垣退助らと共に憲政党を結成し、日本初の政党内閣を組織。薩長藩閥以外からの初の内閣総理大臣となった。早稲田大学創設者、初代総長。大正十一年（一九二二）歿、八四歳。

大倉好齋 おおくらのこさせい 20

江戸後期の古筆鑑定家。京都生。大倉汲水の長男。姓は菅原、名は信古。号に古昔園。紀州徳川家に仕えた。嘉永四年（一八五二）法橋に叙せられる。文久二年（一八六三）歿、六八歳。

大田垣蓮月 おおたがきれんげつ 109/126

幕末～明治の歌人。京都生。名は誠、伊賀上野城代家老職藤堂新七郎良聖の庶子といわれ、生後すぐに京都知恩院の寺士大田垣伴左衛門光古の養女となる。丹波亀山城主松平家に奉公。歌道を千種で学び、武芸にも長じた。夫との死別を経て剃髪し、蓮月尼と称した。養父を亡くして以降、京都岡崎・粟田・大原・北白川などを転々とし、急須・茶碗などを焼いて生計を立てた。その自作和歌を書きつけた陶器は「蓮月焼」と称される。富岡鉄斎は蓮月尼老年の侍童であり、頼三樹三郎・梁川星巖・梅田雲浜や維新志士とも交流があった。明治八年（一八七五）歿、八五歳。

岡田華郷 おかたかきょう 132

日本画家。東京生。名は源次郎。別号に拈華莊。吉川霊華に師事し大和絵を学んだ。昭和五十六年（一九八一）歿、八九歳。

岡本豊彦 おかもととよひこ 15

江戸後期の絵師。備中生。字は子彦、通称を司馬、号に蘭村・鯉喬等。呉春のもとで研鑽を積み、山水・人物画が特に優れたことで知られる。松村景文と四条派の双璧を成し、「花鳥は景文、山水は豊彦」と称された。他同門には柴田義重・小田海徳など、呉春の死後は、澄神社と呼ばれる画塾を開き、その門人からは柴田是真・塩川文麟・田中日華らが出た。弘化二年（一八四五）歿、七三歳。

奥谷秋石 おくたにしゅうせき 129

日本画家。大阪生。名は常次郎。若くして森寛齋の門に入り、円山派の画風を学ぶ。山水画を能くし、青年絵画協会や日本絵画協会等で受賞を重ねた。家塾を開いて門弟の養成に尽くし、明治・大正・昭和初期の京都画壇に重きをなした。森寛齋画の鑑定家でもあった。昭和十一年（一九三六）歿、六五歳。

槐園（鮎貝房之進） かいえん（あゆかいふさのしん） 117

言語学者、歴史学者、歌人。号は槐園。陸前国気仙沼生。東京外国語学校朝鮮語学科卒。兄落合直文が結成した短歌結社浅香社で与謝野鉄幹と共に活躍。朝鮮に渡って京城に五つの小学校を創設しその総監督を務める一方、実業家としても活躍して朝鮮総督顧問も務めた。朝鮮考古学、民俗学的研究にも力を注いだ。昭和十二年（一九四六）歿、八二歳。

甲斐庄楠音 かいのしゅうただおと 80

日本画家。京都生。本姓は甲斐庄。京都美工・京都絵専卒。谷口香嶠、川北霞峰に師事。大正七年第一回国画創作協会に「横櫛」を出品した際、岡本神草の「口紅」と同時に入賞候補に挙げられるも、「横櫛」を推す村上華岳と「口紅」を推す土田斐傳とが互いに譲らず、結局竹内栖鳳の仲裁で金田和郎の「水蜜桃」が受賞し決着する。このことにより名が知られることとなった。のち同協会会員となり、解散後は岡村宇太郎らと新樹社を結成。同社も解散すると映画界に転身し、溝口健二のもとで時代風俗考証家として活躍した。昭和十三年（一九七八）歿、八三歳。

蠣崎波響 かきざきはきょう 25

江戸後期の絵師。名は広年、字は世祐、将監と称す。別号に杏雨、松前藩二代藩主松前資広の五男。三代藩主道広は異母兄。家老蠣崎広武の養子となり、江戸の藩邸で建部綾足や宋紫石に画技を学んだ。のち大原呑響の強い影響を受け、円山応挙に入門した。松前家が陸奥国伊達郡梁川藩に転封されると、家老として藩主の松前復帰に努めるとともに、創作活動を充実させた。代表作に『夷酋列像』など。文政九年（一八一六）歿、六三歳。

風早公雄 かざはやきみお 83

江戸中期の公卿。初名は公金。号は桂渚。風早家四代当主。三代当主美積の子。参議を経て権中納言。風早家の代々の当主は茶道をもつて宮中に仕えており、また香道風早流の家元でもあった。書画や和歌にも通じ、常に烏帽子袴を身に着けた正装をくすさない人物であったといふ。天明七年（一七八七）歿、六七歳。

梶原緋佐子 かじわらひさこ 81

日本画家。本名久。京都生。京都祇園の造り酒屋に生まれ、菊池契月に師事した。木谷千種、和気春光とともに契月塾の三門秀と称される。契月没後は宇田秋邸の白申社結成に参加。多くは舞妓や芸妓を題材に、京都画壇の美人画家として官展を中心に活躍した。また吉井勇に師事して和歌も学んでいる。日展特選・日展白寿賞受賞。京都市文化功労者。昭和六三年（一九八八）歿、九一歳。

片山楊谷 かたやまようこく 8

江戸中期の長崎派の絵師。長崎生。名は貞雄、通称は宗馬、別号に画禅窟など。幼い頃から絵に優れ、円山応挙はその画才を見て驚嘆し、弟子入りを請う。楊谷を友人として迎えたという。虎絵においては毛を細い線で丹念に表し、「楊谷の毛描き」と呼ばれるほどの腕前であった。享和元年（一八〇二）歿、四二歳。

勝海舟 かつかいしゅう 117/118

幕末～明治の幕臣・政治家。江戸生。旗本勝左衛門太郎の長男。名は初め義邦、のち麟太郎。維新後は安房、通称に安房守、海舟は号。島田見山に剣道を学び、さらに永井青崖について蘭学を修業のち私塾を開く。軍艦奉行。大政奉還に尽力。維新後、新政府の海軍大輔、参議兼海軍卿・枢密顧問官となる。幕末三舟の一人。明治三年（一八九九）歿、七七歳。

勝山琢舟 かつやまくしゅう 127

江戸後期の画家。京都生。本姓は安倍。名は章翰。初め山崎如流齋に狩野派を学んだのち、土佐の門に入った。天明八年（一七八八）歿、享年未詳。

狩野伊川院 かのういせんいん 26

江戸後期の狩野派の絵師。江戸生。名は栄信、号は玄賞齋。木挽町狩野家八代目。狩野養川院惟信の子。享和二年法眼に叙す。法印叙任後は伊川院と称する。水墨画の再興や、極彩色の着色画、大和絵の細密濃彩の画法の積極的な摂取など、次代養信によって展開される要素をすべて持ち合わせた。また茶道を能くし、松平不味とも親交が深かったと言われる。文政十一年（一八二八）歿、五四歳。

狩野休真 かのうきゆうしん 28

江戸中期の狩野派の画家。初め下谷御徒町狩野家の狩野玉燕孝信に、のち中橋狩野家の狩野永叔主信に学ぶ。黒川亀玉の師。享保頃の人。生歿年未詳。

狩野貴信 かのうたかのぶ 27

幕末～明治の狩野派の絵師。根岸御行松狩野家十代。名は貴信。号は晏川、皆春齋。松下隠士と称した。狩野良信の養子。父の跡を受けて根岸御行松狩野家を継ぐ。画を狩野伊川院に、和学を前田夏隆に学んだ。江戸城の障壁画を描くなど幕府の御用を勤め、維新後は文部省・博物館等に勤めた。第一回内閣絵画共進会褒状受賞。明治十五年（一八九二）歿、八四歳。

狩野融川 かのうゆうせん 105

江戸後期の絵師。名は寛信。別号に友川、青梧齋。狩野閑川の子。浜町狩野五代として父の跡を継いで奥絵師となり、のち法眼に叙せられる。和歌を加藤千蔭に学んだ。自身が手かけた朝鮮への贈呈屏風に老中が不満を示したことに憤りを感じ、下城の途中で切腹したという。そのことから「腹切融川」と呼ばれた。文化十一年（一八一五）歿、三八歳。

神坂雪佳 かみさかせつか

明治、昭和前期の図案家、日本画家。名は吉隆。京都生。画を四条派の鈴木瑞彦に、工芸意匠図案を岸光景に学ぶ。かたわら、琳派の画風を修学する。明治三四年(一九〇一)イギリスグラスゴウ博覧会に際して渡欧し、世界各地の図案の調査を行つた。帰国後は京都市美術工芸学校教諭を務め、また佳都美会を創立して工芸図案界の発展に尽力した。実弟に蒔絵師の神坂祐吉、日本画家の神坂松濤がいる。昭和一七年(一九四二)歿、七七歳。

川合玉堂 かわいぎょくどう

日本画家。愛知県生。本名方三郎。別号に偶庵。一四歳で京都に出て望月玉泉に学び、のちに円山派の幸野楳嶺に師事。二三歳で東京画壇に転じ、橋本雅邦に学び狩野派を極める。円山・四条派と狩野派を見事に融和させ、独自の画風を打ち立てた。横山大観・竹内栖鳳と共に日本画壇の三巨匠と呼ばれる。東京美術学校教授、帝国芸術院会員などを歴任し、昭和一五年文化勲章受章。昭和三年(一九五七)歿、八三歳。

河合曾良 かわいそら

江戸前中期の俳人。信濃国上諏訪生。本名は岩波庄右衛門「正字。通称は河合惣五郎。両親、養父母が亡くなったため、伊勢国長島の大智院の住職であった叔父の秀精法師を頼って長島藩に出入り。のち致仕して江戸に移り、吉川惟世に吉川神道を学ぶ。貞享年間、松尾芭蕉に入門し、芭蕉の日常生活の世話をした。『鹿島紀行』、『奥の細道』の旅に同行し、『曾良旅日記』を著した。宝永七年(一七一〇)頃没したとされる。

川端龍子 かわばたりゅうし

明治、昭和の日本画家。和歌山県生。名は昇太郎。俳人川端茅舎は弟。初め洋画を学び、白馬会、太平洋画会に所属。欧米歴遊後日本画に転じる。『会場芸術』としての日本画を主張して青龍社を主宰、画壇の雄として名を馳せた。文化功労者。文化勲章受章。昭和四一年(一九六六)歿、八一歳。

川村驥山 かわむらぎざん

書家。静岡県生。名は慎一郎。別号は醉仙居士、醉驥等。川村東江の長男。四歳の頃より父に書と漢字を学び、のち太田竹城・岡田良一郎らに学ぶ。書道研究のため度々中国に滞在した。芸術院会員。日展理事。勲三等瑞宝章受章。昭和四四年(一九六九)歿、八八歳。

川村曼舟 かわむらまんとしゅう

大正、昭和前期の日本画家。京都生。名は万蔵。山元春挙に師事。文展で特選を重ね、のち文展、帝展の審査員を務めた。春挙門下四天王の一人と言われ、師の没後は早苗会を主宰。また京都市立絵画専門学校で後進の指導にもあたった。芸術院会員。代表作に「比叡三題」「竹生鳥」など。昭和一七年(一九四二)歿、六三歳。

岸駒 がんく

江戸後期の絵師。金沢生。商家に生まれる。岸派の祖。字は眞然、号は可観堂等。狩野派・沈南蘋派・円山派などあらゆる画風を学び、折衷した。有栖川宮家・京都御所・金沢城の障壁画などを手がけ、各地の大名からの依頼も多かった。岸駒の虎と称されるほど、虎の画を得意とした。天保九年(一八三八)歿、八三歳(一説に九〇歳)。

菊池契月 きくちけいげつ

明治、昭和の日本画家。長野県生。はじめ児玉果京、京都に出て内海吉堂についたが、のち菊池芳文の塾に転じ、婿養子となる。文展を中心に活躍。京都画壇に重きを為した。菊池塾を継ぎ、後進の指導にあたる。帝国美術院会員・帝室技芸員・日本芸術院会員。京都絵画専門学校名誉教授。京都市名誉市民。昭和三〇年(一九五五)歿、七七歳。

菊池五山 きくちござん

江戸後期の漢詩人。讃岐生。名は桐孫。字は無絃。通称は佐太夫。別号に娛庵・小釣舎等。高松藩儒の父の跡を継ぎ、同藩に仕えた。柴野栗山の元で儒学を学ぶ。『五山堂詩話』で漢詩の紹介・批評を行い、詩壇に大きな影響を与えた。嘉永二年(一八四九)歿、八一歳。

北大路魯山人 きたおおろさんじん

陶芸家・篆刻家・料理研究者・書家・画家。京都生。名は房次郎。別号に魯卿。無境、夢境など。日本画家を志してその費用を書・篆刻で得やがてそれを本業とする。大正八年度大雅堂美術店を開き、一〇年に美食倶楽部を、一四年には星岡茶寮を営み、料理に適した食器を求めて昭和の初めから作陶を試みる。昭和一一年以降は陶芸に専心。多種の技法に通じ、様々な古陶を再現しつつ自由な作風を示した。昭和三四年(一九五九)歿、七六歳。

木下翠雨 きのしたすいりゅう

日本画家。鳥取生。名は謙次郎。藤田蒼石に画を学ぶ。山水、牡丹図を得意とし、また漢詩や俳句、書も能くした。春日村(現米子市春日地区)村長を務めた。昭和二年(一九二七)歿、七八歳。

木村武山 きむらぶざん

日本画家。茨城県生。名は信太郎。川端玉章に師事する。東美校で岡倉天心の薫陶を受け、新日本画運動を進める。日本美術院の結成に加わり、優れた技巧、色彩感覚を活かした壮麗な花鳥画・仏画を出品し、その中心画家として活躍した。代表作に「阿房劫火」「孔雀明王」等がある。昭和一七年(一九四二)歿、六七歳。

木村立嶽 きむらりゅうたけ

幕末、明治の画家。越中富山生。幼名は専之助。名は雅経。富山藩十代藩主前田利保の推薦により江戸で狩野伊川院・狩野晴川院・狩野勝川院に学ぶ。富山藩の絵師として取り立てられた。明治二三年(一八九〇)歿、六四歳。

倉田松濤 くらたしゅうたう

日本画家。秋田生。本名は斧太郎。幼時より角館の平福穂庵に師事。帝展入選。主に仏画、俳画を多く残している。異国会・日本美術協会会員。昭和三年(一九二八)歿、六三歳。

栗原玉葉 くりはらぎょくよう

日本画家。長崎県生。名は文子。日本女子美術学校卒業。初め大久保玉珉に、のち寺崎広業に師事する。文展・帝展で活躍。また母校の教授として後進の指導にあたった。大正一一年(一九二二)歿、三九歳。

黒田陶々庵 くらたどうどうあん

茶陶研究者。黒田陶苑創業者。愛知県生。名は領治。伊勢神宮の宮大工の家に生まれ、一四歳で銀座の川本陶器店に奉公に出る。昭和一〇年(一九三五)東京日本橋に黒田陶苑を創業。当時は北大路魯山人の陶磁器作品の専売舗であり、魯山人が自ら彫りあげた篆刻看板「風雅陶苑」を軒先に掲げていた。魯山人とは星岡茶寮の書道談話会に出会い、彼が星岡茶寮を追放されたのちも陶芸・絵画の新作展や作品頒布会などを企画した。経営の傍ら茶陶研究にも力を注ぐ。日本陶磁協会常任理事。

下条桂谷 げじょうけいこく

日本画家・政治家。米沢生。名は正雄。別号は雲庵。米沢藩士下条半兵衛の長男。海軍主計大監、海軍主計学校校長等を歴任し、明治三〇年には貴族院議員に勅選される。画は米沢藩絵師であった目賀田雲川に師事し、のち鍛冶橋狩野に入門。龍池会を起し、同会が日本美術院となった後も幹事としてその発展に尽くした。帝室博物館評議員。大正九年(一九二〇)歿、七九歳。

月舟宗胡 げつしゅうそうこ

江戸前中期の曹洞宗僧。諱は宗胡。字は月舟。号は可憩斎。俗姓は原田氏。江戶前生。万安英種や黄檗宗の隠元隆琦らに学んだのち、金沢大乗寺の白峰玄滴に参禅してその法を嗣いだ。寛文一一年大乗寺第二十六世住持となる。道元の古儀にかえることを唱え、曹洞宗の復古運動の先駆けとなった。円山道白に席を譲って京都南山城に補陀落山禅定寺を再興した。元禄九年(一六九六)歿、七九歳。

小泉檀山 こいずみだんざん

江戸後期の画家。下野生。名は斐(あやる)。字は子璋。別号に青鸞・檀森齋・斐文道人等。父は益子村鹿島神社神官の木村一正。三〇歳頃に那須郡那須村の温泉神社の小泉光秀の養子となり、同社の大宮司を継ぐ。一歳で島崎雲圃に画を学び、特に鮎図の名手として知られた。立原翠軒に経学や詩文を学び、また、翠軒の子である立原杏所に画を教えた。嘉永七年(一八五四)歿、八九歳。

後醍醐天皇 ごといてんのう

鎌倉末、南北朝初期の第九十六代天皇および南朝初代天皇。諱は尊治。後宇多天皇の第二皇子。大覚寺統の天皇。兩統迭立により実子に皇位を譲位できず、上皇になって院政を敷いて権力を握れないこと。しかし新政に失敗し、足利尊氏と対立して大和吉野へ入って南朝政権(吉野朝廷)を樹立するも、劣勢を覆すことができないまま病に倒れ崩御した。延元四年(一三三九)崩御、五〇歳。学問・宗教・芸術の諸分野でも優れた。墓所は塔尾陵(奈良県吉野郡)。

後醍醐天皇 ごといてんのう

鎌倉末、南北朝初期の第九十六代天皇および南朝初代天皇。諱は尊治。後宇多天皇の第二皇子。大覚寺統の天皇。兩統迭立により実子に皇位を譲位できず、上皇になって院政を敷いて権力を握れないこと。しかし新政に失敗し、足利尊氏と対立して大和吉野へ入って南朝政権(吉野朝廷)を樹立するも、劣勢を覆すことができないまま病に倒れ崩御した。延元四年(一三三九)崩御、五〇歳。学問・宗教・芸術の諸分野でも優れた。墓所は塔尾陵(奈良県吉野郡)。

児玉果亭 こだまかてい 51

文人画家。信州生。幼名を丑松。名は道広、字を士毅。別号に果道人、竹遷山房・果老生・果翁など。信州渋温泉で生まれ育ち、幼少より画や書を好んだ。はじめ佐久間雪窓に南蘋派を学び、のち田能村直入に文人画を学ぶ。内国絵画共進会など中央の展覧会で受賞を重ね活躍した。明治十三年郷里に竹遷山房を開き、菊池契月・青柳琴僊など多くの門人を輩出した。大正二年（一九一三）歿、七四歳。

木島桜谷 このしまおつく 67, 146

明治、昭和の四条派の日本画家。京都生。名は文治郎、字は文質、別号に響廬迂人・龍池草堂主人。一六歳で当時京都画壇の大家であった今尾景年に師事する。円山四条派の伝統を組んで写生を基本とし、山水・花鳥・人物、特に動物の描写に優れた。「最後の四条派」とも称された。儒医・山本溪愚について漢籍を学んでいたことから、故事や史実にも通じた。昭和二三（一九三三）年歿、六二歳。現在、旧邸宅が櫻谷文庫として保存されている。

小早川秋声 こばやかわしゅうせい 70, 71

明治、昭和の日本画家。兵庫県生。名は盈高、母方の九鬼子爵家で幼少期を過ごす。京都市立絵画専門学校中退後、谷口香嶠、のちに山元春挙に師事し、早苗会に参加。文展・帝展等で活躍した。頻繁に外遊し、東洋・西洋美術の研究にとめる。戦時中は従軍画家として戦争記録画を描いたが、戦後は宗教画を手掛けた。昭和四九年（一九七四）歿、八八歳。

小林一茶 こばやしいつせ 103

江戸後期の俳人。信濃生。幼名は弥太郎、号に俳諧寺・蘇生坊等。諱は信之。江戸へ出て、二六庵・竹阿に俳諧を学び、諸国を遊歴したのち帰郷。二万句以上を残した。著書に、句日記『七番日記』、俳諧集『おらが春』等。文政一〇年（一八一七）歿、六五歳。

酒井三良 さかいさんりょう 73

日本画家。福島県生。名は三郎。別号は梧水、三良子。同郷の画家坂内靑嵐に師事する。のち小川芋銭に出会い、その勧めで院展に出品し入選する。故郷の福島や晩年に住した茨城を中心に、農村の生活や自然を描いた。日本美術院監事。文部大臣賞受賞。昭和四四年（一九六九）歿、七二歳。

酒井抱一 さかいほういつ 33, 106, 107

江戸後期の絵師、俳人。江戸生。姫路藩主酒井忠仰の次男。名は忠因、字は暉真、別号に輕拳道人・鶯村・雨華庵等。法名は等覚院文詮暉真。茶人、俳人としても知られる。兄・忠以の影響により、若い頃から俳諧や茶案、書画、茶狂歌、浮世絵など様々な文化に親しみ、文化人としての素養を身につけた。三七歳で出家。その頃から宗達、光琳の築いた琳派様式に傾倒し、そこに円山・四条派や土佐派などの技法も積極的に取り入れた独自の作風を確立し始め、「江戸琳派」の創始者となる。門下に鈴木其一・池田孤軒など。文政一一年（一八一八）歿、六八歳。

酒井唯一 さかいゆいいつ 136

明治、昭和初期の画家。号に抱祝、狗禅。明治一一年（一八七八）生。道一の子で、雨華庵五世を継いだ。最後の江戸琳派画家として昭和初期まで活躍した。歿年未詳。

榊原紫峰 さかきばらしほう 133

日本画家。京都生。日本画家・榊原蘆江の次男。名は安造。京都市立美術工芸学校・京都市立絵画専門学校卒。竹内栖鳳ら京都画壇の重鎮から薫陶を受け、文展を中心に出品を重ねたのち、土田麦僊らとともに国創作協会の結成に参加。同会解散後は、特定の画壇に属さず制作を続け、生涯にわたり花鳥画を描いた。京都絵専・京都市立美大教授。日本芸術院恩賜賞受賞。昭和四六年（一九七二）歿、八三歳。

佐々木直比古 ささきなおひこ 147

美術史家。大阪生。京都市立絵画専門学校卒業。京都府立宮津高校教諭。一九六七年より山種美術館に勤務した。大正二年（一九一三）生。

佐藤一斎 さとういつさい 110, 111

幕末の儒者・漢学者。江戸生。岩村藩家老・佐藤信由の次男。名は信行。坦、字は大道、別号に愛日楼・老吾軒。大坂で中井竹山に学ぶ。林述齋について昌平坂学問所に入門、のちに塾長となり、山田方谷・佐久間象山・渡辺崋山ら多くの門弟を育てた。著書に『言志四録』等。安政六年（一八五九）歿、八八歳。

真田幸良 さなだゆきよし 110

江戸後期の信濃国松代藩の世嗣。別名は幸栄。官位は従五位下・豊後守。実父である真田幸貴が真田家に養子入りする以前に生まれたため公式上では松平定信の子とされる。のち幸貴の養嗣子となるが、家督を継ぐことなく早逝した。天保一五年（一八四四）歿、三一歳。

澤宣嘉 さわのぶよし 112

幕末、明治の公卿、政治家。号は春川・小春。京都生。権中納言姉小路公遂の三男、沢為量の養嗣子。八月十八日の政変により朝廷から追放されて長州藩へ逃亡。その後生野の変に加わる。維新後、参与・九州鎮撫総督・外国事務総督・長崎府知事を歴任した。明治六年（一八七三）歿、三九歳。

三条実美 さんじょうさねとみ 112

幕末、明治の公卿、政治家。号は梨堂。公爵。京都生。父は三条実万。八月十八日の政変で長州に下ったが、明治維新後は新政府の議定・太政大臣・内大臣などを歴任し、国家建設に尽力した。明治二四年（一八九二）歿、五五歳。

三条西季知 さんじょうにしずえとも 112

幕末、明治の公卿。通称銚丸、字は子迪、名は知、変名榎木藤一郎、号は蓬翁。父は三条西実勲。文久三年公武合体派の策略により三条実美らと長州へ下向。新政府樹立後は明治天皇の侍従として歌道を指導した。明治一三年（一八八〇）歿、七〇歳。

四条隆謨 しじょうたかうた 112

幕末、明治の公卿、軍人。公家四条隆生の子。京都生。尊王攘夷論者として朝廷権力拡大に尽くす。八月十八日の政変で一時官位を剥奪されたが、王政復古で復位。戊辰戦争で功績をあげた。のち陸軍中将、元老院議員、侯爵。明治三二年（一八九八）歿、七一歳。

司馬遼太郎 しばりょうたろう 144

小説家。大阪生。本名福田定一。大阪外国語学校（のち大阪外大、現大阪大学）外国語学部・蒙古語科卒。産経新聞社在職中『稟の城』で直木賞。『龍馬がゆく』で菊池寛賞、『坂の上の雲』翔ぶが如く、『街道をゆく』など名作・エッセイを多く遺した。芸術院会員。文化功労者。文化勲章受章。平成八年（一九九六）歿、七二歳。

島義勇 しまよしたけ 116

幕末、明治の武士、官僚。肥前佐賀藩士。字は国華。通称は团右衛門。号は榮齋、桜陰。枝吉神陽、副島種臣の従兄弟。はじめ枝吉神陽に学び、のち江戸に出て佐藤一斎に陽明学を学んだ。安政三年（一八五二）藩命により蝦夷地・樺太を視察。戊辰戦争には大総督府軍監として従軍。維新後は開拓使判官、秋田県権令などをとめたが、政府と対立し辞職。江藤新平と共に佐賀の乱を起こし処刑された。明治七年（一八七四）歿、五二歳。

下村観山 しむむらかんぜん 57

明治、昭和の日本画家。和歌山生。名は晴三郎。東京美術学校（現東京芸大）卒。狩野芳崖・橋本雅邦に学ぶ。卒業後同校助教助教授となった後、日本美術院創立に参加し、横山大観・菱田春草と共に活躍。またその再興にも尽力する。大正六年帝室技芸員。やまと絵、琳派、宋元画の手法を究めた。昭和五年（一九三〇）歿、五八歳。

寂厳 じゃくごん 96

江戸中期の真言宗の僧。備中生。俗姓は富永、字は諦乗。備中普賢院の超衆のもとで仏性戒、両部灌頂を受けた。その後諸国を歴遊し、京都蓮華峯寺の曇叔に悉曇学を学ぶ。備中宝島寺の住職となり、のち倉敷玉泉寺に移る。能書家で知られた。『悉曇字記大観』等の著作がある。明和八年（一七七二）寂、七〇歳。

白川芝山 しらかわしげん 140

江戸後期の書家・画家。淡路島生。名は景皓。通称は芳介。別号は玉蕉庵、大観堂、東山外史。天明二年（一七八二）白川宮主催の席画会で賞賛を受け、白川姓を許されたという。俳句も能くし、また出版活動も行った。晩年は京都に住した。嘉永三年（一八五〇）歿、九二歳。

白須心華 しらすしんか 135

日本画家。大分県生。名は貞、字は季鑑、号は心華。儒者白須栢園の四男。海軍省に出仕し、日清・日露戦争では軍令部に勤務した。のち官途を退いて画を志し、明治三九年には真美会委員となり、東京小石川に南画塾を設立した。昭和一四年（一九三九）歿、六七歳。

菅井梅閑 すがいばいかん 47

江戸後期の文人画家。仙台生。名は智義、岳、字は正卿。通称は岳輔。別号に東斎、梅館。仙台四大画家の一人。はじめ仙台藩絵師根本常南に就いて画を学ぶ。のち江戸で谷文晁に師事するも、長崎に来日していた清の画人江稼圃の画に出会い、長崎へ移ってその手ほどきを受けた。十数年に及ぶ長崎滞在ののち、四十余歳で帰郷するまでは大坂に住し、得意とする山水画で画名をあげた。江稼圃の弟芸閣、頼山陽、篠崎小竹ら多くの文人と交友があった。弘化二年（一八四五）歿、六二歳。

杉聴雨 すぎちようう 141

幕末・大正期の武士・子爵。周防国古敷郡生。名は重華、通称は孫七郎。号に松城、聴雨。藩校明倫館や吉田松陰に学ぶ。欧米諸国視察を経て、幕末期の下関戦争、元治の内乱などにおいては和議に奔走するなど尽力した。明治維新後には山口藩副大参事となる。宮内大輔、皇太后宮大夫、枢密顧問官などを務めた。詩書画を能くした。大正九年（一九一九）歿、八六歳。

杉本健吉 すぎもとけんきち 145

洋画家。愛知県生。京都で岸田劉生に師事。文展・日展で特選となる。「週刊朝日」に連載された吉川英治作「新・平家物語」などの挿絵画家としても知られる。国画会会員ののち無所属。平成一六年（二〇〇四）歿、九八歳。

鈴木其一 すずきいっ 21, 34

江戸後期の絵師。名は元長。字は子淵。通称は為三郎。別号に喰々、菁々、必庵、鋤雲、祝琳齋、三堂、鶯巣など。紫染を家業とする江戸中橋の町家に生まれ、その画才が認められて一八歳で江戸琳派の祖・酒井抱一の弟子となる。兄弟子の鈴木蟻潭没後、養子に入って鈴木木家の家督を継いで酒井家の臣となった。抱一の没後は一門の中でも圧倒的な存在感を示し、その作風や技法に師の影響を受けながらも、独自の色感や理知的な装飾性によって近代日本画へと続く新たな様式を築き上げた。安政五年（一八五八）歿、六三歳。

鈴木松年 すずきしようねん 131, 143

明治・大正の日本画家。京都生。名は賢。幼名は百太郎。初号は百僊。鈴木派の祖、鈴木百年の長男。父に画を学び、また曾我蕭白や岸駒に私淑した。京都府画学校の教員を務め、第一回内国絵画共进会をはじめとして受賞を重ね、京都画壇の大家として活躍。上村松園の最初の師としても知られている。曾我蕭白の再来と評され、今蕭白と称される。晩年には祇園白川畔に大画室鶴寿軒を構えた。大正七年（一九一八）歿、七〇歳。

須田剋太 すたごくた 63

洋画家。埼玉県生。本名は勝三郎。独学で画を学び、文展・日展等で受賞を重ねるが、のち抽象画に転向。実直且つ奔放で、エネルギーに満ちあふれた作品を多く残した。司馬遼太郎の『街道をゆく』の挿絵を担当。第一四回講談社出版文化賞を受賞した。国画会会員。平成二年（一九九〇）歿、八四歳。

仙厓義梵 せんがいきぼん 98, 100

江戸後期の臨済宗妙心寺派の僧。美濃生。仙厓は字、義梵は法諱、別号に百堂・虚白等。妙心寺第一座、ついで筑前博多聖福寺一二三世の法灯を継ぐ。美濃で生まれたもの、聖福寺の住持として博多に下つて以降、疲弊していた名刹・聖福寺の復興と弟子の教育に力を注いだ。六二歳で住持職を弟子の湛元にゆずって隠居。のち湛元の遠流により住持に再任した翌天保八年（一八三七）、八八歳で没した。九州ならではの風俗画を多く残し、また狂歌も詠んだ。

宣如上人 せんによしようにん 92

江戸前期の浄土真宗の僧。東本願寺十三世。童名は長麿、別号は愚深、諱は光從。東本願寺第十二代教如の第二子。長兄尊如、次兄観如の早世により法嗣（法主後継者）となり、慶長一九年、教如の示寂により東本願寺を継承し、第十三代となる。茶事を能くした。徳川家光から寄進された土地に、石川丈山に庭園を作らせ隠居所（現、涉成園）とした。万治元年（一六五八）寂、五五歳。

曾我蕭白 そがしやうはく 4, 6

江戸中期の絵師。京都生。名は輝雄、暉一・暉鷹とも称する。字は師龍。通称を左近二郎、別号に蛇足軒・鬼神齋・如鬼等。本姓三浦。京都の商家に生まれたという。はじめ高田敬輔の画風を学ぶが、室町時代の水墨画を慕い、のち曾我蛇足に私淑して蛇足軒・蛇足十世を称する。奇矯さを誇張した個性の強い画風を確立し、また奇行の逸話も知られる。池大雅とも交友があったという。天明元年（一七八一）歿、五一歳。

即非如一 そくひにょいつ 90, 91

江戸前期の渡来禅僧。黄檗宗。福建省生。俗姓は林氏。字は即非。法諱は如一。隠元隆琦について受戒し、法を嗣ぐ。のち隠元に招かれて来日し、長崎崇福寺・宇治黄檗山に住した。能書家として知られ、隠元隆琦、木庵性瑫とともに黄檗三筆と称される。寛文一一年（一六七一）寂、五六歳。

大徳寺剛堂 だいくじこうどう 11

江戸後期の臨済宗僧。大徳寺四百二十七世。道号は剛堂。法諱は宗健。天保六年（一八三五）寂、七五歳。

高久露厓 たかくあいがい 41

江戸後期の南画家。下野生。名は微、字は子遠。通称は秋輔。別号に石窟、如樵、疎林外史など。池大雅、伊予九に私淑し、江戸で谷文晁の門に入る。日本各地を盛んに旅し、古書画の調査や模写を行って南宗画を探索した。晩年は江戸に住み、関東文人画家らと交遊した。なかでも同門の渡辺華山が蚕社の獄で投獄された際には、椿椿山・立原杏所らとともに救出に尽力したという。天保一四年（一八四三）歿、四八歳。

高橋草坪 たかはしそうへい 135

江戸後期の南画家。豊後生。名は雨。通称は元吉。字は沢民、六田。別号は錦江外史。田能村竹田に入門し師の旅に同道し各地を巡る。師の竹田や浦上春琴、篠崎小竹等に画才を認められていたが、病により早逝した。天保六年（一八三五）頃歿、三三歳。生没年には諸説ある。

高橋泥舟 たかはしでいしゅう 118

幕末・明治の幕臣・槍術家。江戸生。槍術家山岡静山の弟。本姓は山岡、名は政異、字は寛猛、通称謙三郎。精一。兄静山について修行し、幕府講武所槍術師範のちに遊撃隊頭取となり徳川慶喜の護衛にあたった。維新後は東京に隠棲。勝海舟、義弟の山岡鉄舟と並び、幕末三舟と称される。明治三六年（一九〇三）歿、六九歳。

高森森蔵 たかもりさいかん 41

明治・大正の日本画家。近代南画の大家。千葉生。名は敏、字は子訥。通称有造。別号に自知齋、七松、射谷、菊染など。江戸にでて服部蘭台に儒学を学び、一七歳で渡辺華山の高弟山本琴合に師事して文人画を学んだ。山水花鳥画を得意とし、南宋画の鑑識・鑑定家としても一目置かれた。南画会の結成に参加。日本美術協会会員。大正六年（一九一七）歿、七一歳。

竹内栖鳳 たけうちせいほう 61, 62, 146

日本画家。京都生。本名恒吉。最初は棲鳳と号す。別号に霞中庵、一七歳の時に四条派幸野棟嶺の私塾へ入門。その才能を開花させ、棟嶺四天王の筆頭と呼ばれるようになる。京都府画学校卒。東の横山大観と並び称される京都画壇の重鎮である一方、後進の指導にも積極的に取り組んだ。画塾『竹杖会』を主宰し、門下には上村松園や西山翠嶂をはじめとして土田麦僊や小野竹高、橋本関雪など、そうそうたる面々が並ぶ。昭和一二年（一九三七）第一回文化勲章受章。昭和一七年（一九四二）歿、七八歳。

田近竹邨 たぢかちくそん 139

明治く大正の南画家。豊後国竹田生。国学者田近陽一郎の次男。名は岩彦。字は無逸。士静。竹邨は号、別号に一葉荘、白砂園、碧玲瓏居など。初め郷土の画家淵野桂傳（藤野桂傳）に南画を学び、のち京都に出て京都画学校において田能村直入に入門。小室翠雲・山田介堂らと日本南画院を創立し、大正期南画壇の発展に尽力した。大正十一年（一九二二）歿、五九歳。

達如上人 たつによしようにん 94

江戸後期浄土真宗の僧。東本願寺二十世。童名は光養鷹、別号に愚泉、諱は光朗。東本願寺第十九代乗如の第五子。父・乗如の示寂にともない、第二代法主を継承。数度にわたり消失した東本願寺本堂の再建に尽力した。慶応元年（一八六五）寂、八八歳。

田中塊堂 たなかかいどう 102

書家。岡山県小田郡生。名は英市。川谷尚亨に師事し書を学んだが、かなは独学で古筆を研究。それまで細字に限られていた仮名の表現範囲を広げ、現代仮名書壇の基礎を築いたことで知られる。また古筆・古写経の調査・研究にあたり大きな成果をあげた。日本芸術院賞受賞。毎日書道展名誉会員・日展参与。帝塚山学院大学教授。昭和五年（一九七〇）歿、七九歳。

田中柏陰 たなかはくいん 54

日本画家。静岡県生。本姓は中川、通称は啓三郎。別名を馨、字を淑明、号は柏陰・静麓・柏舎主人・柏樹子・孤立・空相居士。明治一六年、一七歳で京都に出て田能村直入に南画を学び、田能村竹田系の南画の画風を受け継ぎ、濃彩の山水画を得意とした。のちに妻の実家である防府市右田の田中家へ養子として入って田中柏陰を名乗る。以降、画塾・画禅堂を開き多くの後進を育成し、関西西南画壇の重鎮として活躍。竹田系統鑑定家の第一人者でもある。昭和九年（一九三四）歿、六九歳。

谷口香嶺 たにぐちこうきょう 66

日本画家。大坂生。旧姓は辻、本名は雅秀。幼名は槌之助。別号に後素斎、羅浮山人、藤原雅秀など。幸野棟嶺塾に入門し、菊池芳文、竹内栖鳳、都路華香とともに棟嶺門下の四天王と称される。有職故実に精通し、特に歴史画を能くした。京都市美術工芸学校、京都市立絵画専門学校で教鞭を取って後進の指導にもあたった。門下に猪飼嘯谷、野長瀬晚花など。大正四年（一九一五）歿、五二歳。

谷文晁 たにぶんちよう 38, 97, 137

江戸後期の文人画家。江戸下谷根岸生。名は正安。はじめ号は文朝・師陵、後に文晁とし字も兼ねた。通称は文五郎または直右衛門。別号には写山楼・画学齋・無二・一恕。幼い頃から文才に優れ、和歌や漢詩にも通じた。大和絵諸派の画風を学び、中国絵画の影響を受けながら諸画法を折衷した新画風を確立。江戸文人画壇の重鎮となる。画塾写山楼からは渡辺華山・立原杏所など多くの門人が出た。天保一一年（一八四〇）歿、七九歳。

田能村直外 たのむらちよくがい 139

日本画家。京都生。田能村直入の曾孫。田中柏陰に師事した。平成九年（一九九七）歿、九三歳。

田能村直入 たのむらちよくにゆう 139

江戸後期く明治の南画家。豊後生。字は顧絶、初め小虎と号し、のち直入と称する。別号に徳懋・竹翁・醉茗等。田能村竹田に学び、竹田にその才能を認められ養嗣子となる。南宗画学校を開くなど、南画壇の向上に尽力した。明治四〇年（一九〇七）歿、九四歳。

張月樵 ちようげつしやう 16

江戸後期の文人画家。近江生。諱は行貞、字を元啓、通称を晋蔵。別号に醉霞堂。彦根城下の表貝師の家に生まれる。長じて京に上り松村月溪に師事。月樵の号を与えられる。心拳門下の長沢芦雪と特に親しかったという。名古屋に住し、藩命により城内の杉戸・襖・屏風等を描いて用人支配となり、帯刀を許された。天保三年（一八三二）歿、六一歳。

都路華香 つじかこう 146

日本画家。京都生。本名は辻宇之助。幸野棟嶺に師事。竹内栖鳳・菊池芳文・谷口香嶺らと共に棟嶺門下の四天王と称され、近代京都画壇の隆盛を支えた。帝展審査員、帝國美術院会員。また京都市立絵画専門学校、京都市美術工芸学校で教鞭をとり、後進の指導にもあたった。昭和六年（一九三二）歿、六二歳。

椿椿山 つばきんざん 39, 40

江戸後期の文人画家。江戸生。名は弼、字は篤甫、別号に琢華堂・休菴・羅漢等。世襲して幕府の槍組同心を務める傍ら、画を金子金陵・渡辺華山に師事する。のちに辞職、画業・字問に専念した。俳諧・煎茶にも通じた。琢華堂を開き、広く門人を受け入れた。代表作に「渡辺華山像」。安政元年（一八五四）歿、五四歳。

遠山友祿 とよやまとよし 27

江戸後期の大名。苗木藩主遠山家第十二代。初名は友祥。号は混々斎。遠山友寿の三男。奏者番、若年寄などを務めた。維新時には新政府の方針に従い廢仏毀釈を徹底させた。明治二七年（一八九四）歿、七六歳。

徳川家康 とくがわいえやす 87

戦国く安土桃山期の武将・戦国大名。江戸幕府初代將軍。岡崎城主松平広忠の長男。幼名は竹千代、のち元信・元康、院号を安国院。織田信長と結んで駿河を豊臣秀吉と和して関東を支配した。豊臣氏五大老の筆頭。秀吉の死後、石田三成を関ヶ原の戦いに破り、慶長八年征夷大將軍となって江戸に幕府を開いた。大坂冬・夏の陣で豊臣氏を滅ぼし、名実共に天下を統一して江戸を世界最大の城郭都市にする礎を築いた。元和二年（一六一六）歿、七五歳。

土佐光起 とさみつおき 9

江戸前期の土佐派の絵師。和泉堺生。光則の子。幼名は藤満丸。室町末期、光元以来途絶えていた宮廷の絵所預職に復帰、狩野派や宋元画等諸派の画風も摂取して江戸時代の土佐様式を確立し、土佐家中興の祖とされる。法橋、法眼に叙す。元禄四年（一六九一）歿、七五歳。

土佐光貞 とさみつただ 127

江戸中後期の土佐派の絵師。土佐光芳の次男。幼名茂松丸。字は士亭、号は廷蘭。宝暦四年分家。宗家の兄とともに禁裏絵所預となる。従四位下に叙され、左近衛將監・土佐守に任じられる。寛政二年の内裏造宮にあたって宗家の土佐光時を助け、障壁画の制作に携わった。文化三年（一八〇六）歿、六九歳。

富田溪仙 とみたけいせん 65

明治く昭和の日本画家。福岡県生。名は鎮五郎。字は隆鎮。別号に雪山、溪山人など。はじめ狩野派を学び、京都に出て四糸派の都路華香の門に入る。のち仙厓義梵、富岡鉄斎に傾倒し、また奈良・平安朝の仏画をも研究した。横山大観に認められ、大正四年日本美術院同人となる。駐日フランス大使であった詩人のポール・クローデルや、俳人河東碧梧桐との交流も知られている。昭和二年（一九三二）歿、五八歳。

富田豊彦 とみたとよひこ 122

国学者、神職。飛騨高山生。幼名は銀之丞。号は文坡。祖父の礼彦や佐々木弘綱、山崎元雄などに国学や和歌、漢学などを学ぶ。日枝神社社司、妻太中学教諭などを歴任した。昭和十五年（一九四〇）歿、八一歳。

富安風生 とみやすふうせい 73

俳人。愛知県生。名は謙次。東大法学部卒。通信省に入り、昭和二年通信次官をもつて退職。俳句は高浜虚子に師事。『若葉』を主宰した。読売俳壇選者。芸術院賞受賞。芸術院会員。昭和五四年（一九七九）歿、九三歳。

外山光美 とやまみつね 10

江戸中後期の公卿。歌人。初名は資幹。鳥丸光胤の子。外山光任の養嗣子となり、義兄光時の跡を継ぎ、権中納言を経て、正二位に叙せられる。和歌に秀で、門人に国学者の塙保己一や肥前島原藩家老の板倉右衛門ら。文政四年（一八二二）歿、六六歳。

豊臣秀吉 とよとみひでよし 86

安土桃山期の武将。尾張中村生。幼名は日吉丸。初名は木下藤吉郎。織田信長に仕官し、戦功をたてて名を羽柴秀吉と改めた。信長の死後「中国大返し」により京へ戻って山崎の戦いで明智光秀を討ち、ついで四国・九州・関東・奥州を平定して天下を統一、太閤に至った。太閤検地や刀狩令、惣無事令、石高制などの政策により幕藩体制の基礎を作った。明国征服を志して朝鮮へ出兵するも、その最中の慶長三年（一五九八）病没、六三歳。茶の湯など文化活動も盛んに行い、桃山文化を開花させた。

長沢芦洲 なかさわろしゅう 17

江戸後期の絵師。名は鱗。字は吞江。別号に芦舟、南曉。丹波国国領もしくは姫路の生まれといわれる。長沢芦雪に円山派を学び、その養子となる。京都柳馬場四条上に住した。人物・花鳥を能くし、息子の長沢芦鳳が跡を継いだ。弘化四年（一八四七）歿、八一歳。

長沢芦雪 なかさわろせつ 2, 3, 12

江戸中期の絵師。山城国淀生。名は政勝・魚。字は永計・引楯。通称は主計、別号に干洲漁者・干綱。円山応挙の門下に入るが、幾度となく破門されたとの説も残る。しかし応挙はその才も認めており、天明六年和歌山県無量寺の落成にあたり、親しい住職に記念の作を届けるため芦雪を大抜擢したという。芦雪はそこで自身の才能をいかんなく発揮、串本に多くの作品を残した。画風は自由奔放、奇抜そのもので、同時代の曾我蕭白、伊藤若冲とともに「奇想派」と言われる。寛政十一年（一七九九）歿、四五歳。

長田雲堂 なかたうんどう 53

画家。越前生。名は彝。長崎に遊び、鉄翁祖門に南画を学ぶ。大正十一年（一九二二）歿、七四歳。

中村梅庭 なかむらばいてい 138

日本画家。愛知県生。名は竹四郎。毛利梅友に師事し、山本梅逸を慕ったという。日本南画院に入選した後は無所属で活動。菁々会、竹影会の会長を務めた。山水・花鳥を得意とした。平成三年（一九九一）歿、八一歳。

鍋島閑叟 なべしまかんそう 115

幕末の大名。肥前佐賀藩第十代藩主。名は齊正、のち直正。号は閑叟。茶雨、紫水など。信濃守、肥前守。九代藩主斉直の子。「佐賀の七賢人」の一人。藩財政の改革のため殖産興業や軍備の強化に努める。長崎の海防を強固にするため大砲の鑄造や反射炉の設立に力を入れ、西洋文明も積極的に採用した。ペリー来航時は攘夷論者であったが、のち公武合体に尽力し、明治維新後は議定・開拓使長官などを歴任した。明治四年（一八七二）歿、五八歳。

錦小路頼徳 にしぎのこうじよりのり 112

幕末、明治の公卿。字は一貫。号は翠園。唐橋在久の子として生まれ、のち錦小路頼易の養嗣子となる。尊皇攘夷派として活躍した。八月十八日の政変によって失脚し、三条実美らとともに長州へ逃れる。官位を剥奪され、上京の機を待つが、元治元年（一八六四）下関にて病没、三〇歳。没後、王政復古時に官位を復され、明治三年に正四位を贈られてゐる。

西山完瑛 にしやまかんえい 46

幕末、明治の四條派の画家。大坂生。名は謙。字は子受。通称を謙一郎。父の芳園に画を学び、また儒学を後藤松陰に学んだ。播磨明石藩に仕え、人物・花鳥画を能くした。明治二〇年（一八九七）歿、六四歳。

西山翠嶂 にしやますいしゅう 146

日本画家。京都生。名は卯三郎。京都市立美術工芸学校卒。竹内栖鳳に師事し、後に女婿となる。文展・帝展に出品を重ね活躍。審査員にもなった。京都市立絵画専門学校教授、同学校校長を務め、また私塾青甲社を主宰。堂本印象・中村大三郎・上村松篁らの画家を輩出した。帝國芸術院会員・帝室技芸員。文化勲章受章。昭和三年（一九五八）歿、七八歳。

貫名松翁（海屋） ぬきなすうおう（かいおく） 93, 102, 135

江戸後期の書画家。儒者。徳島生。本名苞。字は君茂。子善。別号に松翁。須静山人等。儒学を中井竹山、画を鉄翁祖門、書を西宣行に師事。空海を慕う。諸国を遊歴、書風を確立した。幕末の三筆の一人に挙げられる。須静塾を開き儒学を教える。文久三年（一八六三）歿、八六歳。

根本幽岫 ねもとゆうが 7

江戸後期の絵師。因幡鳥取城下町の商家生。幼名は重三郎。別号に鷲峯。江戸に出て鳥取藩絵師の沖一岫に師事、のち藩の御用絵師に取り立てられる。師の一岫と同様、各画法に通じて多様な作品を残している。鳥取で亀井琴嶺、河田翠涯、藤岡神山ら多くの門弟を育てた。弟で門人でもある根本雪岫を養子に迎えた。慶応三年（一八六七）歿、四四歳。

野口幽谷 のぐちゆうこく 52

幕末、明治の南画家。江戸神田生。名は績。通称は巳之助。幽谷、和楽堂などと号した。椿椿山の画塾琢華堂で学び、花鳥画を能くした。師の没後は寺子屋を開き子供たちを教えた。明治に入ってから欧州の博覧会をはじめ国内勧業博覧会・絵画共進会などに出品し、また宮中の御用画もつとめるなどして明治南画壇で活躍した。明治二六年帝室技芸員。生涯を丁髷で通したことも知られる。門下に松林桂月がいる。明治三一年（一八九八）歿、七四歳。

野村雪江 のむらせつこう 15

日本画家。熊本生。野村文孝の養嗣子。旧姓は宮原、名は初喜。寛。はじめ近藤樵仙に学び、のち村瀬玉田に師事する。花鳥画、特に馬の絵を得意とした。日月会会員。日本美術協会委員。日本画会評議員。昭和三十一年（一九六二）歿、八七歳。

野呂静のろしず 50, 51

事業家。岐皇生。兼松徳助の次男。御嵩町の名家であった野呂房右衛門の養子となる。明治四〇年に御嵩町長となり、大正八年まで務めた。鳳来寺鉄道・東美鉄道の監査役、三重モーター入社長、昭和自動車取締役などを務め、大正五年頃からは名古屋に居を構えつつ幅広く活躍した。書画や長唄、写真に興味とし、川合玉堂と懇意だったという。昭和七年（一九二二）歿、九二歳。

幕末七卿 ばくまつしちきょう 112

文久三年（一八六三）の八月十八日の政変において、京都を追放され長州藩へと落ち延びた尊王攘夷派の七人の公家。三条実美、澤宣嘉、錦小路頼徳、四條隆調、壬生基修、三条西季知、東久世通禧の七人。

英一蝶 はなぶさいつちょう 14, 20

江戸中期の絵師。京都生。名は信香。剃髪後に多賀朝湖と名乗る。字は駿。通称を助之進、号に朝湖・牛磨・翠養翁等。名を英一蝶。画号を北窓翁に改めたのは晩年、流罪を赦されて江戸に帰ってから。寛文六年頃に一家で江戸へ移り、周囲に絵描きとしての才能を認められて狩野安信に学ぶのが破門。その一方、暁雲の号で俳諧師としても名高く、宝井其角、松尾芭蕉らと交友を持った。その後は入牢、三宅島配流と二度の憂き目に遭いながらも江戸に帰還。人気絵師として数々の大作を手がけた。享保九年（一七二四）歿、七一歳。

原在泉 はらざいせん 72

明治、大正の日本画家。京都生。日本画家原在照の養嗣子。字は子昆。別号に松濤。禁中絵師をつとめる原派四代目として二三歳から御用に加わり、明治維新後は京都画壇の中心的存在となつて東京、京都における主要博覧会や展覧会などに積極的に尽力、出品した。京都府画学校教諭を務めた。大正五年（一九一六）歿、六八歳。

原在中 はらざいちゅう 10, 128

江戸中後期の画家。京都生。名は致遠。字は子重。別号に臥遊。石田幽江、のち円山応挙に学んだといわれる。寺々を訪ねて元明の古画を独学。さらには写生を基調に、土佐派や円山四條派、岸派などを融合した精密な装飾的画風を生み出し、原派と呼ばれる一派を形成した。有職故実の研究にも優れ、有職人物画を得意とした。天保八年（一八三七）歿、八八歳。

原田西晴 はらだせいちゆう 72

篆刻家。漢詩人。安芸生。名は隆。字は子隆。京都で尊攘派志士として活躍し、維新時には品川砲台長を務めた。明治に入って司法省に入省して検事となり、のち長野県の松本裁判所上席検事を務めたあと京都に住して銜鑄生に学び、篆刻家、漢詩人として活躍した。

東久世通禧 ひがしくぜみちとみ 112

幕末の明治の公卿、政治家。号は竹亭・古帆軒。父は正五位下東久世通徳。八月十八日の政変で長州へ下り、のち大宰府へ。王政復古後赦免されて帰洛し、貴族院・枢密院副議長等を歴任した。岩倉遣外使節団にも随行。明治四五年（一九一二）歿、八〇歳。

土方歳三 ひじかたとしぞう 113

幕末の武士。武蔵生。諱は義豊。号は豊玉。近藤周助に天然理心流の剣術を学ぶ。文久三年新選組結成に参加し、副長として活躍した。戊辰戦争では榎本武揚に従い新政府軍に抗戦するが、函館五稜郭で戦死した。明治二年（一八六九）歿、三五歳。

日根對山 ひねのたいざん 44, 45

江戸後期の南画家。和泉国日根郡中庄村湊生。名は盛長。字は成信。小年。別号に茅海、錦林子、酔墨庵など。幼少より画を好み、はじめ岸和田で土佐派の桃田栄雲に学び、また幼馴染であった泉佐野の豪商里井浮丘の縁で大坂に出て岡田半江に南画を学ぶ。のち京都に移り貫名松翁に師事した。鉄翁祖門に私淑し、主に山水画を得意とする。明治二年（一八六九）歿、五七歳。

平尾竹霞 ひらおちゅうか 29

幕末の明治の南画家。丹波生。名は経憲。字は明卿。別号は妙々居士、半雲子。篠山藩の藩窯王地山焼陶画士平尾竹郭の長男。儒学者である渡辺弗措に学ぶも、絵を志して京都へ出る。塩川文麟のもとで円山四条派を学び、文麟歿後は田能村直入の門下となり、師と共に各地を歴遊した。京都府画学校や日本南画協会の設立に尽力し、画壇の重鎮として活躍した。昭和一四年（一九三九）歿、八三歳。

広瀬武夫 ひろせたけお 122

海軍軍人。豊後国竹田生。旧竹田藩士で裁判官の広瀬重武の次男。兄の勝比古は海軍少将。西南戦争により竹田の自宅が焼失したため、一家で飛騨高山へ転居した。攻玉社、海軍兵学校を経てロシア留学。回国駐在武官となり少佐昇進ののち帰国。日露戦争には戦艦「朝日」の水雷長として出征し、旅順港閉塞作戦に志願して戦死した。死後、中佐となり、軍神として神格化された。明治三七年（一九〇四）歿、三七歳。

広田百豊 ひろたひやくほう 78

日本画家。石川県生。本名は幸。通称は才一郎。石川県内で小学校の校長などを務めたのち、京都に出て竹内栖鳳に師事する。文展に出品し、褒状を受けるなど活躍。大正期には日本自由画壇の結成に参加した。京都後素協会・巽画会会員。昭和三〇年（一九五五）歿、七九歳。

広渡巖斐（二代） ひろわたりがんび 22

江戸後期の画家。名は湖秀。唐絵目利の広渡家を継いだのち京都で柏木如亭と親交を結び、江戸に住した。南蘋風の花鳥画や文人画風の作品を手掛けた。文政三年（一八二〇）歿、五五歳。東京の西應寺に大窪詩仏・市河米庵による墓碑が現存している。

福沢諭吉 ふくざわゆきち 121

幕末の明治の思想家。豊前中津生。緒方洪庵の適塾に学び、江戸に蘭学塾（のちの慶應義塾）をひらいた。遣欧使節に三度にわたり同行し、各国を視察。「西洋事情」を刊行し、西洋文化・思想の紹介に努めた。維新後は在野にあって、明六社への参加、「時事新報」の創刊等、活発な言論・啓蒙活動を行った。著作に『学問のすゝめ』『文明論之概略』等。明治三四年（一九〇二）歿、六八歳。

福田平八郎 ふくだへいはちろう 146

大正の昭和の日本画家。大分県生。号は素傳、九州。絵画を志し上洛。京都市立美術工芸学校、京都市立絵画専門学校卒。昭和五年中村岳陵、牧野虎雄らと六湖会を結成。また母校の京都絵専で教授を務め、後進の育成にもあたった。芸術院会員、日展顧問。大分市名誉市民。文化勲章受章。昭和四九年（一九七四）歿、八二歳。

藤野君山 ふじのくんざん 112

宮内省式部職、帝都賜菊園学舎長。伊予松山生。名は静輝。松山藩藩校明教館学寮長や江戸昌平黌舎舎長などを務めた儒者。藤野海南の子。太政官を勤めたのち、歴史研究のため各地を周遊。詩歌・文章・俳吟・書画に優れた。宮内省式部職退官後は大正天皇より賜った菊にちなんで賜菊園を主宰した。乃木希典らと親交があった。昭和一八年（一九四三）歿、八一歳。

方西園 ほうせいえん 43

清代の文人画家。安徽省生。名は濟。字は巨川・巨濟。安永寛政年間に数度にわたり来日し、谷文晁・渡辺華山などに影響を与えた。安永九年安房に漂着して長崎へ送還される際に実見した富士山を描き、話題となった。門人に真村蘆江・松浦東溪等がいる。乾隆元年（一七三六）生、歿年不詳。

細川十州（潤次郎） ほそかわじゅうじゅう（じゅんじろう） 116

幕末の大正期の武士・法制学者。土佐高知藩士。男爵。幼名は熊太郎。名は元のち潤次郎。十州と号した。土佐藩の儒者細川延平の子。藩校で学んだのち長崎で蘭学を修め、また高島秋帆に兵学、砲術を学んだ。藩命で江戸に出て海軍操練所で航海術を学び、土佐藩致道館藩書教授として子弟の教育にあたった。中浜万次郎から英語を学び、英文の世界地図翻訳も行っている。明治維新後は開成学校権判事となり、新聞紙条例や出版条例を起草。アメリカ留学後は文部省左院、正院、元老院などの要職に就いた。「古事類苑」編纂総裁。大正二年（一九一三）歿、九〇歳。

前川文嶺 まえかわぶんれい 33

日本画家。字は子綱。京都生。松村景文門下四条派の画家前川五嶺の子。父に画を学び、花鳥を能くして明治初期における京都画壇の中堅作家として活躍した。大正六年（一九一七）歿、八〇歳。

前田青邨 まえだせいそん 60

明治の昭和の日本画家。岐阜県生。本名は廉造。梶田半古門下。再興院展の中心画家。帝国美術院会員・帝室技芸員・白展審査員。東京藝大名誉教授。文化功労者。文化勲章受章。文化財保護委員会専門審議会委員。法隆寺金堂壁画・高松塚古墳壁画模写事業などにも尽力した。昭和五年（一九七七）歿、九二歳。

益頭峻南 ましずしゅんなん 52

南画家。江戸生。名は尚志。字は示徳。通称は銓太郎。益頭駿次郎の長男。陸軍兵官寮で通訳官を務める。明治八年から野口幽谷に師し、のち退官して画道に専念した。花鳥画を得意とした。東京勸業博覧会二等賞牌受賞。文展審査員。大正五年（一九一六）歿、六八歳。

松永耳庵 まつながじあん 85

明治の昭和の実業家。長崎生。幼名は亀之助。名は安左衛門。号は耳庵。東邦電力社長として活躍。「電力王」「電力の鬼」と呼ばれた。茶人、美術品蒐集家としても知られる。近代小田原三茶人の一人。昭和四六年（一九七一）歿、九五歳。

松村景文 まつむらけいぶん 19

江戸後期の絵師。字は子藻。号は華溪、通称要人。京都四条派の祖松村月溪（呉春の異母弟、兄呉春に画を学び、花鳥画をもつとも得意とした。同門の岡本豊彦とともに四条派の様式を確立し、その発展・隆盛に尽力した。天保一四年（一八四三）歿、六五歳。

丸投三代吉 まるなげみよきち 76

日本画家。姫路生。号は大挙。幼少期から絵画に親しむ。昭和一八年に徴兵され、満州で終戦を迎える。その後シベリアに抑留され、過酷な労働や飢えを経験。この経験から生きる喜びや童心に満ちあふれた楽しい絵を描くことを信条とし、独学で郷土の自然や風物を彩色豊かに描いた。平成三年（一九九二）歿、七九歳。

円山心拳 まるやまおつきよ 1, 127, 147

江戸中期の絵師。円山派の祖。丹波国桑田郡六太村に農家の次男として生まれる。一〇代の頃に京都に奉公に出た先で眼鏡絵に出会い、主人の勧めもあって石田幽汀に狩野派の画法を学び始め、画家としての頭角を現す。写生に最も重きを置いたことでも知られる。夏雲、雪江、一嘯、仙嶺、僊斎、星聚館、鴨水漁史、攘雲、洛陽仙人と号す。応門十哲を始めとした数々の門人たちの指導にもあたった。寛政七年（一七九五）歿、六三歳。

三上参次 みかみさんじ 26

歴史学者・文学博士。兵庫生。初名は三次。幸田貞助の子。三上勝明の養子となる。東大卒業後、史料編纂掛主任・東大文学部長などを歴任。『大日本史料』等の刊行に従事した。昭和一四年（一九三九）歿、七五歳。

美濃屋 みのや 146

安永元年（一七七二）から昭和二〇年（一九四五）まで京都で営業していた京漆器の老舗。寺町錦小路、のち三条寺町に店舗を構え、顧客の趣味や家格に応じた受注生産を行った。最後の当主であった第九代稲垣孫一郎氏により、試作品や商品見本が京都国立博物館に寄贈されている。

壬生基修 みぎもくしゆせ 112

幕末、明治の公卿、華族、伯爵。庭田重基の三男。壬生道吉の養子。京都生。尊王攘夷派として活躍するも八月十八日の政変で長州に逃れ、大宰府に移ったのち王政復古により新政府に参画。明治二年越後府知事、次いで東京府知事となり、元老院議員、貴族院議員を歴任した。明治三九年（一九〇六）歿、七二歳。

明治天皇 めいじてんのう 114

第百二十二代天皇。孝明天皇の皇子。京都生。幼名は祐宮。御名は睦仁。王政復古を實現。軍人勅諭・大日本帝国憲法・皇室典範の制定等により、天皇中心の立憲国家を整えた。皇后とも和歌を能くし、その詠歌は一〇万首にのぼる。明治四五年（一九一二）崩御、六一歳。墓所は伏見桃山陵（京都市伏見区）。

森狙仙 もりそせん 13

江戸後期の絵師。出生地は不詳ながらも、大坂で活躍した。名は守象。字は叔牙、初号は狙仙、のち文化四年狙仙と改める。大坂で狩野派の山本如春齋に学び、如春齋の死後は円山心拳に影響を受けて写実性を重視するようになり、猿を描かせるは並ぶものなしと賞されるまでに至った。実兄森周峰を始めとする森派の祖。周峰の子であり円山心拳の高弟でもあった森徹山を養子に迎えた。文政四年（一八二二）歿、七四歳。

森寺常安 もりでらつねやす 113

幕末の尊攘運動家。京都生。字は遜卿。三条家に仕え、安政五年三条実万に橋本左内を斡旋して入説を助けた。安政の大獄に連座して永押込めとなるが、文久二年に赦免された。明治元年（一八六八）歿、七八歳。

森蘭齋 もりらんさい 30

江戸後期の画家。越後頸城郡新井生。名は文祥、字は子慎、別号に九江、鳴鶴など。花鳥画を得意とした。同郷の画家五十嵐俊明から画を学び、二三歳で長崎に出て医学を修める傍ら、沈南蘋の直弟子熊斐に就いて画法を修めた。師の没後、大坂、のち江戸へと移り、儒官林述斎や宇都宮藩藩主戸田忠翰らと親交をもった。加賀藩御用絵師にもなっている。享和元年（一八〇一）歿、七二歳。

柳沢汎山 やなぎざわぎようざん 105

柳沢保光。江戸中後期の大名。初名は安信、保明、字は皇民。別号に岳乘庵、獄樂庵など。柳沢信鴻の長子。大和国郡山藩の第三代藩主。片桐宗幽に学んで石州流の茶の湯に通じ、松江藩主で茶人の松平治郷らと親交があった。赤膚焼を復興して陶業を奨励したことで知られる（堯山焼）。文化一四年（一八一七）歿、六五歳。

山田古香 やまだここう 118

江戸後期の書家。高松生。名は得多。書を長三洲に学び、京都に住した。嘉永五年（一八五二）生、歿年不詳。

山本空外 やまもとくうがい 124

浄土宗の僧・哲学者。広島県生。本名幹夫。東京帝国大学文学部哲学科卒。広島市の真宗門徒の家に生まれる。山形高等学校教授、広島文理科大学助教授を経て文部省在外研究員として欧米に留学。哲学を学んだ。帰国して広島文理科大学教授に就任し、のち昭和二〇年八月六日被爆した。同年九月、浄土宗管長望月信亨の下で得度。財団法人光明会上首就任のち、空外記念館が開設され理事長となる。平成一三年（二〇〇一）歿、一〇〇歳。

山本光一 やまもとくわういつ 35

江戸琳派の絵師。江戸生。名は信敬、德基。号は花明園、晴々、晴々、皓々、露露など。酒井抱一の弟子山本素室の長男。雨華庵三世酒井篤一の門人で、雨華庵四世を継いだ酒井道一は実弟。儒学者山本北山は曾祖父に当たる。明治初頭に日本の美術品や物産品を世界へ輸出した起立工商会社で鈴木其一の次男誠一や、其一人の稲垣真達らと共に製作下絵を描くなど、中心的存在として活躍した。第一回内閣勸業博覧会において漆器図案で花紋賞を受賞。のち金沢へ移り、北陸の各地で図案絵画教師として指導、また日本画や加賀友禅の若手作家の育成にあたった。門下に石崎光瑠ら。明治三八年（一九〇五）頃金沢を去ったという。

山元春拳 やまもとしゆんきよ 64, 146

日本画家。滋賀膳所生。名は金右衛門。別号に一徹居士。初め野村文孝に学び、のち森寛齋の門人となる。円山派の伝統に通暁し、風景画・山岳画に秀で、竹内栖鳳と共に京都画壇の重鎮として活躍した。別邸として琵琶湖畔に建てた蘆花浅水荘は、現在重要文化財に指定されている。早苗会画塾主宰。京都絵専教授。帝国美術院会員・帝室技芸員。昭和八年（一九三三）歿、六三歳。

山本竹雲 やまもとちくうん 140

幕末、明治の茶人・篆刻家。備前生。名は弋、字は中立。堂号は深竹軒・夢硯堂。篆刻を細川林谷に、漢字を篠崎小竹に学ぶ。茶器の鑑識も能くした。京都に住した。明治二年（一八八八）歿、六九歳。

山本梅逸 やまもとはいいつ 29, 49, 50, 138

江戸後期の文人画家。名古屋生。彫刻師山本有右衛門の長男。名は親亮。字は明卿。別号に梅佚・春園・玉禪・梅華・天道外史等。幼少の頃から画を好み、その才を認められて、尾張画壇のバトロンであった豪商神谷天遊の庇護を受けた。その天遊のもとで中林竹洞に出会い、ともに京都に出て多くの名画を模写するなどして研鑽を積んだ。頼山陽・貴名海屋らと親交があり、詩歌・煎茶・鑑識も能くした。晩年尾張藩の御用絵師となる。安政三年（一八五二）歿、七四歳。

横井金谷 よこいぎんこく 42

江戸後期の浄土宗の僧侶、文人画家。近江大津生。名は妙懂。別号に蝙蝠道人。京都金谷山極楽寺の住職となり、金谷上人・金谷老人と呼ばれた。与謝蕪村に傾倒し、その画風から紀樞亭とともに近江蕪村と称される。諸国を遊歴してのち名古屋に住し、そこで松村月溪門下の張月樵から絵を学ぶ。また自らの放浪と奇行を描いた『金谷上人御一代記』を遺している。文政七年には故郷近江に戻って大津坂本に草庵「常楽庵」を結び、その地で歿した。天保四年（一八三三）歿、七二歳。

横井也右 よこいやゆう

江戸後期の俳人。尾張生。名は時般。字は伯懐。別号に半帰庵・暮水・知雨亭・蘿隱等。尾張藩家臣横井孫右衛門家の第六代当主で大番頭・寺社奉行などを勤めたが、宝暦四年（一七五四）に致仕し知雨亭に隠棲。風流三昧の生活を送った。若い頃より俳諧を学び、画・漢詩等にも広く活躍した。天明三年（一七八三）歿、八二歳。

108

横山大観 よこやまたいかん

日本画家。茨城県生。本名秀麿。東京美術学校を第一期生として卒業。同期生には菱田春草、下村観山、西郷孤月など。当時の校長である岡倉天心を終生の師と仰ぎ、天心への排斥運動が起きると春草らとともに同校を去り、日本美術院創立に参加。朦朧体と呼ばれる新しい画風にも取り組み、海外でも高い評価を得ている。昭和二年第一回文化勲章受賞。昭和三年（一九五八）歿、九〇歳。

56

横山大玄 よこやまたいげん

日本画家。京都生。旧姓は関谷、名は善信。東美校日本画科卒。昭和初年に横山大観の夫婦養子となり、日本美術院で活躍。大観歿後は自邸を横山大観記念館として開放し、館長を務めた。院展特待。昭和五年（一九七七）歿、七九歳。

56

吉澤義則 よしざわよし のり

国語学者、国文学者、歌人。名古屋生。東京帝国大学国文科卒。広島高師教授をへて大正八年京都帝大教授。訓詁学の基礎を築いたほか、『源氏物語』や和歌の研究などで知られる。また歌人、書家としても創作活動を行った。京都帝国大学名誉教授。昭和十九年（一九五四）歿、七八歳。著作に『対校源氏物語新釈』『国語説鈴』など。

83

頼潔 らいきよし

頼山陽の次子・頼支峰の第一子。山陽の孫にあたる。名は龍三、字は庫三。漢字者。

101, 115, 140

頼山陽 らいせんやう

江戸後期の儒者・勤王家。また、歴史家、思想家、漢詩人としても活躍した。大坂生。広島藩儒頼春水の長男。名は襄、字は子成。通称を久太郎、別号に三十六峰外史。母や叔父杏坪から教育を受け、幼少時から詩文の才能を発揮。初め杏坪について広島で学び、江戸で尾藤二洲・服部栗齋に師事。のち京都に出て私塾を開き、書齋山紫水明処を営む。著書の『日本外史』は幕末の尊皇攘夷運動に影響を与え、日本史上のベストセラーとなった。中林竹洞・浦上春琴・田能村竹田・江馬細香ら多くの文人墨客と交わった。天保三年（一八三二）歿、五三歳。

101, 140

和田呉山 わたごぜん

江戸後期の僧、画家。大坂生。名は弘毅、通称は房吉。森徹山に学び、人物花鳥を得意とした。四三歳で師や妻との死別を機に仏門に入り、名を空相と改め、法諱を月心、阿闍と称した。八尾の長栄寺や京都の神光院で修行に励み、白衣観音像などを描いて民衆に施与した。明治三年（一八七〇）歿、七一歳。

109

渡辺秋谿 わたなべしゅうけい

日本画家。尾張生。尾張藩士・斎藤正高の子。伯母方の渡辺氏を嗣ぐ。名は永吉。はじめ奥村石蘭に四条派の画法を学び、のち久保田米庵に師事。京都府立画学校教授を務めたのち、故郷の名古屋に戻って仙洞画塾を開き、東海美術協会顧問として後進の育成に尽力した。昭和五年（一九四〇）歿、七五歳。

11

渡辺省亭 わたなべせい てい

幕末～大正の日本画家。江戸神田生。本姓は吉川。名は義復。通称は良助。一六歳で菊池容齋に入門し、洋風表現を取り入れた独自の花鳥画を能くした。同門には松本楓湖や梶田半古、鈴木華邨らがいる。のち起立工商会社で輸出工芸の下絵図案を描き、明治一年のパリ万博に出品で銅牌を、同一六年のアムステルダム万博では銀牌を受賞し、国内はもちろんだ欧米でも高い評価を得た。ほか木版画、雑誌挿絵も手掛けた。大正七年（一九一八）歿、六八歳。

77